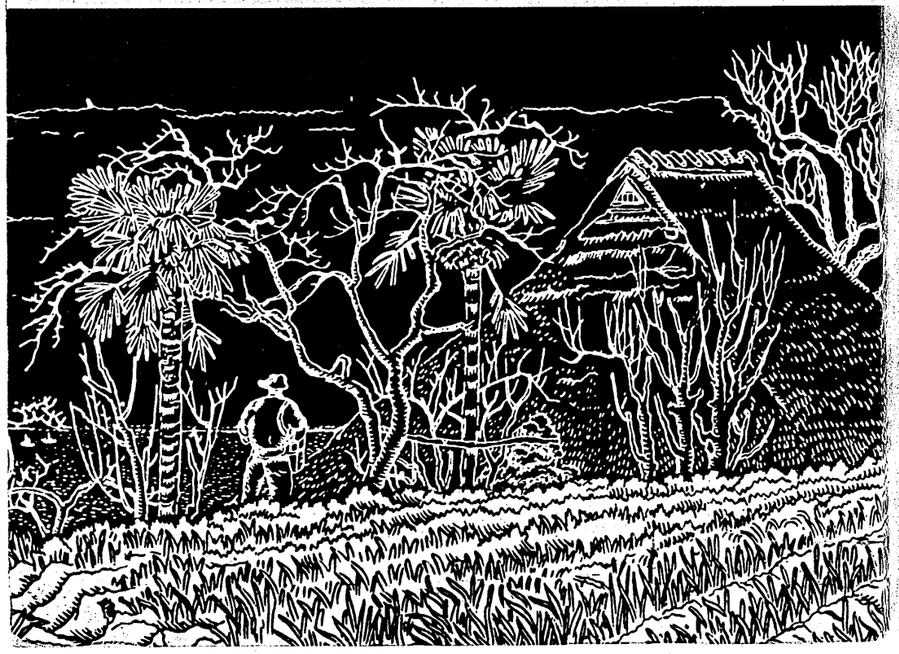
芦屋の生活文化史

芦屋の生活文化史

―民俗と史跡をたずねて―



SEKISUI JUSHI

芦屋の生活文化史

―民俗と史跡をたずねて―

自動車文庫
S.54-6.1
No. 38459
芦屋市立図書館

序　文

今日、都市の近代化の促進とともに、まちのすがたが急速度に変貌し、ともすれば古い文化財が跡かたもなく消失していく傾向が強まってきています。

昨今、新しいふるさとづくりの提唱が声高くうたわれるようになったのも、先人の生活文化の歩みを伝えるさまざまな郷土の文化財をたいせつにしながら、それらとの調和のうえに、さらに新しい郷土の文化を築いていこうとする意図からだと考えられます。

その意味で、芦屋市に住み、芦屋市の自然を愛し、災害と闘い、困難に耐えて生活を切り拓き、そのなかで喜怒哀楽をともにしながら、信仰や芸能や生産に英知を傾けてきた先人の生活文化の跡を訪ねることは、きわめて意義の深いことであります。

このたび、先年発刊いたしました「芦屋市文化財調査報告」に引きつづいて、「芦屋市史」の横糸となるような諸資料や、近年調査のものを加え、「芦屋の生活文化史」を刊行する運びとなりました。

関係者の長年にわたる地道な調査・研究・保護の努力の蓄積がようやくみのったものであり、この小冊子をお届けできることは喜びにたえません。

不備な点については、ご指摘をいただきながら、今後、なおいっそうよりよいものにしていきたいと存じます。大方のご批判ご助言をおねがいして序文といたします。

昭和五十四年三月

芦屋市教育長

芝　田　暉　治

まえがき

昭和四十九年に解体された市内のわら葺き民家を実測したことが契機となって、市教委から古い民家民具の調査を依頼された私たちは、芦屋市内にわら葺きの家屋が三棟しか残存していないことを知って驚いた。大阪と神戸の間の住宅地として、六甲南麓にはい上り大阪湾の埋立地に市域を拡げつつあるこの芦屋の都市化の速度はそれほどに急速なのである。このような進歩の時こそ、従来たどってきた道筋をふり返り未来への指針が必要とされるのだが、祖先の生活史の遺産は、今急速に消滅している。

調査中にも「そんながらくたを集めてどうするの」という声を聞いた。歴史ブームといわれても、この常民のいわば生活文化財の価値は、まだまだ認識されていない。このような身近な歴史の遺産を知っていただこうと願いながら、本書を作成した。

第二章、第三章は、民家・民具調査の報告および区画整理により消滅する春日地区の街並み調査の報告である。これに対して、芦屋の歴史をご理解いただくために、第一章では通史を略説し、第六章で市内の史跡を解説した。また第四章・第五章には、当地に伝えられていた芸能や伝説を収録した。

本書を通じて、この芦屋のわれわれの祖先たちの歴史をふり返っていただくことが少しでもできれば執筆者一同、この上ないよろこびである。

本書に関する遺漏や誤謬について、読者の方々のご教示ご叱言をお願いし、調査執筆に際してご協力下さった皆様に謝意を記して、まえがきとさせていただく次第である。

昭和五十四年三月

兵庫県立芦屋高等学校教諭
田辺眞人

芦屋の生活文化史

――民俗・史跡をたずねて――

目次

第一章　芦屋の歴史概要

1 原始……(1)
2 古代……(3)
3 中世……(4)
4 近世……(6)
5 近現代……(8)

第二章　民家・民具の調査〈芦屋市文化財調査報告第9集〉

1 動機と目的……(11)
2 組織と方法……(12)
調査組織(12)……調査の方法(12)……〈民家調査〉〈民具調査〉
3 経過……(14)
4 調査結果……(15)
民家(15)……〈分布調査〉〈阪口家住宅の調査〉〈岩田家住宅の調査〉〈宮本家住宅〉〈小阪家住宅〉……民具(29)

第三章　春日地区街並み調査〈芦屋市文化財調査報告第9集〉

1 動機と目的……(49)
2 組織と方法……(50)
調査組織(50)……調査の方法(50)……〈春日町周辺の石造遺品調査〉〈春日地区西国街道沿いの街並み復原〉
3 経過……(51)
4 結果……(52)
旧西国街道の街並み(52)……石造遺品(55)……文献に描かれた市内街道筋の風光から(64)

第四章　芦屋の芸能

1 農作業の唄……(80)
田植唄(80)……草取唄(81)……殻竿搗唄(81)……臼搗唄(82)
2 その他のしごと唄……(83)
そうめん作り唄(84)……糸紡唄(85)……はた織唄(85)……石つき唄(85)
3 祝いの唄……(86)
みこしかき音頭(86)……伊勢音頭(86)
4 遊び唄……(87)
手まり歌(87)
5 新しい民謡……(87)
芦屋音頭(87)
6 草ずもう……(88)
7 しゃこ踊り……(89)
8 だんじり……(90)

第五章　芦屋の伝説・物語

1 芦屋の菟原処女……(92)
2 金兵衛車やけぐるま……(93)
3 怪物の墓「ぬえ塚」……(94)
4 芦屋谷の鮭切り岩……(96)
5 月若と藤栄……(98)
6 雲林院……(99)
7 荒地山―七右衛門嵜……(99)
8 蛍合戦と芦屋沖の龍灯……(100)
9 六甲山の石宝殿……(101)
10 猿丸太夫……(102)
11 湯もとの薬師……(103)
12 蛙岩……(104)

第六章　芦屋の史跡

1 ナウマン象化石出土地……(105)
2 朝日ケ丘先土器・縄文遺跡……(106)
3 会下山弥生集落跡……(108)
4 城山遺跡……(111)
5 漢式三翼鏃……(112)
6 流水文銅鐸……(113)
7 金津山……(116)
8 阿保親王塚……(117)
9 八十塚古墳群……(120)
10 城山古墳群と山芦屋古墳……(122)
11 旭塚古墳……(124)
12 竈形土器と外来系氏族……(125)
13 芦屋廃寺址……(126)
14 三条岡山遺跡……(128)
15 鷹尾城跡と松若物語……(129)
16 芦屋の地名……(130)
17 在原業平別荘の跡……(131)
18 楠公戦跡碑……(132)
19 大阪城と採石地芦屋の刻印石……(133)
20 ドビワリの水争い……(136)
21 打出陣屋と神戸事件……(138)
22 有馬へのトトヤ道（魚屋道）……(140)
23 奥池と猿丸安時……(142)
24 芦屋の社寺……(145)
〈芦屋神社〉〈打出天神社〉〈岩園天神社〉〈奉納絵馬〉〈阿保天神社〉〈八幡神社〉〈日吉神社〉〈石嗣〉〈安楽寺〉〈如来寺〉〈親王寺〉〈妙福寺〉〈照善寺〉〈照楽寺〉
25 神宮寺本尊十一面観音立像……(155)
26 潮見ざくら……(156)
27 名勝芦屋の松……(157)
28 打出焼……(161)
29 旧山邑家住宅（淀川製鋼研修館）……(164)
30 精道村役場……(166)
31 鰻谷森林気象観測所跡……(167)
32 高座の滝とロックガーデン……(171)
33 芦屋市霊園……(173)
34 滴翠美術館……(175)
人口の変遷・参考文献・芦屋の歴史略年表……(178)
市内の史跡・施設案内図（原図は芦屋市広報課作成）……〈折込〉
本文図版・表・目次……巻末
執筆者・協力者紹介……〃

表紙は、児玉隆男氏スケッチブック「海郷抄」から打出丘陵の風景をとった。題字は、芝田教育長による。

芦屋の生活文化史

―民俗と史跡をたずねて―

第一章　芦屋の歴史概要

芦屋市は、阪神間の中央やや西よりに位置し、神戸市と西宮市の間に東西約二キロ、南北約七・五キロの市域をもっている。六甲山と大阪湾の間にひろがる市域の西部を南流する芦屋川は、衝上断層の活動でたえず若返りながら市の北部山間五キロに深いV字谷を刻み、南麓部に扇状地を生み天井川となって海に注いでいる。この芦屋川や宮川に潤おされて、山麓部や海岸の平地に、今日七万五〇〇〇人あまりの市民が生活している。

1　原　　始

旧石器時代のナイフ形石器・刃器・尖頭器が、芦屋病院の南・朝日ケ丘町の丘陵で発見され、今から約一万三千年前の氷河時代にすでに人類がこの地に生活していたことがわかる。さらに古くヴュルム氷期の前半、わが国が大陸と地つづきだったころ渡来したと思われるナウマン象の化石が、芦有道路の料金ゲート付近で出土している。

この朝日ケ丘遺跡からは、また爪形文・刺突文など早

い時期の前期縄文土器が出土し、百本以上の石鏃・投弾・皮はぎ用の石匙などは、今から八千年ほど昔の狩猟生活のようすを教えてくれる。同様の石器類は岩ケ平の一帯でも採集されており、市の北東部の丘陵地帯は、南むきの陽あたりのよい高台で飲み水や獣にめぐまれていて、当時の人々の生活に快適なところだったのであろう。

弥生時代、稲作と定住生活をした人々の遺物は、市内各所で発見されている。山手中学の裏山にある会下山遺跡は、七棟の竪穴住居・倉庫址・祭祀址をもつ高地性集落の跡で、籾あとのついた土器、狩猟用具（石鏃・投弾）、漁撈用具（石錘や飯蛸壺）などがみつかっている。また、出土した鉄器（ノミ・ヤリガンナ・鏃・釣針など）や銅鏃など金属器の使用を示している。しかも、住居址の位置や大小、内部の炉の有無などはその頃の社会の身分の分化を考えさせる。高座川の東、城山の頂上にも同様な高地性遺跡があるが、これらについては、小国分立から地域的統一にむかうための動乱――『後漢書』にいう倭国大乱――との関係が説かれるが、はっきりとはわからない。

そのころの小国の首長が用いた祭器とされる銅鐸が、打出の楠町から出土している。

農耕生活の発展で社会に貧富の差が生じ、身分がわかれ、集落は拡大していった。その中で成長した豪族は、三世紀の後半以後、巨大な古墳を築きはじめる。

打出天神社の南の周囲を民家で囲まれた金津山は、径四四メートル、高さ四・一メートルの円墳状の丘で、前期古墳ではないかといわれているが、未発掘で詳しくはわからない。

活発な大陸文化の摂取・国土統一の進む古墳時代の中期には、河内の応神陵や仁徳陵が築かれたが、翠ケ丘町の親王塚古墳は、そのころの古墳である。径三六メートル、高さ三メートルの円墳で、江戸時代までは周囲に数基の古墳があった。ここからは七面の銅鏡がみつかり、親王寺などに保管されている。後にこの古墳を利用して阿保親王の墓域としたため親王塚の名がついている。その他、うの塚・笄塚・牛廻し塚・鞍塚など打出一帯に中

期古墳があったようである。

六、七世紀の後期古墳として山麓部に横穴式石室をもつ多くの群集墳が築かれた。市の東部では、朝日ケ丘町から六麓荘町にひろがる八十塚古墳群、市の西部・高座川流域の三条・城山古墳群があり、八十塚古墳の一部や、三条の旭塚などの石室はよく旧状が保たれている。

このような古墳に誰が葬られたのか、明らかでない。打出地方に農耕生活をした人々の墓域が、八十塚なのであろう。

2　古　　代

『新撰姓氏録』など古代の書物には、このあたりに渡来系の豪族、芦屋漢人・芦屋村主などの名がみえる。古来、芦屋の海辺を漢人の浜とよんでいるから、この地方に大陸の先進文化がもたらされて根づいていたかもしれない。渡来人系の古墳から出土することの多い竈形土器がみつかり、渡来系の石室とも思える山芦屋古墳などからみると、三条・城山古墳群は、そのような人々の墓域とも思える。

大和朝廷は、服属したそのような各地の豪族の長に姓とよぶ称を与え、氏族単位で支配圏を拡大していった。が、七世紀になると、このような氏姓制度を克服して、隋や唐にならう中央集権国家を作ろうとする動きが活発となった。それは、六四五年以降の大化の改新と律令の制定とによって結実してゆく。

律令制の下で地方に国・郡・里（のちに郷）が置かれると、摂津国の西部の六甲南麓の大阪湾沿岸は（それまでは広く葦屋とよばれていたが）夙川から生田川に至る地域が菟原郡とされた。平安時代の『和名抄』によると、市域には東部に賀美・西部に葦原（葦屋の誤記とされる）の二郷の名がみえる。この菟原郡の郡役所は地名から、神戸市御影の郡家、住吉の宝の内あたりに比定される。平安朝の記録によると、この菟原郡は戸数四三七戸、人口、一万五、六九五人という。

律令国家は公地公民の原則に立って班田を収授した。

一町四角の碁盤目状の地割を施した条里制は、当時の土地制度であるが、三条、六条（旧三条村）、一ノ坪（旧津知村）九ノ坪（旧芦屋村）などの地名は、この条里制の遺称と思われる。

平安時代には都と大宰府を結ぶ山陽道が整備され三十里ごとに駅が設けられた。『延喜式』には葦屋驛に十二疋の駅馬が記されているが、その位置はわからない。また、芦屋には奈良時代に行基が開いて栄えた報恩寺があったが、戦国時代に被害をうけて焼失したといわれていた。その寺跡と伝えられた西山町一帯には古い寺院関係の字名が残り、昭和四十二年の発掘によって、法隆寺系を含む白鳳から室町期までの多数の瓦が出土し、芦屋廃寺址と名づけられた。

奈良時代には公地公民制も動揺をはじめ、荘園が出現するが、天平十九年（七四七）の記録に、すでに菟原郡内に三十一町余の法隆寺領の水田がある。芦屋廃寺は、これに関係したものとも、一説には芦屋驛関係の建物だともとかれている。

『伊勢物語』によると、在原業平がこの葦屋に住み、兄たちと布引の滝見に出かけたとある。打出にはその実父・阿保親王が住んだと伝え、彼が黄金を埋蔵したのが金津山だという。この一族の荘園があったのかもしれない。打出神宮寺の十一面観音は、藤原時代の作風を残し、その頃のこの地方への都の文化の流入を知ることができる。

3　中　　世

律令政治のゆきづまりとともに荘園は一層発達し、地方では政治の乱れの中で武士が抬頭する。松浜公園にあるヌエ塚は、貴族から武士へ実力の移ったことを示すような源頼政の怪物退治の伝説を秘めている。鎌倉時代以降には近在に葦屋荘という荘園がみられ、皇室領ともいわれる。その一部は箕面の勝尾寺に寄進され、室町時代には北野神社領の蘆屋荘が記録されている。

芦屋の荘園を舞台とした謡曲『藤栄』では、悪い叔父

に芦屋荘を横領された月若が、民情視察の旅僧、最明寺入道（北条時頼）のたすけで本領をとりもどす物語が描かれているが、このような芦屋荘の詳細は不明である。たしかな記録としては律宗を中興した叡尊が、元寇に対する異国降伏祈願のため西大寺から播磨一乗寺へ参詣した。その旅日記に、弘安八年（一二八五）七月二十五、六日に彼が葦屋重仲・重清の館にとどまり、芦屋荘の住民に菩薩戒を授けたとある。

元寇以来、鎌倉幕府を支える武家社会は動揺し、各地で悪党とよばれる武士が活動しはじめた。一四世紀初め兵庫の港の関を襲った悪党の中に打出の有力者の名がみられる。

打出というのは、街道が海辺に出る所につく地名だとされるが、京から内陸を通ってきた山陽道がはじめて海岸に出たところが芦屋市の打出であり、交通の要所だった。幕府打倒のための元弘の変に失敗した後醍醐天皇が隠岐へ流される途中、元弘二年（一三三二）三月、打出の松原を通り、一党の中には打出の宿に一泊した者もあると『増鏡』は記している。その年末からは楠木正成らの挙兵が各地で続発し、ついに翌年、鎌倉幕府は滅亡した。

しかし、後醍醐天皇の建武新政に不満を抱いた武士はやがて足利尊氏の下に集結して蜂起し、建武三年（一三三六）一月、京都を攻略した。しかし新田義貞らに京を追われ兵庫へと敗走、そこで軍勢をたて直して再度、京へと山陽道を進軍した。そして二月十日、京より西進した楠木正成と打出で戦いをくりひろげた。楠町の町名、国道ぞいの戦跡碑はこの時の記念である。

やがて敗北した尊氏は、一旦は九州へ落ち勢力を回復して再度、東上。湊川の戦いのあと京に入って幕府を開いた。こうして吉野に逃れた後醍醐天皇の朝廷との間で南北朝の歴史が展開されてゆく。交通の要地である市域は、しばしば激しい戦いの舞台となっていく。

やがて足利方には、尊氏と弟直義との間に観応の擾乱とよぶ内紛が始まった。観応二年（一三五一）二月十七日、打出・越水・鷲林寺に陣どった直義と、御影の尊氏

との間で、打出浜に激戦が展開され、尊氏方は大敗して須磨の松岡城へと遁走した。

このような戦乱の中で、各地に土豪・地侍が成長していった。応仁の乱後、室町幕府が動揺している頃、この地方に勢力をはったのは瓦林（かわらばし）一族である。十六世紀初めこの瓦林政頼は、芦屋川と高座川との合流点の北・鷹尾山の頂に山城を築いた。灘地方と西摂平野の接点に位置し、摂津守護細川氏の臣である瓦林政頼の強力な支配をきらって、灘本庄の地侍たち三百名が、この鷹尾城を攻撃したのは永正八年（一五一一）五月のことであった。このころ、細川家に内紛が起っていた。政頼の主君細川高国に敵対する細川澄元方の尚春は、同年六月、深江に陣取って灘の地侍とともに鷹尾城を包囲した。やがて到着した高国方の援軍との間に、七月二十六日激しい戦いが開始された。世に芦屋河原の戦いとよんでいる。

うち続く戦いの中で、この地方の人々は大きな被害を受けたであろう。そのような中で農民たちの結束は強まり、生活の場として郷村が確立されてゆく。

戦国時代の末には芦屋市域では、東半分に打出、西半分に芦屋、その西部山ぞいに三条、その南の内陸部に津知といった四つの村々がほぼできあがっていた。このうち打出・芦屋は芦屋庄と称し、一方、津知・三条は西方の森・中野・小路・北畑・田辺・深江・青木とともに本庄九カ村と称して行動を共にすることが多く、山論や水論では結束して利益を守ろうと力いっぱい闘っている。このような状態の山陽道を、織田信長の軍勢が花熊城攻撃のために通過していった。

4　近　　世

やがて天下を統一した豊臣秀吉は、芦屋地方を直轄地とした。しかし、元和元年（一六一五）大坂夏の陣で豊臣家が亡びると、この地方は徳川家領となり、元和三年には尼崎藩主・戸田氏鉄に与えられた。幕府は築城の名手氏鉄に、大阪城修築を命じた。すでに秀吉の大阪築城時にも石材が切り出された当地の背山から、このたびも

大量の石が切り出されている。

戸田氏に代って寛永十二年（一六三五）青山氏が、ついで宝永八年（一七一一）には松平（桜井）氏が尼崎藩主となるが、その間つねに当地方は同藩領であった。当時村人は鎮守の社で豊作を祈り、また春に田に降りて稲をみのらせ秋には山に帰るという山の神へもあつい信仰を寄せていた。山芦屋のカラス塚にまつられていた山の神の祭りは、明治の頃まで続けられた興味ある風習で「カアカア」と鳴きまねしながら子供たちの供える団子を、その後、どのくらいで山の烏が食べてしまうかでその年の豊作を占ったものだった。また干ばつの夏には人々は芦屋川をさか上り弁天岩に雨乞いをした。そこにもめずらしい鰻切りの行事などが行われていた。それでも雨の降らぬ時には、水争いが起った。村ごとに檀那寺があって村人の信仰生活を監視し、庄屋・年寄・百姓代によって村々は自治をしている。さらに打出や野寄には、いくつもの村を統括する大庄屋があった。

寛文年間（一六六〇代）に青山氏の下で尼崎藩初の本格的検地が実施された。それによると、芦屋五三二・八八八石、打出六七四・九六七石、三条一九七・四九〇石津知一〇六・五五〇石と、各村高が計算されている。

やがて幕府は明和六年（一七六九）先進地帯灘の海岸部を天領として収公した。そのため、これ以後、芦屋・打出は天領となり、三条・津知は尼崎領として明治維新を迎えている。

このような農村地帯を二本の街道が横切っていた。東から進んできた西国街道は、打出で二本に分岐していた。一本は斜め北西に市域を横切り、今の国鉄芦屋駅の南方で国道二号線に合流し、以後この国道筋にそって西進する本街道で、松並木が繁り、大名行列が通っていた。津知には道ばたに一里塚があり、茶屋之町には茶店があったという。もう一本の街道は打出からほぼ四三号線ぞいに海辺を西進する浜街道である。

この地方は京・大阪に近く街道ぞいであるため経済的発展も早く、ことに急流芦屋川の水を利用した水車産業が栄え、菜種油絞り・精米・そうめん業が発達した。山

手町の北に残る水車谷の地名や金兵衛車やけ車の伝説などはそのなごりである。また、一帯では酒造業も発達していった。一方では江戸時代を通じて農業技術も向上し新田開発もさかんに行なわれた。打出の岩ケ平新田・浜新田、芦屋村の樋口新田、松浜新田などの開発の結果、幕末の記録によると、各村高は、芦屋六五〇・二八六石打出九四五・八三九石、三条二〇二・〇三石、津知一〇六・五八五石と増加している。その間、天保十二年（一八四一）の猿丸安時による奥山池の開さくなど、多くの溜池も築かれている。

5　近　現　代

精道村の誕生　幕府領（芦屋・打出）と尼崎藩領（三条・津知）とに二分されて近代を迎えた本市域の四か村は、慶応四年（一八六八）、前者が兵庫鎮台（改称して兵庫裁判所）の管下に入り、のち兵庫県（一次）に属した。後者は明治二年（一八六九）の版籍奉還により尼崎藩県となり、同四年の廃藩置県の断行で尼崎県の管下に属した。同年十一月、尼崎県は兵庫県（二次）に編入され、ここに四か村が初めて同一行政管下におかれることになった。

明治四年（一八七一）、区制が新設され、兵庫県（一次）において芦屋・打出二か村は第十七区に属し、兵庫県（二次）再編後は四か村が第十六区（のち第六区）に所属した。明治十一年、区制は廃され菟原郡役所の管内となり、同十三年七月から実施された連合町村戸長制によって、芦屋・三条・津知の三か村は深江村に戸長役場をおき、打出村は単独で戸長を配した。

明治二十二年（一八八九）四月、町村制施行に伴い、従前の四か村は合併、校名をとって精道村が発足し、村役場が精道小学校内に設けられた。同二十七年、兵庫県では郡制施行により武庫・菟原・八部三郡を合し、新たに武庫郡としたが、大正十二年には機能的に消滅するに至っている。

交通の発達と住宅地化　交通に関しては、明治七年、大阪神戸間の官設鉄道が開通し、大正二年には芦屋駅が

新設された。また、明治三十八年の阪神電鉄敷設に伴い、打出・芦屋駅が、大正九年の阪急電鉄神戸線の開通により芦屋川の停留所がそれぞれ開設。さらに大正三年には、村内里道の改善整備がなされて、昭和二年阪神国道が開通した。

こうした交通事情の急速な発達を背景に、明治から大正にかけて山手の丘陵地帯を中心に邸宅建設が広がり、昭和初年には広荘な住宅街が形成され、農地から宅地へと地目が著しく変貌した。また、生活環境改善事業の一環として、二度にわたって芦屋川の大改修が行なわれたが、昭和九年と同十三年の風水害により空前の被害を生じた。

村勢の発展を戸口の増加によって概観すると、精道村誕生当時の明治二十二年には五九七戸、三千二八五人であったが、昭和二年、四三〇五戸、二万七七九人と急激に上昇している。

大正以前の主要産業はやはり農業であったが、明治中期には芦屋川の余水を利用した水車による粉挽業がみられ、素麺製造などが家内工業的に営まれた。本村の乏しい産業の中で特筆すべきは牧畜乳業であり、他に酒造業・水産業もわずかながらみられた。かって川西町にあった東洋牧場を知る人は今は少ない。

市制施行と国際文化住宅都市としての発展　昭和十五年（一九四〇）十一月十日、市制施行、全国で第一七三番目の市となった。村から市へ一躍移行したことは注目すべきことであり、僅か宇部・岡谷二市の前例をみるにすぎない。当時の人口は四万一九二五人、戸数八一四七戸であった。また、同十九年には旧村時代の四大字と二〇〇余の小字名が町名に変更され、新たに四三町が成立、新番地は各町ごとに東北隅を一番とし、順次西南隅を終番とした。

第二次世界大戦の空襲によって本市も四回被災し、総戸数の約四割の家屋が焼失した。戦後はその再建復興に全力を傾注し、駐留軍の家屋接収、旧制度の改廃の下、戦災都市指定による復興土地区画整理事業を推進、隣接諸

地域との合併構想を基礎に、昭和二十六年二月には「芦屋国際文化住宅都市建設法」が公布され、独自の都市づくりを目指して邁進するに至った。昭和三十五年には芦屋川畔に新市庁舎が竣工。同三十七年五月施行の「住居表示に関する法律」に基づいて、本市も街区符号と住居番号とによって表示する方法を採用、四十三年五月より順次実施されている。

土地区画整理事業は、三十年代後半に北部が、四十年代前半には中部が着手され、現在は南の春日地区が進められている。また、昭和四十二年以来、芦屋背山グリーンベルトも着実にその完成が目指されている。

戦後は文教施策に力が注がれ、学校建設の進展により、県立高校一を筆頭に市立の小学校六、中学校二、高等学校一が整えられ、私立学校も数多くの設立をみ、また病院・霊園・奥山貯水池なども完成された。また、国際交流の一環として、昭和三十六年（一九六一）にはアメリカ合衆国のモンテベロ市と姉妹都市提携を締結。

以後「芦屋市民憲章」の制定や、「緑ゆたかなまちづくり条例」の制定、高度地区指定などは、本市の性格を特色づけるものといえよう。四十五年には「芦屋市同和対策審議会答申」があり、教育行政を通じて、その推進をはかるとともに、具体的な同和対策事業へのとりくみもはじめられた。また、市民生活の向上をめざした福祉事業への努力が続けられている。

流入による人口も激増し、二十八年に五万を越え、四十五年段階には約七万に達して県下第九位を占めている。さらに、昭和五十七年には、芦屋シーサイドタウンと称する人口約二万の新しい海浜街が完成予定である。

しかし、海浜埋立事業・交通公害・自然破壊など、市民の生活環境を守るため、解決されねばならぬ問題も多い。

第二章　民家・民具の調査

〈芦屋市文化財調査報告第九集〉

1　動機と目的

最近の急速な都市化の進展は、各地で民俗資料を急激に消滅させている。とりわけ、土・草・木を材料とするわが国の民家は、腐朽・破損しやすく、また市街地化していく地方では、農村生活は急激に姿を消しており、農業自体も機械化のすすむ中で、旧来の農具類が、近年めだって消滅しつつある。ことに阪神間の住宅地である芦屋市では、この傾向は顕著となっている。

このような情況の中で、昭和四十九年度から、芦屋市教育委員会の委託により結成された本調査グループは、市内に現存する民家と民具を対象とする調査を過去四か年にわたって続けてきた。

昭和四十九年度の調査は、まず現存する古い民家の分布調査を第一の目的とし、結局は六棟の江戸時代と考えられる建造物を見出した。その一方で、すでに市民から市教委へ寄贈されている民具についての実測を開始し、一部実測図を作ったのである。その後、市の広報を通じて市民に資料の寄贈を呼びかけた。

昭和五十年度は、以上の前年度の成果の上に立って、分布調査を継続するとともに、見出された古い民家のうち、緊急を要する一連の実測調査を実施し、収集された民具の整理と分類とを行なった。

昭和五十一年度は、以上の調査を継続する中で、新しい緊急な条件が加わった。芦屋市都市整備課による春日土地区画整理事業によって、市の東部、唯一の西国街道

のおもかげを残す一画の消滅が、まぢかに迫ってきたのである。このため、五十一年度は、(1)土地区画整理で解体される古民家の実測・聞取り調査。(2)旧西国街道の春日地区の町並みに関する記録作製。(3)市民から寄せられつつある古民具の整理と調査。そして、昭和五十二年度は、以上の調査の整理と、報告書の作成にあてられたのである。

2　組織と方法

調査組織

本民家民具調査は、芦屋市教育委員会から委託された芦屋市民家民具調査グループが担当、実施した。

〈代表者〉　田辺眞人（兵庫県立芦屋高校教諭）　〈調査員〉　位原庸太・湯浅光章・渡部永子・岩崎宏美・小泉真美（以上、阪神間各大学生）　〈調査補助員〉小倉美鈴・田渕好美・奥出津代子・神野隆光（以上、調査時県立芦屋高校生徒）

〈調査協力〉森岡秀人（芦屋市教育委員会・文化財担当）古川久雄（関西大学学生）

調査の方法

民家調査　昭和四十九年度および五十年度には、現存する古民家の分布調査を行なった。

初年度においては、住宅化進展図（『新修芦屋市史』本篇所収八九四頁、図三四一）をよりどころとして明治時代以前の村落形成地に焦点をあて、さらにそれから第二次世界大戦による空襲での被災焼失地域を除いた地区を調査対象地域とし、そのうち、実施可能な八地区を選び外観を手がかりに調査した。

五十年度には前年度未調査となった地域のうち、西山町付近を対象地区として、分布調査を継続した（付載図参照）。

調査方法は、対象地域において外観の観察を主体に街路踏査を行ない、建築年代が約一〇〇年以上前のもの、すなわち、江戸時代の建立と推定されるものに主眼を置

き、下って明治から大正期と推定される住宅も併せ調査した。

分布調査によって知られた、江戸時代建立と思われる民家のうち、代表例について実測調査を行なった。

調査は、現状の平面図、断面図作成に主眼をおき、併せて遺構の観察と写真記録を行なった。実測図は縮尺五〇分の一で統一し、断面図に関しては主屋の柱列を考慮して縦断図のみを作成した。また、並行して建立年代の手がかりを得るための聞き取りを行ない、遺構の復原につとめた。

民具調査　昭和四十九年に春日町の阪口喜蔵氏（芦屋市春日町八八（旧番地）から、また昭和五十一年二月には市内西山町一〇〇番地在住の山村哲男氏から農具類を中心とする民具寄贈の申し出があったので、寄贈者の趣旨を生かし、保存・活用を図ることとなった。また佐久間武一氏（西蔵町一一一二）も昭和五十一年十一月、旧家屋解体（昭和三十三年建立）によって不用となった

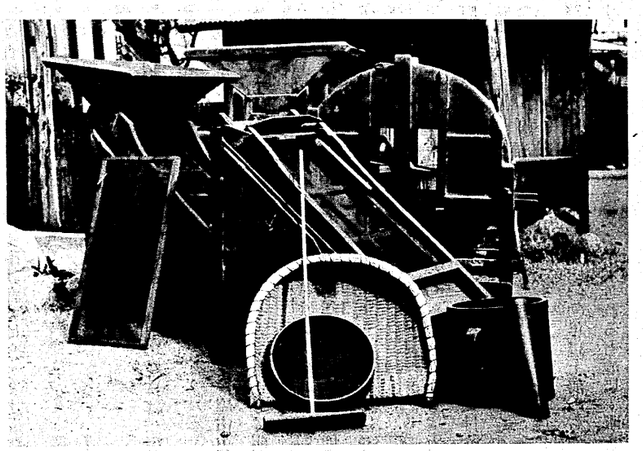


図1　阪口喜蔵氏から寄贈の農具類

農具等を、県立芦屋高校史学研究部に寄贈されることになった。

これら収蔵された農具は形態・構造・用途などを記録し、法量・保存度を確認するために実測調査を行なった。また、細部にわたる観察をおこなってスケッチ表現・写真で記録の充実をはかり、墨書などが確認されたものはそれに注意して撮影した。作図にあたっては、材質や構造の把握に努め、工作法、着装法など形状復原に留意した。同じ資料群中に同一種のものが複数認められる場合は、最もよく原形をとどめると思われるものを一点選び、また、破損のいちじるしいものは省略した。

また農具に記されている焼印・墨書などは農具類の製作年代、流入経路を知るためにも可能な限り判読した。

これらの調査の結果をまとめてみて一覧表をつくり、個々の農具については写真と併せて整理し、資料登録カードを作成した。

寄贈された資料については、芦屋市史料室に保管するとともに、県立芦屋高等学校に一部移管することにした。

農具類など大型物件の市への寄贈は、過去にも幾度かあって、すでに市内の宮川小学校や精道中学校、芦屋ユース・ホステルなどにも移管・保存している。

これらは、調査を進めながら社会科の生きた教材として保存・活用を図り、将来、即物教育資料として有効な利用法を考えてゆかねばならない。

3　経　過

昭和四十九年三月の旧阪口喜蔵家の実測調査を契機として同年十二月に調査団が組織された。その後翌年四月までは、民家の分布調査に主力を置き、調査後にはその報告会を開いた。また、分布調査と並行して民家調査についての研修会や、実地研修として神戸市北区山田町の箱木千年家、神戸市東灘区森北町の稲荷神社に保管されている「だんじり」などを見学した。さらに、阪口喜蔵氏から寄贈を受けた農具の実測調査を行なった。

翌五十年度は、昨年度からの継続で民家の分布調査を

進捗させるとともに、旧幸田中二家住宅の実測調査（一月二十三日）、および、山村哲男氏寄贈民具の実測調査を実施した。

五十一年度は、寄贈された民具のスケッチや細部の観察を行ない、新たに佐久間武一氏から寄贈された民具の実測調査とスケッチを手がけた。

4 調査結果

民家

分布調査 民家の調査は、昭和四十九年度においては市内の古い民家の分布調査を調査対象八地域を設定して実施、外観および口碑によってリストアップした建物は約六〇棟にのぼった。それらを検討した結果、本瓦葺の建物が一二棟、わら葺屋根の民家が三棟確認された。聞き取りその他の資料の調査によると、これら一二棟のうち六棟は江戸時代の建造物と考えられる。それらに関しては、特に詳細な調査が必要であるが、現在のところ、四棟について口碑、一棟に文献、一棟は遺構上の年代的資料が入手されている。それらを表に示すと、次頁のとおりである。

昭和五十年度における分布調査は、民家実測調査、民具実測調査と並行して行なった。

この年度は西山町を中心に、山芦屋町の一部を加えた地域からリストアップし、対象建物は約二〇棟にのぼった。その結果、本瓦葺の建物（二階本瓦葺・庇部分桟瓦葺）は二棟確認されたが、残りはすべて新しい桟瓦葺であり、今回の調査地域では、ワラ葺屋根の古民家は確認されなかった。

ただこの地域では、かつて、芦屋川からの用水路の溝遺構が断片的にみられた。西山町一一四・一一五・一一六番地と一一七・一一八番地の間に残る水路は、東川用水路の一部と考えられる。東川用水路は、芦屋村字一の井手（山芦屋町）から、現在の芦屋市域に属する三条・津知、神戸市域に属する森・深江・中野など旧五か村に配水される幹線用水路であった。三条町には、照楽寺

表1 芦屋市民家分布調査確認一覧表

No.	所有者（敬称略）	所在地	調査年月日	外観（主観・門）	聞きと建築推定年代	備考
1	五味富治	三条町一〇五（旧三条村）	49・12・23	桟瓦、軒丸瓦 三巴紋・両端二列本瓦葺	○ 江戸（百五十年以前）	元禄三年作成の村絵図にあり
2	小阪正一	三条町一六五（旧三条村）	49・12・23	入母屋造 トタン葺・内部わら葺	元禄三年以前	古文書あり
3	山村久右衛門	浜芦屋町七―二二（旧芦屋村）	50・2・26	木造二階（？）切妻造 桟瓦・両端二列本瓦	百年位前	土倉あり
4	朝比奈貞雄	岩園町六〇（旧打出村岩ケ平）	49・12・23	桟瓦葺	江戸（倉）	土倉―本瓦・軒丸瓦・三巴紋 軒平瓦・文様あり・角釘使用
5	名田巌	打出春日町一二二（旧打出村）	50・1・31	木造二階・桟瓦葺	江戸（二百年位前）	土倉―本瓦葺・軒丸瓦・三巴紋・軒平瓦・文様あり・建物一部は口碑によると安永年間（1772～1781）の建立という
6	幸田中二	打出春日町二七（旧打出村）	50・3・15	木造一階・入母屋造 トタン葺（わら葺）	○ 江戸（約百五十年前）	棟上げのとき俵に西宮えびすの札―年号なし・簀の子天井・中二階 角釘使用。柱―手斧（ちょうな）の跡（平刃） 多面取り・区画整理区域にあたり緊急調査必要

（昭和四十九年度調査分）

（三条町一三〇番地）の東側、ちょうど西山・三条の町境を南下し、西へ流れる用水と、三条町一〇四・一〇五・一〇六番地の西側を南下し、三条南町へ流れる用水がある。

また、本調査期間中に、約五〇点にのぼる農具を寄贈された山村哲男家宅（西山町一〇〇番地）が、改築された。民家の改築などが多くなるにつれ、日常のパトロールの必要性を痛感するとともに、民家や、民具などの保護への一般周知が望まれる。

なお、昭和四十九年度に調査した井田市左衛門家宅（三条町一五四番地、土倉あり）の屋根に葺かれている瓦は、打出瓦（「打出権」の銘がある）であり、かつては市内の民家の屋根に葺かれていた打出焼の特色のある瓦であり、今ではほとんどみなれないものとなってしまった（第六章28参照）。

表2 芦屋市民家分布調査確認一覧表

No.	所有者（敬略略）	所在地	調査年月日	外観	聞き取りの有無	建築推定年代	備考
1	渋谷忠弘	西山町一一四（旧芦屋村）	51・3・3	木造二階・切妻造 桟瓦（一階）本瓦（二階）門あり			二階土壁・黒板壁
2	井床勇次	西山町一一四（旧芦屋村）	51・3・3	木造・桟瓦（一階）本瓦（二階）			煙出しあり・土倉あり

（昭和五十年度調査分）

阪口家住宅の調査　春日町八八番地所在の阪口喜蔵家住宅は、春日土地区画整理事業区域に該当するため、昭和四十九年三月末に解体されることになった。同家からはすでに幕末から大正期に至る農具が、市教委に寄贈されているが、同家は市街地で残り少なくなった旧農家の姿をとどめていた。

同家は、旧菟原郡打出村にあり、西国街道から少し北にはずれたところに位置していた。市街地のことで、すでに家屋にもかなり改修のあともみられ、建築年代を示す、とりたてた資料もみいだせなかったが、口碑では、一五〇年以前には建てられていたと言う。

家屋は、切妻造り平入の桟瓦葺きの大屋根（かっては茅葺だったという）に、本瓦葺のひさしが設けられていて、その左手奥（北西隅）に土蔵がつくられていた。今は土蔵も改築され、二階建の住居として利用されている。

主屋の間どりは、八畳の「ざしき」の奥に、それぞれ「へや」「さんじょう」と呼ぶ三畳間がある。土蔵は今日

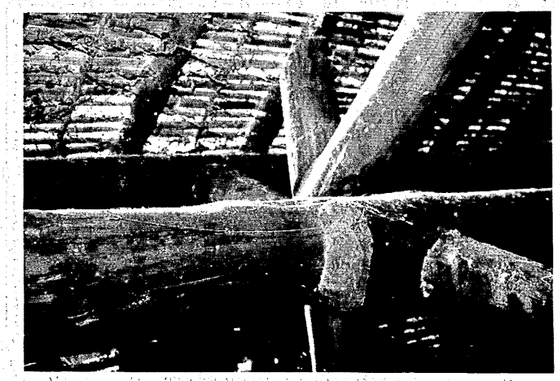


図2　阪口喜蔵家住宅　屋根うら

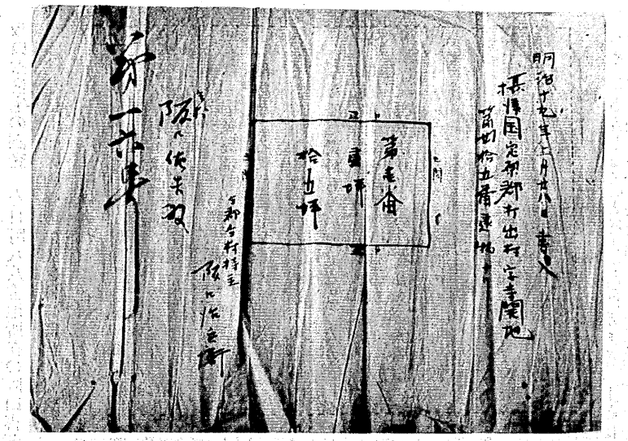


図3　明治19年、阪口家住宅の記録

「にかい」と「よじょうはん」として住まわれ、「よじょうはん」から「にわ」と呼ぶ土間の奥に板ばりの「だいどこ」が設けられている。この板間は食事の場であり、井戸のある土間は炊事場である。

土間と「へや」「さんじょう」の天井は簀子天井であり、古風をとどめているが、「ざしき」には天井板が張られている。これらの部分の天井裏は、わらなどの貯蔵場であり、梯子で登降する。

建物の東側には、数年前の新築家屋が連結されているし、主屋自体の後補も著しく、板・柱にチョウナ仕上げの判然としたあとなども見られず、あまり古色はみられない。江戸時代の終り頃の建築と考えられる。

調査は、昭和四十九年三月二十三日に行なった。

幸田家住宅の調査　打出春日町二七番地にあった幸田家住宅は、西国街道の本街道の北側に南面して建つ。入母屋造ワラ葺き、平入りで、調査時にはワラ葺屋根の上

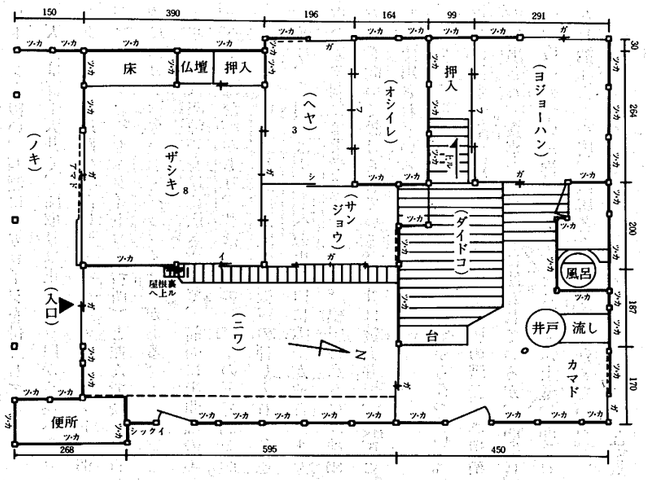


図4　阪口家住宅 1階平面図

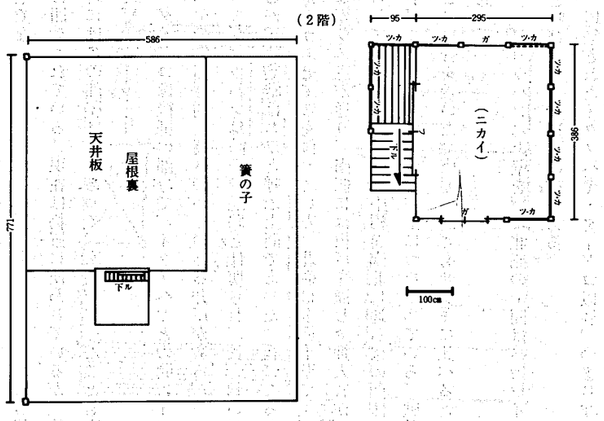


図5　阪口家住宅 2階平面図

にトタンを覆い、西側にはガレージを付設していた。

天井は簀子天井で、間取りは正面入り口から奥へのコンクリートの通路の左側にザシキ、その奥にナンド（納戸）・オクノヘヤ・ダイドコ（台所）と並んで続く。右側にはヨジョウハン・ヘッツイサンがある。

ザシキは明障子を境に広さ六畳で、前面に半間幅のエンダイ（縁台）があり、昔はこのエンダイの下で鶏を飼っていたという。西側には北から板戸の押し入れ、仏壇が並び、北側にはナンドへの出入口に障子が通る。また東の通路側には板敷の式台がある。鴨居の高さには神棚が南を向いて設けられている。天井は鏡天井で、寝室として使用されている。

ナンドは畳二枚とその東、北側の板敷からなっている。東側の板敷の端には鴨居の溝三本、敷居の溝二本の遺構が見出され、食事をするために使われているが、西側には、板戸のついた物置があり、それに並ぶ土壁に囲まれた収納部にも鴨居、敷居各々二本の溝が残っている。

オクノヘヤは、狭いためにナンドから奥に向けて拡張された部屋で、ナンドとの境を半間の開口部を残した土壁でなしている。また、東側は半間が土壁で、残る部分は開放されている。現在は物置に使われているが、終戦時にはこの部屋は既にあって、家族が住んだこともあった。

ダイドコは後補の部分で、オクノヘヤとの間にオクノヘヤの床高と同じ高さのわくのある井戸がある。

ヨジョウハンは障子で通路と仕切られ、畳を敷いてあるが、建築時はニワと呼ぶ土間であった。夜になると鳥篭をかぶせて鶏を飼っていた。北側は全面土壁で東側にはガラス窓が通り、南側には板戸を通して押入れがつくられている。天井のほぼ中程を南北に通る梁の西側は簀子天井で、通路のそれと完全につながっている。戦前にここに畳を敷いた。床面の高さもザシキに比べると一段低い。

ヨジョウハンと土壁を境に北側の土間はヘッツイサンと呼び、レンガ造りの竈がある。

増築されたオクノヘヤ・ダイドコ以外、つまりザシキ

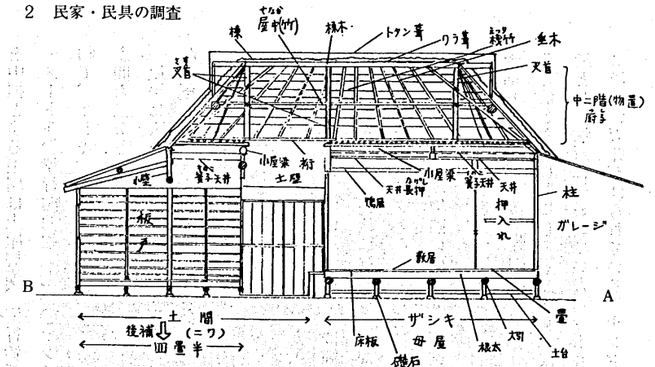


図6　幸田家住宅　断面図（縮尺 1/60）

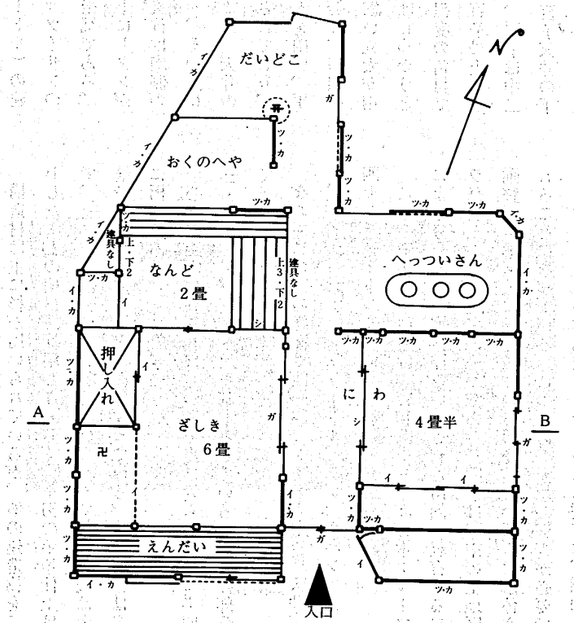


図7　幸田家住宅　平面図（縮尺 1/60）

を中枢とする主屋は上屋規模、桁行約五間（八八五センチメートル）、梁行四間強（七三〇センチメートル）の建物で、ザシキ、ナンドの居室部とニワ・ヘッツイサンの土間と二分される。また、ヨジョウハンも後補である。

屋根は入母屋造りワラ葺で、現在はその上にトタンがかぶせられている。その構造は合掌組で、叉首は南側の材にほぞ穴を設け北側の材を削って差し込み、その上に棟木をのせている。尻は梁の上におく。大梁は、天井の東西両端とザシキ・ニワの境の三か所に渡されており、側で折置組となっていた。垂木には細い丸太を用い、平行には置かれず、扇状に裾の方が広がっており、屋根中程の一本の野中で支えられている。これも細い丸太が用いられていた。屋根隅の部分など、構造材はしっかりとは組合されてなく、四～五センチメートル程度の角材で後補されている。天井は簀子天井で、竹の簀子の上にワラを敷きさらに黄褐色の壁土をのせており、厨子は中二階として物置に使われていた。ザシキには簀子天井の下に新しい天井がはられている。ナンド・ヘッツイサンは下屋にあたり、屋根裏を見せている。

構造材は主に杉が用いられているが、他の建造物をこわしたあとの用材を転用したらしく、平刃の手斧仕上げで、一部後補部分はカンナ仕上げになっている。壁は土壁で、多くはその上から板をはっている。後補部分は主に板壁である。

心々間距離はかなりばらつき、当初からの部分は半間三・三尺および三・五尺を基本としているが、後補部分では一定しない。

なお、この家の総高は四一四センチメートル、天井高は、ザシキで二〇八センチメートル、ヨジョウハンで二三四センチメートルを計測する。

この幸田中二家住宅は、昭和四十九年度の本グループによる分布調査で、三棟みいだされた市内に現存するワラ葺屋根をもつ民家の一つである。同家は、市の土地区画整理事業区域に該当しているので、近い将来に解体されることになっている。このため、緊急の調査が必要であり、今年度その実測調査を行なった。（同家は、昭和

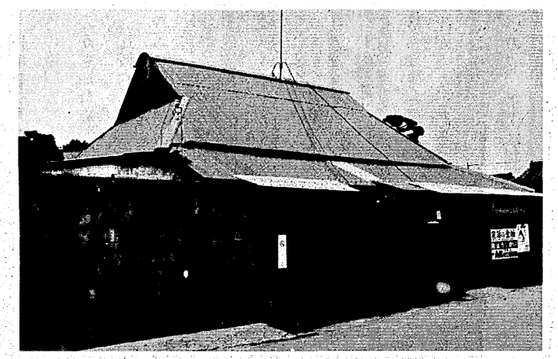


図8　解体前の幸田家 住宅　(小松新三郎氏 撮影)

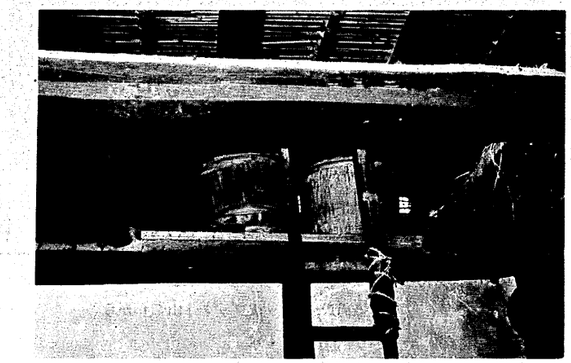


図9　同住宅屋根裏への上り口

五十二年一月二十九日に解体された。）

同家は、むかしは、屋号を「カゴヤ」と呼んでいたから竹の籠屋か、もしくは運送にたずさわる駕籠屋であったのかも知れない。

比較的小規模な民家であり、原形は、東半分に手前からニワ（土間）とヘッツイサン（炊事場）がつづき、西半分は手前からザシキとナンドがつづいていた。ザシキは客間兼寝室に当てられ、ナンドで食事を取ったという。屋根裏は倉庫として使われた。約一〇〇年前、かまどでは、浜辺から拾ってきた松葉がたかれたが、その燃え残りでタドンを作り、屋根裏に貯えていたという。

口碑によれば、約一五〇年前の建築と伝え、簀子天井・角釘・チョウナけずりの柱などからも、その建立年代がうなづける。ただ、それ以前の建材が多く転用されており、また棟札など建築年代に関する記録類が一切ないので、年代は判然とはしない。

調査は、昭和五十一年一月二十三日に実施した。実測・写真は

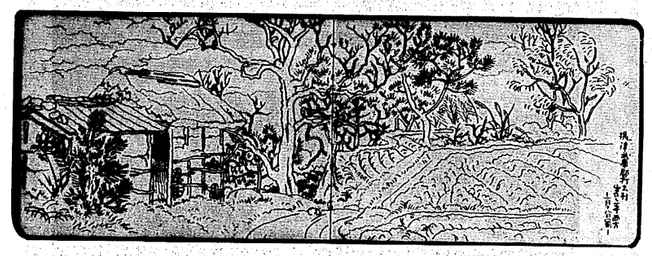


図10　大正6年、岩ケ平丘陵農村風景
児玉隆男氏 スケッチブック「山畑」から

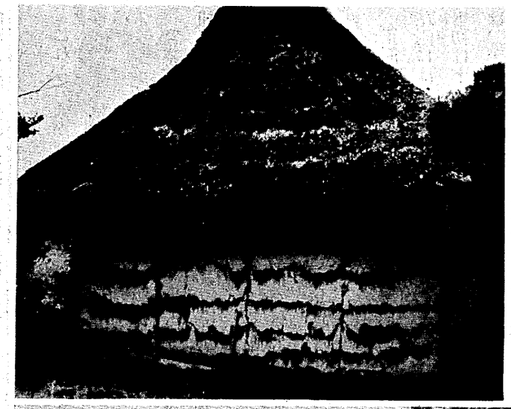


図11　宮本家住宅　"すだれ壁"

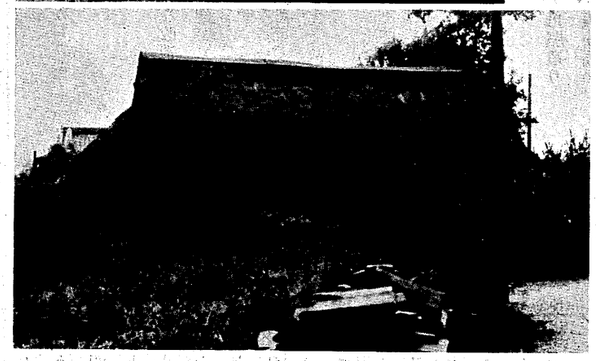


図12　同住宅全景

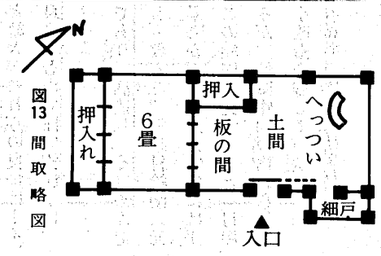


図13　間取略図

田辺・湯浅・渡部・森岡・岩崎・位原が分担した。

これらのほかに、昭和四十一年五月、兵庫県から芦屋市への調査依頼で行った緊急調査が二件ある。

宮本政太郎家住宅（岩園町九五番地）　小さな改造は加えられているが、口碑では、一八〇〇年頃に建てられたものだという。

入母屋造り小麦ワラ葺、平入りで壁体はすだれ壁であった。俵こもを壁土の間にはさんで腰板の役目をさせていた。

正面入口から土間に入ると、右側奥にヘッツイサン、左側には板の間があり、その奥に六畳が並ぶ。板の間は当初は土間であったという。土間にも天井があり、以前は、天井裏にワラを貯蔵した。柱は鉋仕上げであった。

小阪作兵衛家住宅（三条町一六五番地）　入母屋造り草葺き（ヨシ葺き）、四方下屋根造り平入りで屋根が高い。

芦屋川河口周辺には、むかし、ヨシが繁茂していたというからそれを刈りとったのかもしれない。小麦のワラは一〇年、カヤは五〇年というが、ヨシは一代もので寿命は長い。間取りは典型的な四つ間取り、〝田の字型〟ともいう。正面入口から入ると土間で、奥には釜が数個かけられるヘッツイサンがあり、右側手前にはトモベヤがある。土間の正面奥には板の間がある。左側には戸襖を隔ててオモテノマ・ザシキと続き、これらの奥にはオイエ・ヘヤと続く。建築材は良質のもので柱は鉋仕上げ、敷居には三本の溝があった。

当家は、農業を営む庄屋であり、酒造り、そうめん造りを行ったという。古文書も多数ある。三条村絵図（元禄三年刊）にみられるところから、一六九〇年にはすでにあったことがわかる。この絵図と比較すると、母屋の外観はほとんど同じであるが、付属建物の物置を移築したり、門も新築するなど小改造を施している。

以上二件の調査は、仲茂彦・小倉幸一によって行なわれた。

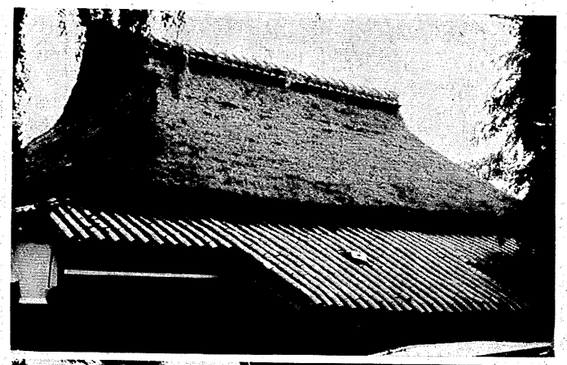


図14　小阪家住宅全景

図15　同住宅納屋及び庭先

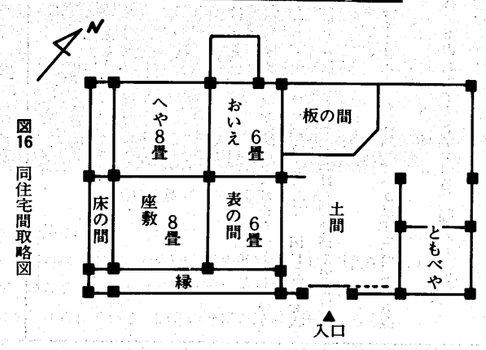


図16　同住宅間取略図

民　具

表3　稲作の作業過程

時期	生産暦
四月中旬	モミツケ　種籾を入れた俵を池に七日から十日間浸しておく。（図19参照）
五月上旬	苗代作り　モミツケと並行して、できのよい田に苗代を作る。
	モミマキ　八十八夜をめどに、あらかじめ池から引き上げておいた種籾を苗代にまく。（図22参照）
	犂起こし　牛に犂をつけて田を犂く。（図23参照）
	田に水を入れ、水もれを防ぐために畦塗りをし、畦豆を植える。
	シロカキ　牛に馬鍬をつけてシロカキをする。（図25参照）
六月中旬	田植え　苗が八寸（約二四㌢）ほどになると苗取りをして田植えをする。（図30参照）
七月上旬	草とり　草とりは四回から五回行われる。そのうち、最初と二回目ぐらいはクマデガエシを使う。これをカヤシ草という。その後は、指にかねのツメをはめたり、手だけでする。これを大ナラシ・ナデ草という。そして、田に肥料を入れ、最後の草とりをする。これをアゲ草・トメ草という。これらの草とりは、七月二十五日の天神祭までにほとんど済ませておく。（図33・34参照）
十月中旬	稲刈り　刈り取った稲は、杉や竹のダテ（稲木竿）にかけて、十日間ほど乾燥させる。ダテは、一本がほぼ三間（約五四〇㌢）のものを、何本か続けて用いた。（図35参照）
	イネコキ　千歯扱で扱く。唐箕にかけ、籾とワラごみなどをより分けた後、籾を家の庭先でカドボシする。（図38参照）
	ウススリ　モミスリなどともいう。（図43参照）
十一月中旬	このあと、唐箕にかけ、さらに万石にかけて作業はほぼ終了する。（図46～50参照）

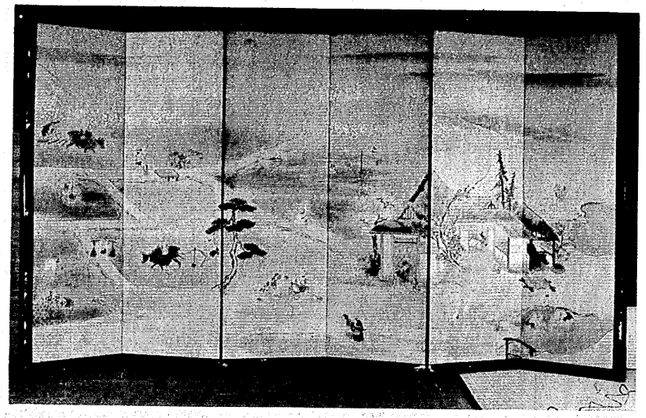


図17　農事次第之図屏風（A）

図18　農事次第之図屏風（B）

農事次第之図屏風

農作業の様子を描いた六曲二双の屏風で、江戸時代後期のものである。現在でも小阪家では、特に何かの行事をするときには、この屏風がかざられている。同類の屏風が尼崎や伊丹にもある。

（所蔵者　小阪作兵衛氏）

図19　モミツケ　俵に入れた種籾を池に浸している。

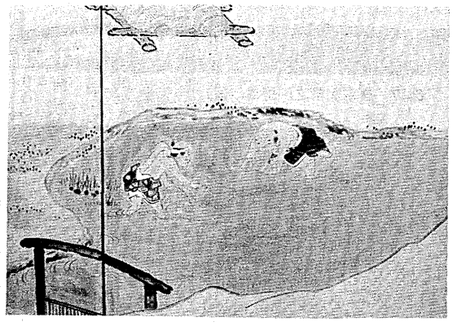


図20　池に浸した種籾を引き上げている。

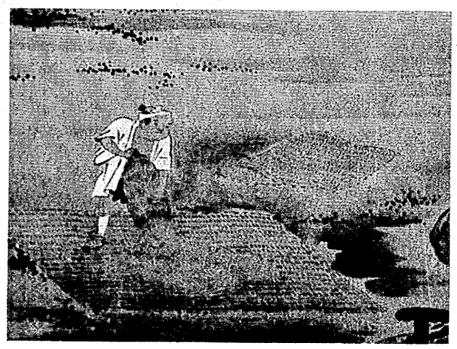


図21　種籾を、俵からむしろの上にあけている。

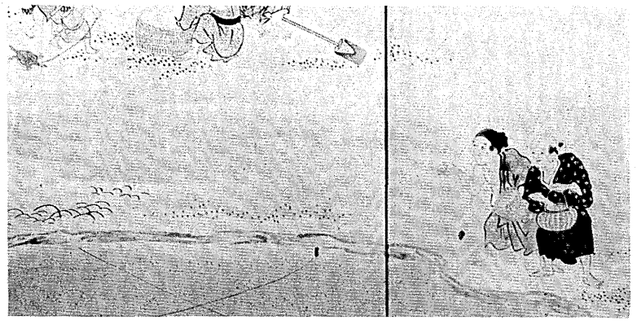


図22　モミマキ　苗代に種籾を蒔いている。苗代には縄が十文字に張られている。

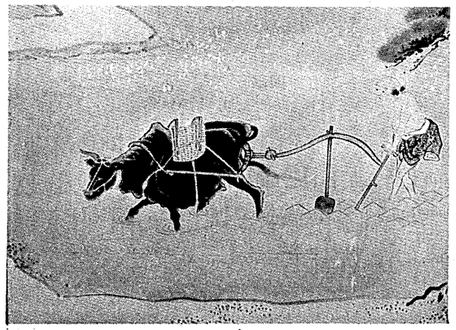


図23　犁起こし　牛に犁をつけ、田すきをしている。

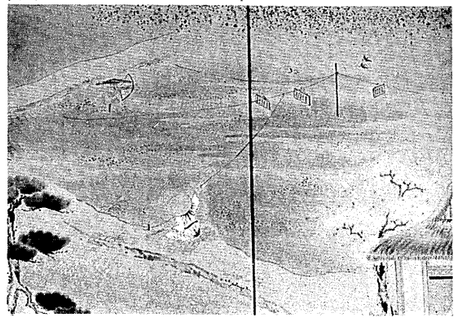


図24　苗代に鳴子や案山子（かかし）をたて、雀を追い払っている。

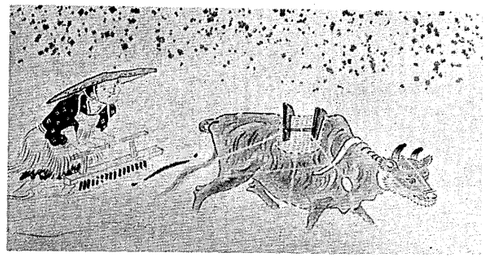


図25　代かき　牛に馬鍬をつけ、水を張った田の代かきをしている。

図26

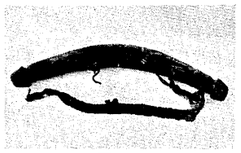


図27

牛の鞍

〔法量〕長さ71㎝、巾20㎝。

〔解説〕屏風絵のようにして牛にとりつける。

この鞍は、昭和36年ごろまで使っていた。

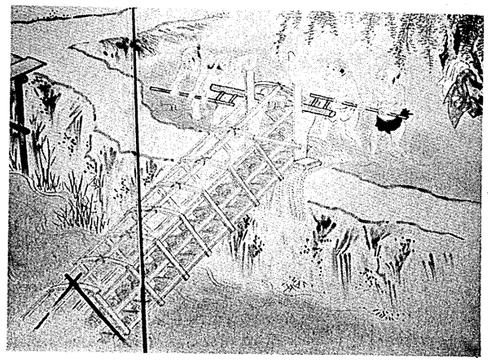


図28　竜骨車で田に水を入れている。

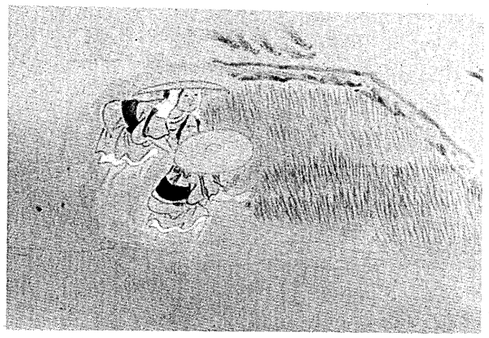


図29　苗取り　苗代の苗を取っている。

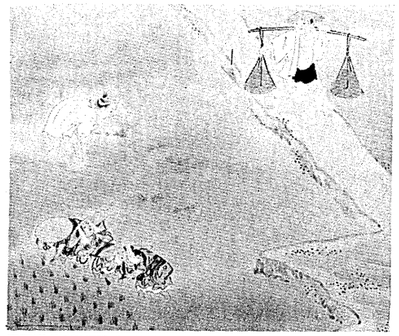


図30　田植　早乙女が笠をかぶり、たすきを掛け、苗を田に植えている。男は苗を苗籠に入れ、天秤で背負って田へ運んだり、鉢巻をしめたもう一人は田の中に入り苗を早乙女に配っている。

図31　子どもを連れ、昼食を働いている人のところへ運んでいる。

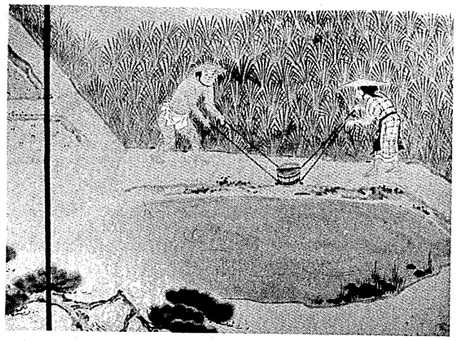


図32　水掛け　桶を使って池から田へ水を汲んでいる。

図33　除草　草取りをしている。四～五回する。

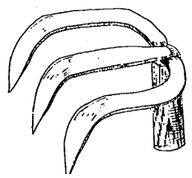


図34　クマデガエシ　〔法量〕刃の長さ二十㌢、刃の幅一五・五㌢、柄の長さ九・九㌢、柄の径三・四㌢。〔材質〕刃の部分は鉄製。〔解説〕田植後の草取りのとき、このクマデガエシで田の土をかえしていく。

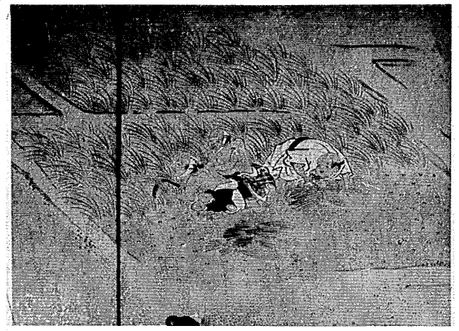


図35　稲刈　稲刈鎌で刈り、横で束ねている。

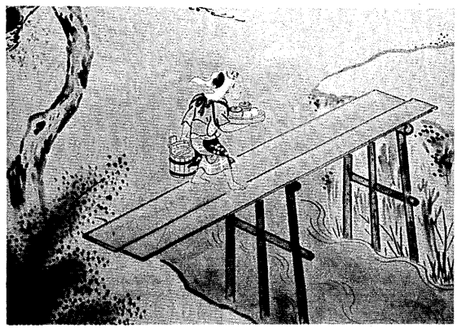


図36　働いている人のところへ、昼食を運んでいる。

図37　刈り取った稲束を牛にのせて運んでいる。

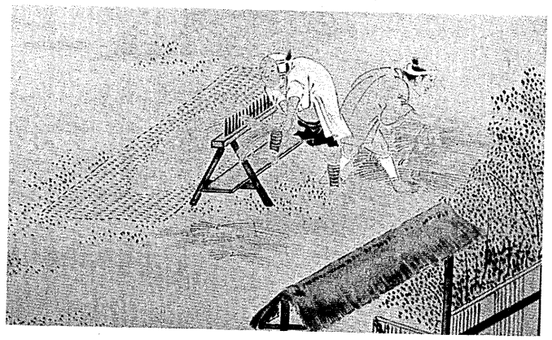
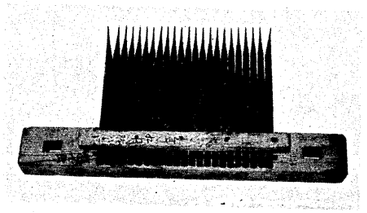


図38 稲扱（こき） 千歯扱で実をむしろの上に扱き落している。



←**図39** 千歯扱（A）

〔法量〕台木の長さ61cm、高さ31cm、刃の巾33cm。〔材質〕刃は鉄製。〔所見〕「大正２年９月18日」「孫四郎」の墨書がある。〔解説〕稲こきに使ったもので、刃は台木に対して平行である。

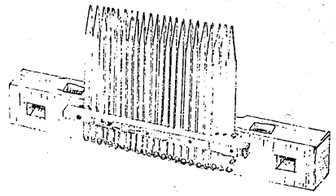


図40 千歯扱（B）

〔法量〕台木の長さ60cm、高さ30cm、歯の巾33cm。〔材質〕歯は鉄製。〔所見〕「山村孫」の墨書がある。〔解説〕稲こきに使われた。

↓**図41** 千歯扱を組合せる

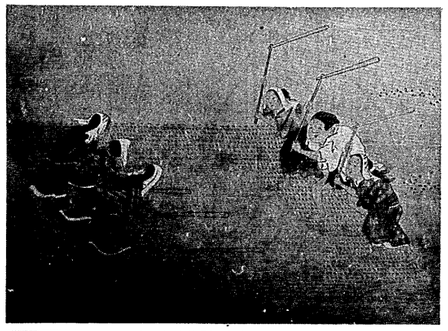


図42 カラサ打ち カラサは麦の穂や豆を打つのに使用されているが、ここでは稲に使って籾殻をおとしている。

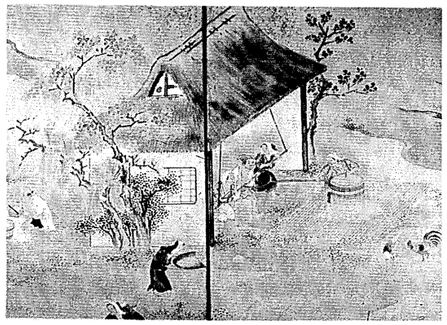


図43 籾摺（もみすり） 籾摺臼をまわして籾殻と米に分けている。

↓**図44** 籾摺臼（もみすりうす）のカセ 〔法量〕手で持つ所の長さ121cm、柄の長さ80cm。〔材質〕木製。〔解説〕このカセは、屏風の絵のように使われるが、三人用ではない。

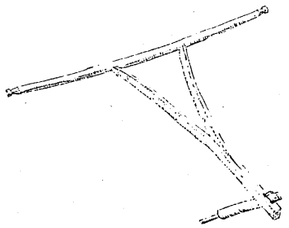


図45 籾摺臼

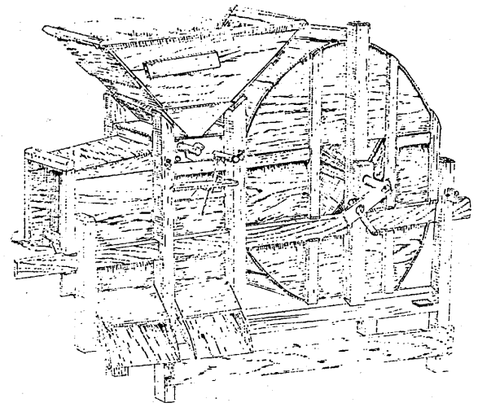


図46 唐箕（A）〔法量〕全長一八八㌢、高さ一三一・五㌢
〔所見〕「大阪農人橋二丁目□□□屋□兵衛製」の墨書と焼印がある。〔解説〕唐箕にかけて、籾穀・シイラ（籾の不良品）・ごみなどと米を選別する。所有者は、昭和三十六年～三十七年ごろまで使っていた。

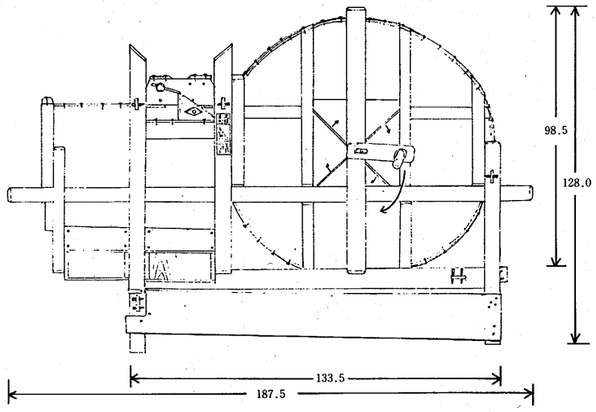


図47 唐　箕（B）
〔法量〕全長187.5cm、総高128cm。
〔所見〕「大阪農人橋弐」の墨書や、「大阪　農人橋２丁目　本家京屋七兵衛製」の焼印がある。農人橋は、現大阪市東区にあたる。

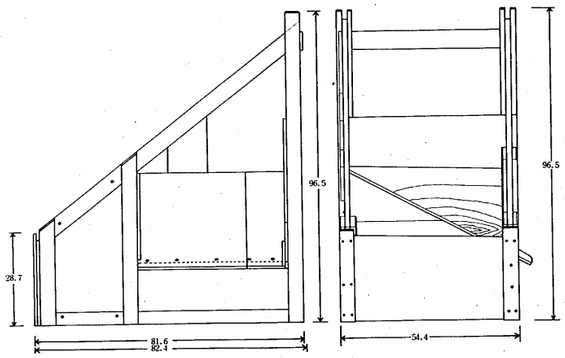
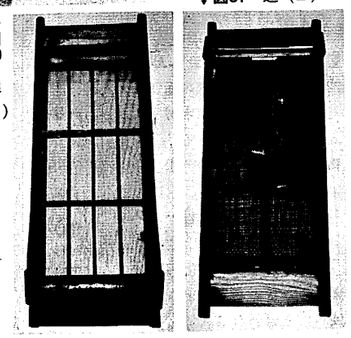


図48 万石通（ばんごくどう）〔法量〕高さ九六・五㌢、長さ五四・四㌢、奥行八二・四㌢（以上本体のみ）〔解説〕唐箕にかけた後に、より残しのごみ、あるいは米の大小を選別する。

←**図49**　万石通



↓**図51**　通（B）

→**図50**　通（A）

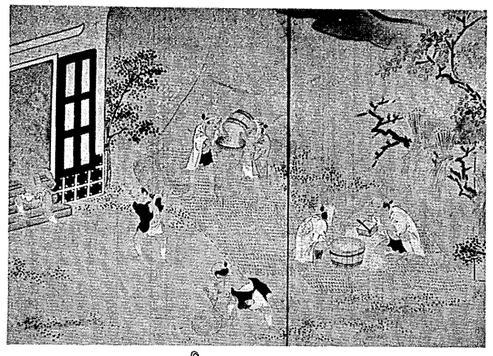


図52　米を箕で集め、枡ではかり、俵につめ、倉に入れている。

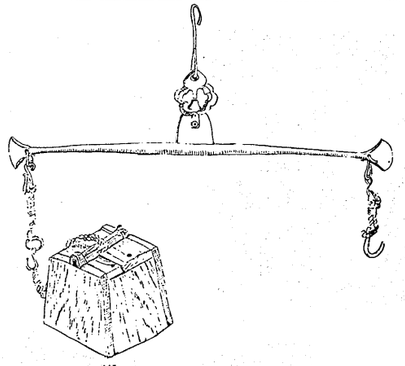


図53　天秤と錘〔法量〕天秤の長さ70cm、錘の上面22.5cm×22.5cm、底の面25cm×25cm、高さ32cm。〔材質〕錘の外観は木製であるが、内部は鉄などが入っていると思われる。〔所見〕「明治20年 亥10月 再求井床利作・小山芳松・井床利平治・山村四郎兵衛」その他裏面には、求主名前として13名の墨書がある。〔解説〕米1俵を単位とするような目方を測るときに使ったと思われる。

↓図54　錘

図55　1斗枡・トボ →
〔法量〕枡の高さ31.5cm、口径32cm、底の径31.5cm、トボの長さ39.5cm、直径6cm。〔材質〕たがは鉄。
〔解説〕各家で米を俵につめる時に使った。この枡4杯分で1俵に相当する。トボは、手前に引く。明治の末期、あるいは、大正初期ごろから、昭和36年ごろまで使っていた。

図56　初穂を神に供えている。

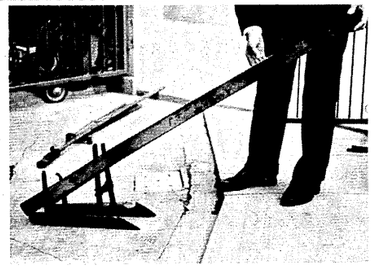
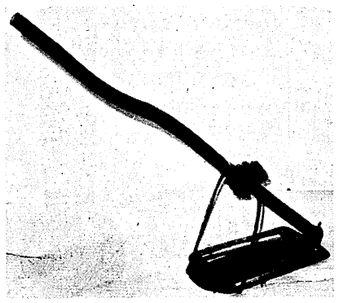


図57 →
ニチヨウカラスキ
（安政3年〈1856〉のもの）



← 図58　鋤簾
〔法量〕柄の長さ94cm、刃の幅20cm、長さ33cm。〔材質〕刃の部分は鉄製で、割竹を張る。
〔解説〕土あげなどに使った。

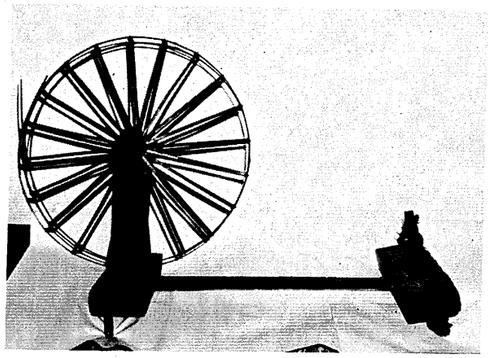
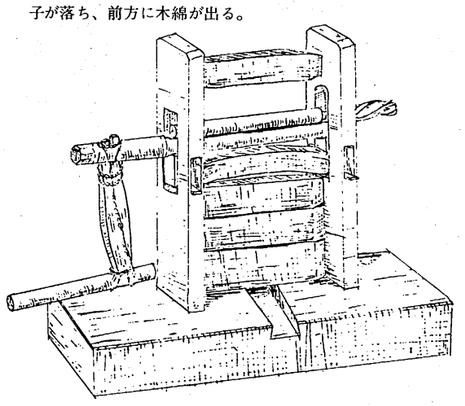


図59　イトクリ　〔法量〕車の直径五一㌢、長さ七六㌢。〔材質〕車は竹製。〔解説〕綿から糸を紡ぎ出したり、糸などに撚りをかけるのに使った。

↓**図60**　木綿繰（かたくり）り　〔法量〕台の幅31.5㎝、軸の長さ20㎝、高さ29㎝。〔解説〕綿花をこの木綿繰りにかけると、手前に種子が落ち、前方に木綿が出る。



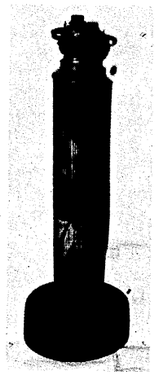


図61　ランプ　〔法量〕高さ54.5㎝、台座の径18㎝。→〔解説〕上部の火屋を欠いている。明治になってから普及した石油ランプである。

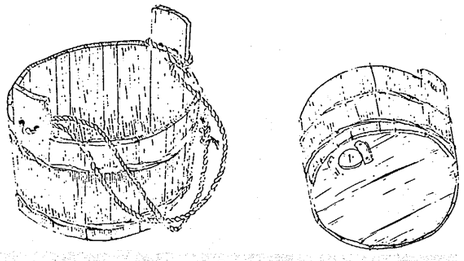


図62　ニナイ桶　〔法量〕口径三六㌢、底の径三〇㌢、高さ四一・五㌢、深さ三一㌢、底の小穴の直径五㌢。

↑**図63**　桶　〔法量〕口径30㎝、底の径28㎝、高さ39.5㎝、深さ27.5㎝、中蓋の真径26㎝、中蓋の高さ６㎝。〔材質〕たがは鉄製。〔所見〕「内淡路町壱丁目　小西勘兵衛」と書かれている。〔解説〕黒漆塗の対の桶で、蓋がかぶさるようになっており、さらに、一方の桶だけに中蓋がついている。田仕事などの時、昼食などをこの桶に入れて運んだのではないかと思われる。内淡路町は、現大阪市東区にあたる。

図64　ハンボウ　〔法量〕長径八〇・五㌢、短径五七・五㌢、高さ二四㌢。〔解説〕まぜごはんや寿司を作る時に使う。

図65

図66

図67

図65 味噌桶　〔法量〕口径31cm 底の径26cm、高さ52cm、深さ48.5cm。〔解説〕味噌を仕込むのに使った桶である。

図66 水桶　〔法量〕口径27cm、底の径25cm、高さ39cm、深さ25cm。〔解説〕水汲みに使う桶である。

図67 四斗樽　〔法量〕口径52cm、底の径41cm、高さ53cm、深さ39cm。〔解説〕酒やしょう油などを入れる樽を他に利用していたものと思われる。樽の下方には栓がある。

図68 撹釣瓶の桶　〔法量〕高さ二五・五㌢、口径三二・五㌢、底の径三〇㌢。〔材質〕桶のたがは鉄、おもりは鉛。〔解説〕井戸から水を汲み上げる時に使う、はねつるべの桶である。桶にはおもりがついており、そのために桶が傾いて水が汲みやすくなっている。所有者は昭和三十年ごろまで、この桶のついたはねつるべを畑で使っていた。

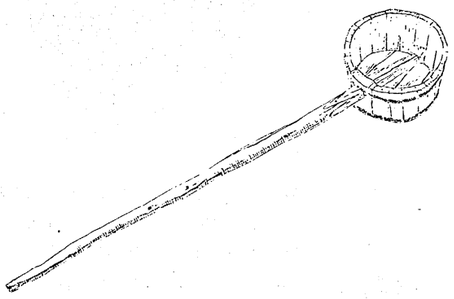


図69 柄杓　〔法量〕口径二五・五㌢、深さ一九㌢、柄の長さ二〇四㌢。〔材質〕木製である。

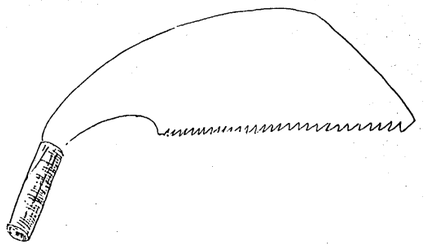


図70 マエビキ　〔法量〕全長八五㌢、刃の長さ五三㌢、刃の巾三五㌢、柄の長さ一七・五㌢。〔材質〕鉄製。〔解説〕木挽の鋸である。所有者は明治の初めごろまで、自宅で建築用材を切る時に使っていた。

←図71　手焙（てあぶり）　〔法量〕口径24cm、高さ21cm。〔材質〕鉄製。〔解説〕小形の火鉢である。

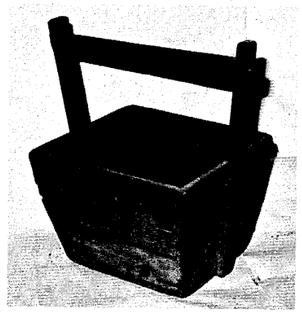


図72　炭とり　〔法量〕総高42cm、口径31→cm×29cm、底の径25cm×22cm。深さ21cm。〔解説〕炭を小出しに入れておくのに使った。

←図73　用心太鼓　〔法量〕高さ32cm、口径23cm、胴の径30.5cm。〔所見〕「明治14年辛己8月吉祥日張替」の墨書がある。〔解説〕この太鼓は、危急の場合に付近に知らせるために使用した。所有者の祖母が、火事の時にこの太鼓をたたいてまわって知らせたという。

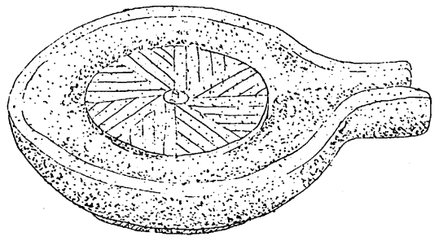


図74　石臼　〔法量〕全長五六㌢、全円直径四五・五㌢、臼部直径二六㌢。〔解説〕この臼は上臼を欠いている。水に浸した米をすりつぶして洗たくのりを作るときなど、流動物を扱うときに用いたようである。

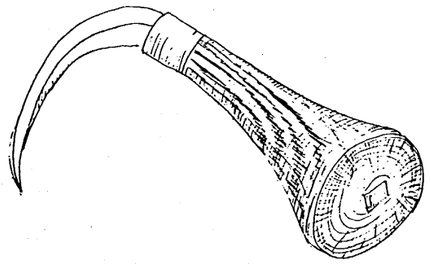


図75　手かぎ　〔法量〕柄の長さ一二・三㌢、かぎの長さ九・七㌢。〔材質〕かぎの部分は鉄製。〔解説〕炭俵などを持ち上げるときに使った。

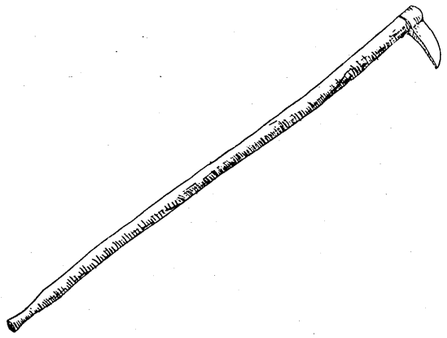


図76　トビ　〔法量〕柄の長さ一三一㌢、刃の長さ一〇㌢。〔材質〕刃の部分は鉄製。〔解説〕以前は消防のために、どの家庭にもあった。材木の運搬などにも使われた。

第三章　春日地区街並み調査

〈芦屋市文化財調査報告第九集〉

1　動機と目的

昭和四十八年一月、芦屋市都市整備課の春日土地区画整理事業により、市域南東部の春日地区（面積六・三ヘクタール）が改善されることになった。その計画と並行し、旧西国街道のおもかげを残す古い街並の一画が消え去ることになった。

本地区は住居専用地域に指定されているが、非戦災地であったため、長らく旧村のままの状態で残されており町内を縦走する各道路は狭く、また住民憩いの公園も皆無なので、非常の際の避難、および消火活動等の配慮がなされていなかった。宅地の利用増進を図り、近代的、かつ健全な市街地に発展させることを目的に、本事業が進められることとなった。実施期間は昭和六十年三月までの十二年間におよぶもので、阪神間都市計画事業の一環として芦屋国際文化住宅都市建設事業として行われるものである。

当地区のほとんどの建築物が移転するために、芦屋市民家民具調査グループは、五十一年度の調査活動の一環として、旧西国街道を中心に街並みの現状調査（町並復原・石造遺品）および街並みに関する口碑などの収集、記録、整理にあたることにした。

完了後は、西国街道にかわって、巾一五メートルに及ぶ鳴尾・御影線が通じる。また区画街路は巾四～六メートルと広がり、西国街道は近代的な街並の中に消え去り東西を貫く近代道路へと変貌をとげるのである。

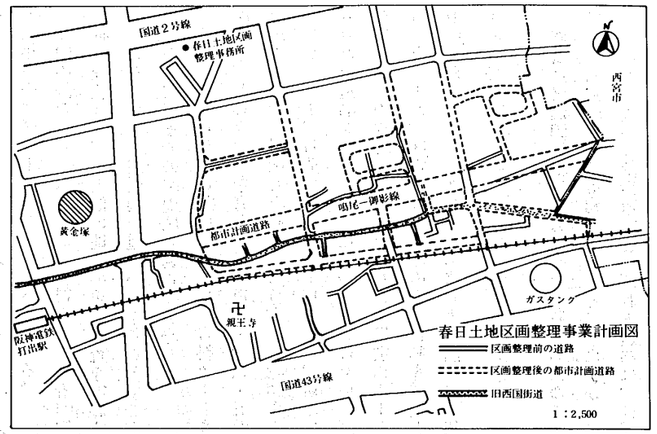


図77　春日土地区画整理事業計画図

2　組織と方法

調査組織

この調査も、芦屋市民家民具調査の一環として、同調査グループによって実施された。

〈代表者〉田辺眞人　〈調査員〉位原庸太・渡部永子・岩崎宏美・小泉真美　〈調査補助員〉彌宜田住男・小倉美鈴・田渕好美・奥出津代子・小野山和子　〈調査協力〉森岡秀人

調査の方法

春日町周辺の石造遺品調査　市内の石造遺品調査については、昭和四十二年度から芦の芽グループ文化財パトロール委員会によって実施された全市対象の分布調査がある。その成果は、教育委員会で既に公刊され、「石造遺品分布調査報告」（『芦屋市文化財調査報告』第六集一九六八年）、および『石造文化財』（芦の芽資料篇第四集一九

七三年芦の芽グループ刊）に収録されている。

今回の調査は、これらを基礎資料として、春日町土地区画整理地区と、その他の地域の重点調査を実施することにした。まず、旧西国街道沿いの緊急を要する市域の東端から宮川までの全地域の調査を実施した。

これまで知られていた成果を基に、資料カードを作り所在地、名称などを参考として、道標・石仏・五輪塔・その他地蔵堂に付随した石造品の分布、確認調査から実施した。まず、石造品群をグルーピングし、新たに見出された石造品をも加えて一点ずつ略測を行ない、同時に石質・保存の程度・刻銘・伝承など項目別にカードに記載した。また、区画整理のための撤去移動を前提として方位がわかるようにグループ単位および個々に現状の写真撮影を行なった。

春日地区西国街道沿いの街並み復原　いわゆる西国街道は、西宮から本市東端までくると二本にわかれて西進していた。南の〝浜街道〟とよばれる道路は、ほぼ第二阪神国道に沿っていたため、今では消滅している。他方の〝本街道〟とよばれる道は、茶屋之町北部で国道二号線に合流してその西方では消滅しているが、春日町南東すみからこの合流点以東の間、南北に起る市街地を斜めに切って、今日まで残ってきた。ここには、近世末からの民家もみとめられ、明治・大正期の家屋もあり、戦前の町なみが残っていたのである。しかし、市の都市整備課による春日地区土地区画整理事業の御影鳴尾線道路建設等の計画で、道筋の中でも、ことに古い街並みを残す春日地区は全域が消え去ることになった。そこで、五〇〇分の一の市街図をもとに各戸をおとし、周辺の古老の口碑を採集して、できるだけ大正期までの古い街並の姿を復原するよう努めることとした。

3　経　過

調査は、昭和五十一年八月から実施し、翌年の四月までに、前半は主として西国街道沿いの町並復原のための

口碑採集、後半は石造遺品の分布・確認調査を中心に行った。

本報告では、当地方の西国街道・山陽道にまつわる文献をも集めて収録した。

なお、当地区でもこれと並行して民具の収集、調査を実施した。

4　結　果

市の春日土地区画整理事業の実施に対して行なった昭和五十一年度の該当地区の調査の結果、(1)当地区内に実測などを急がれるべき古民家は、新たに見出されなかった（幸田家住宅は既に調査ずみである）。そこで、(2)この地域に残存していた旧西国街道の道筋にあたる街並みを写真等の記録も乏しかったが、口碑によって復原しようとした。その結果、この街並については、昭和初期のこの道筋の姿がほぼ復原できた。この地域は整理事業によって大幅に街区の姿が変わってしまうので、すでに旧街道筋の姿の多くはそこなわれているが、できるかぎり現在のその道筋の姿を記録する写真を撮影しておいた。(3)この道に面しては江戸後期から家の建ち並び始めた地域であるため、当地区内には室町から同時代前後にかけての石造品が多く分布する。整理事業によってそれらも破損・搬出を防げないので、該当地区内の石造遺品の全ての調査を実施し、略測、現状写真を撮影し、資料カードを作製した。

旧西国街道の街並み

芦屋市街地の中で旧西国街道といわれる道路は、打出春日町二〇番地付近から、部分的には途切れながらも、市街地を斜めに西北によぎって茶屋之町二番地の北まで残存している。その中で、かつての町並を比較的よく保存しているのは市道稲荷山線以東つまり、ちかく土地区画整理の施される打出春日町の地域なのである。ここでは、道は阪神電車線の北方をいくらか弯曲しながら線路と並行して続いている。口碑により復原した昭和初期か

ら戦後までの姿は、下図のとおりである。ここではその図を補う口碑資料を紹介する。

打出春日町一帯が、旧テラカイチ（寺垣内）とよばれた地域である。街道の北に並ぶ民家の少し北方で地形は一段高まり、その上は畑であった。春日町九番地付近は打出村の共同墓地で、その両方に、打出焼の窯場があった。街道からは、幸田氏の西から墓地への〝そうれん道〟があり、道は西宮のニテコノ池（満池谷）まで続いていた。

人が亡くなると、行列して、そうれん道を墓まで進み そこから棺をのせた輿をかついだ人々だけが満池谷の火葬場まで運んで荼毘にふす。翌日、迎えに行ってお骨は家に帰らせ、ひと七日か、ふた七日のうちに、墓に埋葬した。六十年くらい前からの葬風だが、昭和のはじめ頃からは、三条の火葬場に運ぶようになった。

付図の町並みは、約四十年前のものであるが、それ以前の約六十年前ころのようすを補足する。

〝ウエヒサ〟さんの植木商の北に、中島亀吉氏の菓子

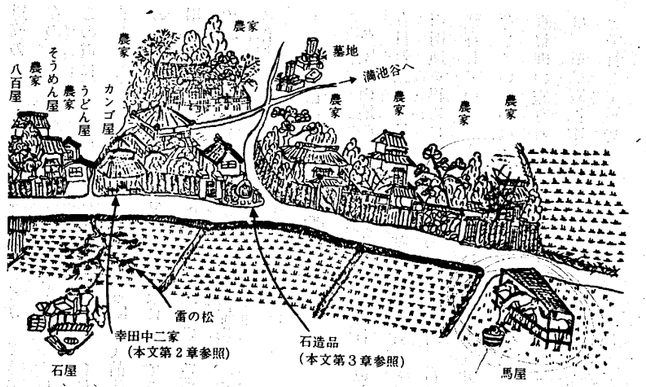


図79・80　春日地区　旧西国街道沿いの街並み復原

（本図は、大正期から昭和初期のもので聞書きをもとに絵図風に復原したもの）

店があった。

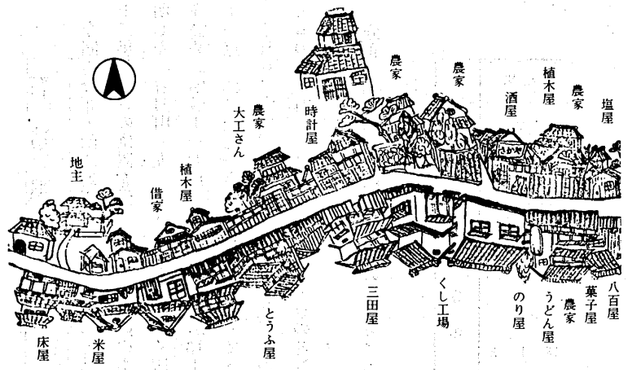
春日町一一八番地付近に天王寺谷喜太郎氏の風呂屋があったが、のちに打出市場東の打出温泉の開業で戦前に閉店している。図の散髪屋ができる以前には、その東すじむかい道の北に散髪屋があった。

六十年程前には、医師は阪神の南西の渋川氏、八百屋の樽井・坂本氏の店も、「魚じゅう」という魚屋も阪神の南にあった。主婦はこれらの店のほか、多くは西宮の公設市場で用を足し、その帰途、よく風呂などによって帰ったという。

旧街道には、バリキ（馬力）の幅に板石がしかれてあった。西宮駅に降ろされた酒米を東灘の酒造地に運んだり、また、西宮の宮水を運んだりするのも馬力によっていた。

北方の畑の北、打出の山地の土は〝黄金土〟とよばれる良質の赤土で、陶器にも使われ、旧街道沿いに何軒も土屋があった。山地には、まったけ山もあった。

阪神電車の南に旧国道があったが、その南手は深い湿



田で〝シル田〟とよばれており、その南の浜辺では綿作も行われていた。

図78　春日町旧街道のおもかげ
（昭和53年、小松新三郎氏撮影）

このような街並み調査を通して感じられたことは、打出西国街道は、生きている道の歴史であるとともに、かって旅する人びとに、親しみと共感を呼び、日常生活に密接につながっていたこと。また、道標や石佛には、栄枯盛衰にたえてきた打出の人びとの心が脈々ときざみこまれていることである。

石造遺品

今回の分布・確認調査によって、既に移動し、昭和四十二年度当時の位置を保っていないもののあることが判明した（春日町三九　No.4）。また、新しく四か所の遺存を認め（No.5－一七点、No.8－二点、No.13－一点、No.16－一点）、総計一五一点を確認することができた。

それらの中で、春日町土地区画整理事業の該当地域に入るのは、No.1・2・3・5・6・9の各群で、計四五点が数えられる。

分布・確認調査の結果は次表のとおりである。

表4　石造遺品分類表

種類		小分類	
石一	破損	阿弥陀	2
	36	銘なし	34
五輪塔	完型	阿弥陀	3
	22	刻銘	1
		銘なし	18
五輪塔	13	梵字	3
		銘なし	10
定印弥陀			28
地蔵尊			6
道標			4
擬宝珠			3
手洗鉢			5
その他	17	反花座	5
		僧形	2
		観音	2
		墓碑	2
		境界石標	1
		石碑	1
		不明	4
（No.4・No.7を除く）総計			134

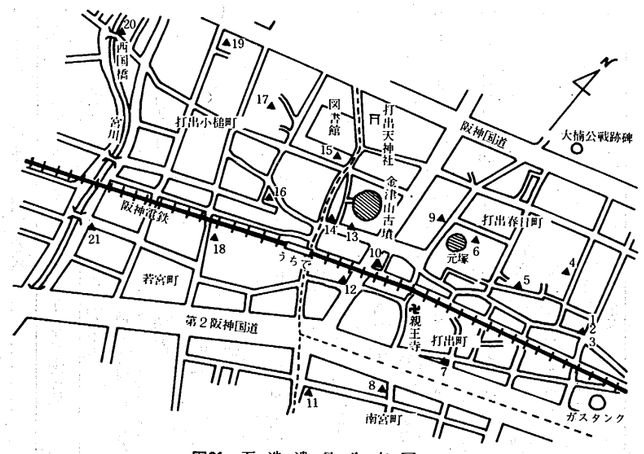


図81　石造遺品分布図

表5　石造遺品分布推認一覧表

所在地No.	所在地	種類	個数	記銘（高さセンチメートル）
1	打出春日町28	道標	1	「左中山 丹・□□□右 西宮道」 (44.5)
2	打出春日町28	道標	1	「法界」 (88.0) 「左 細川道 妙見山」
3	打出春日町28	宝印弥陀 一石五輪塔 五輪塔	6 完2 破1 破2	(32.5・28.0・35.0・31.0・29.5・32.0) (53.0・48.0) 空・風・火・水輪。 空・風輪。 空・風輪、梵字あり。
4	打出春日町39			親宮寺へ移転
5	打出春日町49	宝印弥陀 一石五輪塔	2 完3 破7	(53.0・29.5) (42.0・50.0・52.0) 火・水・地輪(4) 空・風・火・水輪 地輪
6	打出春日町99	五輪塔 反花座 五輪塔 反花座	破3 2 破2 1	地輪 空輪 火輪(2) 地輪。四方に梵字あり。 火輪。地輪と同一物ではないらしい。
7	打出町5 （旧南宮町75）			区画整理区域からはずれ、ただ、立派な祠の中に納められており、緊急調査の必要は認められないので、今回は存在の推認にとどめる。
8	南宮町1	宝印弥陀 五輪塔	1 破1	(55.0) 空・風輪。
9	打出春日町114	宝印弥陀 一石五輪塔	1 完8	(23.5) 地輪に定印弥陀 (96.0) 地輪に定印弥陀 (65.0) (28.5・61.5・50.5・36.0・35.0・35.0)
10	打出春日町124	地蔵尊 一石五輪塔 墓碑 五輪塔	1 1 破1 1 破3	風・火・水・地輪 「延享二丑年 法名釋智讃 九月十八日」 (23.0) (31.0) 空・風輪 火・水・地輪(3)
11	南宮町2	宝印弥陀 僧形	1 2	(48.0) (13.5・12.0)
12	打出町1	椿の髪宝珠	1	(114.0)
13	打出春日町150	椿の髪宝珠	1	(89.0)
14	打出春日町160	道標	1	「平城天皇第四皇子是ヨリ五丁 阿保親王開」 (176.0)
15	打出小槌町2（図書館南庭）	境界石標	1	「従是東尼崎領」 (159.0)
16	打出小槌町18	一石五輪塔	完1	(62.0)
17	打出小槌町36（鞍塚）	宝印弥陀 一石五輪塔	14 完2	(51.0・48.0・39.0・39.0・39.5・41.0・35.0・48.0・23.5・40.0・(51.0・43.0・44.0)・48.5・47.5・(47.0))
		地蔵尊 墓碑 手洗鉢	1 1 2	「大塚」 昭和一年四月藤澤氏建之 (76.0)・(61.0・63.0)
		五輪塔 地輪 空・風輪	破1	(56.0)
		五輪塔 火・水・地輪(2)	破1	(19.0)

所在地No.	所在地	種類	個数	記銘（高さセンチメートル）
18	若宮町 3	観音像	2	如意輪観音 (67.0・65.0)
		一石五輪塔	完 3	(47.0・62.0・42.0)
		五輪塔	破 2	空・風・火・水輪
			破 2	空・風輪
		地蔵尊	2	火輪・梵字あり
				火輪
		不明	1	「大正十四年五月建之」 (82.2・98.0)
				橋柱か？ (18.0)
19	打出小槌町 46	道標	1	「打出一番通り (174.0)
				主 昭和十一年五月二十日建立
				兵庫県武庫郡精道村打出願
				愚まれぬ地蔵菩薩の道標へ
				明け暮此處に井越照らす成」
20	打出小槌町 86	地蔵尊	1	「秋山宗林信士 (97.0)
				三界萬霊
				智光童子」
				「延享二乙丑年十一月廿三日
				本尊并板橋造建之
				施主 安井院浄蓮宗口士居」
		定印弥陀	2	(42.0・35.0)
		一石五輪塔	破 2	空・風・火・水輪
				水・地輪
		反花座	2	(43.0・58.0)
		手洗鉢	1	中央に鉄管、四方に溝がある
21	若宮町 8	定印弥陀	1	(41.0)
		一石五輪塔	完 3	地輪に定印弥陀 (80.0・56.0・30.0)
			破 5	地輪に定印弥陀
				地輪
				火・水・地輪(2)
				火・水輪

所在地No.	所在地	種類	個数	記銘（高さセンチメートル）
		五輪塔	破 1	火輪
		地蔵尊	1	(35.0)
		石碑	1	「常盤地蔵尊」 (122.0)
		反花座	1	
		手洗鉢	1	「大阪 片山右一」 (21.0)
		不明	1	石仏 (56.0)

いずれも祠の中か、あるいは祠がないところでも丁寧に祀られており、保存状態は概ね良好と思われた。

No. 17は鞍塚とよばれ、『打出史話』には「古来阿保親王の愛馬の鞍を埋めたという伝説がある。域内に方形造りの小堂があって不動尊を祠り、その傍に多数の石仏五輪等が並んでいる」とある。堂内には明治二十四年奉納の額や大正十四年七月修理天王寺谷勘太夫、昭和二年五月再建施主藤沢友吉、昭和七年地蔵尊道路寄付などの記事がみられる。

さらに、略測調査によって、多くの一石五輪塔には、総高・幅・奥行など計測値にいくつかの規則性のあることがわかった。一般に、室町後期以降の小形の一石五輪塔は、一尺五寸、二尺、二尺五寸など、その製作に基本単位をもっているが、レディーメードによる生産体制の反映であろう。

石材の石質は大部分が六甲花崗岩であり、次いで布引花崗岩が使用されている。その他、硬質砂岩製四点、凝灰岩、砂岩、石英粗面岩、コンクリート製各一点、判別不可能なもの一点を数える。

西摂地域では、室町時代前期後半より、和泉砂岩の移入が始まる事実があるが、花崗岩が非常に多く用いられているのは、御影石の採石場、六甲山塊が近いためである。

これらの石造品の造立年代に関して、個々について明

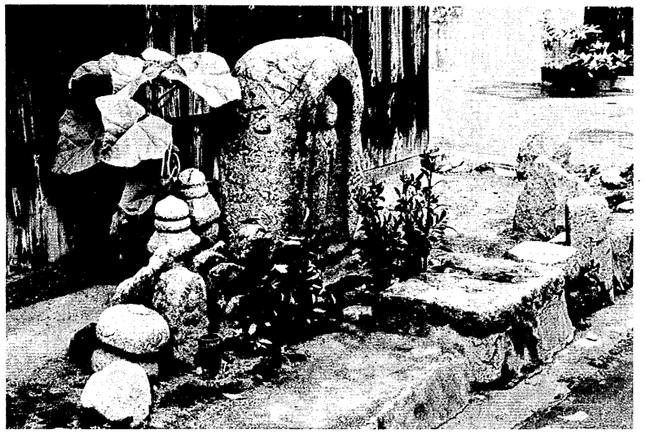


図82　打出春日町28（小松新三郎氏撮影）

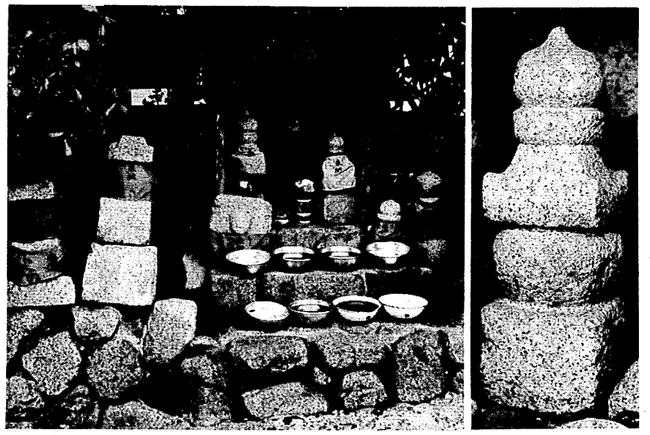


図83　打出春日町49

図84　打出春日町49

図85　打出小槌町36

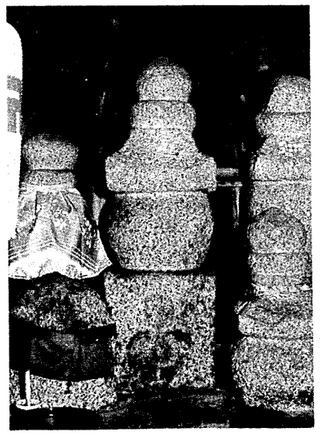


図86　打出春日町114

図87　打出小槌町36

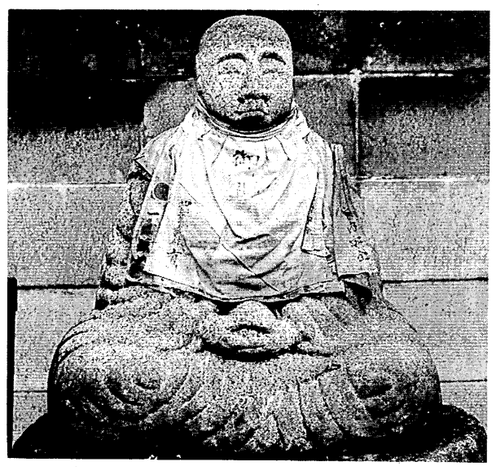


図88　若宮町３

図89　打出小槌町86

図90　打出小槌町２

図91　地蔵盆風景（打出春日町49）

確な断言はできないが、大半の資料は近世・近代に入ってからのものと考えられる。一石五輪塔の一部には室町末期にまで遡らせることのできるものが存在するが、わずかである。

最後に、祠の中に納められているため、略測および撮影のできないものがあったことを付記しておく。

文献に描かれた市内・街道筋の風光から

古代律令制下で、都と大宰府を結ぶ山陽道が芦屋付近を通っていた。都から南西へ、西摂平野を横切ってきた道が、大阪湾岸に出たところに、「打出」の地名がついたとされている。ここから、道は西方六甲南麓の海と山の間に入ってゆく。この首の部分に当る交通の要点であるため、古代には、芦屋に駅が設置されていた。『延喜式』には、山陽道の草野と須磨の間に「葦屋駅　十二疋」と駅馬が規定されている。当時の道筋がどこを通っていたのか、詳かにわからない。が、この道沿いに並んだ東神戸の三つの前方後円墳を歌った万葉の三歌人―高橋虫麿・田辺福麿・大伴家持―の葦屋菟原処女の歌を考えると、海岸近くを通っていたとも思える。平安時代の往来の一端は、『伊勢物語』の一節にもうかがえる。つまり芦屋に住んだ在原業平を、都から兄の行平らが訪ね、ともに一日、布引の滝を見にゆく。帰りが遅れて暗い夜道

で業平の歌った歌が「晴るる夜の星か河辺の蛍かも我すむ方の海士のたく火か」だという。『源平盛衰記』によると、福原京ちかくの名所として、「治承四年八月十日左大将実定は浮世の旅の思い出に名所名所を問ひ見てぞ上られける。千代に変らぬ翠は、雀の松原・御影の松、雲井にさらす布引は、我朝第二の滝とかや。業平の中将のかの滝に、星か川辺の蛍かと、浦路遥かに詠めけん、いづくなるらんおほつかな。求塚と言へるは恋ゆゑ命を失ひし、二人の夫の墓とかや……」と海辺の山陽道の風光が描かれている。同書によると、福原兵庫の平氏を伐つため京より下る源範頼の兵が、寿永三年二月「五日の暮がたに、源氏崑陽野をたて、やうやう生田の森に責ちかづく。雀の松原・御影の松、崑陽野の方をみわたせば源氏手々に陣をとて、遠火をたく」とある。これらの点描地から推せば、当時の道は、のちの浜街道のあたりを通っていたと思われる。

中世にはいると、鎌倉幕府打倒に起った後醍醐天皇が隠岐に配流の途中に元弘二年三月八日、山陽道の芦屋の松原を通った。同日、土佐へ流される尊良親王、翌日にはやはり讃岐へ流される尊澄法親王が、それぞれ打出の宿に一泊している。『増鏡』や『太平記』から、当時の山陽道の住来がうかがえるのである。南北朝の動乱期にも、交通の要地としての当地の性格をよく示している。建武三年二月十日の楠木正成・足利尊氏の打出合戦や、観応二年二月十七日の尊氏と弟直義一派との打出浜合戦などもその反映といえる。中世、山陽道を通行した多くの兵士たちの記録が残っている。戦国末期には、伊丹城の荒木村重一党の叛乱に対して、天正六年末に武士をつかわしたのは、織田信長であった。「滝川左近・惟住五郎左衛門両人差遣はされ、西宮・いばら住吉・あし屋の里・雀が松原・三陰の宿・滝山・生田森陣を取り」鼻熊（花熊）城を攻撃したことが、『信長公記』に記されている。

やがて江戸時代には、道は西国街道の名でよばれ、西宮から打出に来て、二本に分岐するようになる。打出からななめ西北にのび、茶屋之町付近で今の国道二号線と

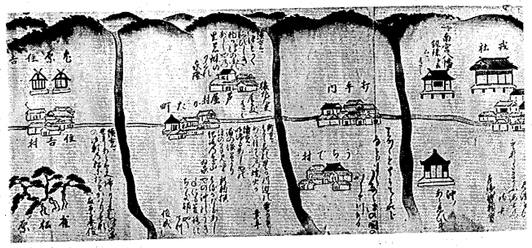


図92　江戸時代「尼崎より明石までの海道名所図」
西宮の戎神社、津門川の西に、うちで村がみえ、あしや川の西に、芦屋村が描かれている。

ほぼ並行する本街道と、打出から、ほぼ第二阪神国道沿いに西進する浜街道とである。二本の交通路は、西方、生田神社の南手で合流して中国地方へとつづいていた。当時、大名行列などは本街道を通り、民衆は、浜街道を往来したという。文化元年に長崎にむかった太田蜀山人は、その旅を『革令紀行』に書きのこした。同書によると、芦屋付近は次のように叙べられている。

「……しく川をかちわたりして、又小河を渡り田間をゆけば人家あり、打出村といふ、虚無僧本寺京都明勝寺留場といふ札たてり、右に社あり、右に石碑あり、すぐ兵庫道大阪西宮道とえれり、鳥かひ川にかり橋あり、かちよりわたりて蘆屋村に入る、ここにおかしき招牌あり表具処嫁入道具ありとかけるさまひなびたり、村はづれに四辻あり、左右車道すぐ兵庫道あし屋の里とかける杭あり、蘆屋川をかちわたりしてゆけば、左に海ちかくみゆ、右に稲荷之社自是三町とえりし碑あり、……」

こうして西国街道は、近世、五街道につぐ交通路として賑い、鳴尾と御影の間、津知に一里塚が築かれていた。

なお、近世この街道ぞいに芦屋の風光を描いた多くの地誌が刊行されている。重複するところ大であるが、一覧の便宜のために最後にそれらを収録しておこう。

(一)最も早いものとして、延宝八年（一六八〇）になった村尾一風・山田博宥の撰になる『福原鬢鏡』がある。

打出宿

尊氏都落ノ時、左馬督直義陣所。

すき鍬や或ハたこのうち出村　青木氏宗因

棟の槌やかすミをうんて打出村　衞田氏利安

所から里衣やうち出の槌の音　吉一

宝船作るうち出の小槌かな　三浦氏義次

阿保親王廟所

打出ゟ北ニ当、山ノ腰、建武年中ニ畠山阿波守国清、湯山ゟ山越ニ出ル陣所。

花乃波四海一也阿房堂

芦屋里

此所在原業平、藤栄領知、猿丸大夫屋敷ノ跡有之。

あしの屋の灘のしほやき暇なミ　業平

つけの小櫛もさゝすきにけり　山口氏繁生

穂に出るハちやせんなるらし芦屋釜　山田氏博宥

穂に出るあし屋の里の綿子かな　是水

雪にてやあし屋の里の煎茶釜

(二)ついで十八世紀に入ると、岡田俟志による元禄十四年（一七〇一）の詳細な地誌『摂陽群談』が出る。

巻第二　村里

○兎原郡

○津知村或辻に作る　○三条村新田小名あり

○葦屋村　〔姓氏録〕云、摂津国諸蕃葦屋漢人（アヤビトイシウクイミキ）石占忌寸同祖阿智王之後也云云、里を読る歌其部にあり新田小名あり

○打出村　所伝、浜の部に詳也、因て于是略之

巻第三　○山の部歌名所

○俗名所附峯・峠・嶽・窟・洞

金津山　兎原郡打出村に向ふ北の岡山也。所伝云、阿保親王此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚を埋せ、此里飢

餓に及ふ時、是を掘て飢を養へしと也。因て金津の号あり。土俗三十一字を以て伝之云、

朝日さす入日輝この下に金千枚瓦万枚云々

○川の部歌名所、俗名所、附川原

蘆屋川　兎原郡蘆屋村にあり。所伝、地名に因れり。武庫の山中より出て、海に入所也。

巻第四　○海の部歌名所

蘆屋海　兎原郡蘆屋村に属す。証歌未考。浦沖等をよめる歌、其部にあり。

○浦の部歌名所、俗名所

蘆屋浦　兎原郡蘆屋村海に同し。

〔続古〕十九　為家

明わたるあし屋のうらの波間よりほのかにめくる紀路の遠山

〔夫木〕雑七　俊成

はるかなるあしやのうらのうきねにも夢路は近き都也けり　後鳥羽院

〔同〕

螢飛あし屋のうらに海士のたくひとよもはれぬさみたれの空

巻第五　○浜の部歌名所、俗名所、附礒

打出浜　兎原郡討出村にあり。所伝云、往昔神功皇后三韓征罰し給て筑紫に帰玉ひ皇子生。是則第三御子応神天皇号八幡大菩薩也。于時第一皇子麻坂、第二忍熊皇子是を悪玉ひ、軍士を此浜に集て船を待。皇后知之、南海に巡て帰洛し玉と也。皇子軍士討出るを以て討出浜の号ありと云へり。歌名所打出浜は近江国にあり。○下略

巻第六　○湊の部歌名所、俗名所、附沖洲

蘆屋沖　兎原郡蘆屋村に向り。

〔新勅〕八旅　俊成

はるかなるあしやの沖のうきねにも夢路は近き都也けり

〔夫木〕雑五　公通

朝朗あし屋の沖を行舟のよそめは鴨のいるかとそみる

〔同〕秋　為家

今宵われあしやの沖の月をみて鹿の音さそふ風をそきく

〔金葉〕　実家

夕されは蘆屋の沖に風過て生田の小田もほなみ立けり

○津の部歌名所、俗名所、附門・瀬・泊

蘆屋洋　兎原郡蘆屋村に属す。

〔新古今〕雑　紫平

あしの屋のなたの塩やきいとまなみ　つげのおくしの　さゝすきにけり

〔続古〕一春　順徳御製

蘆のやのなたのしほやきあまのとをおし明方そ春は淋しき

〔同〕十二

あしの屋のなたの塩汲あま人もしほる小袖のいとまなきまて

巻第八　○湯の部歌名所、俗名所

芦屋湯　兎原郡芦屋村にあり。

俗伝に云、往昔霎に於て塩湯涌出す。今有馬の湯筋也と云。いつの比か退転して今は古跡と成て名のみあり。

巻第九　○市の部歌名所、附駅

蘆屋駅　兎原郡葦屋村を指り。

○里の部歌名所、附道・関

葦屋里　兎原郡葦屋村を指り。

〔続古〕四秋　家隆

いつもかくさひしきものかつの国のあしやの里の秋の夕くれ

〔後拾〕三夏　衣笠内大臣

ぬれてほす隙こそなけれ夏かりのあしやの里の五月雨の比

〔続拾〕四秋　定家

ほの〳〵とわか住かたは霧こめてあし屋の里に秋風そふく

○塚の部歌名所、俗名所、附墓所

鵜塚　兎原郡蘆屋住吉両河の間にあり。俗伝云、近衛院御宇仁平三年源三位頼政公の矢に射落されし化鳥、鵺（ウブコヱネ）に入て西海に流す。此浦に流寄て留る事暫あり。浦人取之、是に埋み鵜塚と成し側に就て祀祭の所伝たり。亦東生郡淬上江村に鵜塚あり。蘆屋浦に鵜を取て埋之、其柯を捨て海に流す。潮逆上て淬上江に寄り、拾之以て鵜鵜塚と成す歟と云の一説あり。蘆屋浦には北岡に叢祠あつて鵜之社と号祭る。東西遙に隔て同じ号あり。其証所縁不詳

○陵の部附廟・石碑・塔

阿保親王廟　矢田部（ヤタベ）郡打出村親王寺にあり。仁和三年、在原行平朝臣須磨に配流の時、此廟を遷たるの所伝たり。寺記其部に然り。〔三代実録〕曰、元慶四年五月廿八日辛巳、在原業平者、故四品阿保親王第五子、正三位行中納言行平弟也、阿保親王、娶桓武天皇女伊豆内親王、生業平、天長三年親王上表曰、無品高岳親王之男女、先停王号賜朝臣姓云々。行平配所亭は其部にあり。

○城郭部附古城・古戦場

蘆谷古城　兎原郡蘆屋村にあり。所伝、蘆屋左衛門第宅の古跡と云へり。

巻第十　○古地・旧屋の部歌名所、俗名所

公光第宅古迹　兎原郡蘆屋村にあり。伝記不詳。昔此所寺

院有て湯元の薬師と号す。今有馬湯山薬師堂奥院として僧坊月次の参籠ありと云ども終に退転せり。当浦、有馬潮と称するの記、雑類に記せり。

猿丸大夫旧栖　同所にあり。土俗の伝云、猿丸、蘆屋の産と云へり。其旧栖に居住する者、姓と成て猿丸の何某と称す。村民是を崇敬して人の上に置けり。未見其記、伝語亦不詳と云ども今に旧栖とする事然り。〔帝王正統録〕云、弓削王、或猿丸、厩戸皇子続云々。〔扶桑隠逸伝〕云、猿丸大夫者、深草郷人、至今土人名深草曰猿丸郷、未詳何代人、或曰、元慶間之人也、或曰聖徳太子之孫弓削王也、世莫知其然否、于後隠于江州曽来山中、鴨長明方丈記云、渉田上川、尋猿丸大夫之墓、是也、猿丸善和歌、古人曰、其奥山紅葉之歌、与在羽林西対春夜之詠、相抗衡云、贊曰、藤杜之間、有名奥山者、相伝猿丸之咏和歌之処也、顧是猿丸之旧栖、而後人因名之耳、余故尋曽来山中、過乎田上川、行二里余、臨于溪上有巖居之跡幽趣可悦、却入山中一里許、有猿丸祠、此亦大夫遊処之地、而村民奉祠也、云々

藤栄屋敷古迹　同郡同所にあり。俗伝云、蘆屋村及び近郷七百余町の領主、藤左衛門尉、病の床に臥て、一子月若を、伯父藤栄が猶子と成て、相続の事を遺言し、終に卒す。藤栄恣にして、遺迹悉く横領せり。因て月若、孤独の身と成れり。最明寺入道時頼公、諸国に巡て、貪狼放逸の族徒を禁む。於于是、月若訴之、藤栄を糺問して、其邪を改め、所領を反し賜と云へり。

業平朝臣仮居古跡　同郡同所にあり。俗伝云、昔此所は行平卿領地たる故に業平卿も暫く遊歴の処也と云へり。

巻第十五　○寺院の部

親王寺　兎原郡打出村にあり。山号阿保山と称す。三品弾正尹贈一品阿保親王廟院也。本尊弥陀慈覚大師手造を安置す。廟又其部に記す。

巻第十七　雑類名木名石等類拾集之

竜燈火　同郡蘆屋村の沖に見る火也。海中の鱗神竜を祭る火也と云伝り。

有馬潮　同所磯辺より沖中にあり。有馬郡有間温湯は、紀州熊野神力を以つて、潮を交え塩湯と成て和之、衆生沈

痾の患を救玉ふ。因て紀伊の南海より潮筋虹の如して、時あり神慮厳然の奇妙、今も猶絶せざり。因つて有間潮と号るの所伝たり。往昔は有馬温泉寺奥院と号け薬師堂在て、僧房温泉山を出て月次参籠の事あり。後世破壊して、印ばかりと成れり。

(三)それとほぼ同時代、宝永七年（一七一〇）の『兵庫名所記』が菊屋新右衛門によって刊行されるが、前書とは書き方がかなり違っている。

一葦屋里　かい道の北、山ぎわの村也。あしや川あり。
問かしな芦やの里の晴る夜のわかすむ方の月ハいかにと　少将内侍
ほの〳〵とわかすむ方ハ霧こめて芦やの里に秋風そ吹　定　家
いつもかく淋しき物か津の国のあしやの里の秋の夕暮　家　隆
○業平朝臣仮居古迹　此芦屋の里、行平卿領地たりし故に業平卿も暫く遊歴の処なり。
晴る夜の星か川辺の螢かも我住かたの海士の焼火か　業　平
○藤栄屋敷　古迹村の中に有。昔あしやの里に及び近郷七百余町の領主、藤左衛門尉、病の床に臥て、一子月若を伯父藤栄が猶子となして相続の事を遺言し、終に卒す。藤栄咨にして遺跡悉く横領せり。因て月若孤独の身と成れり。最明寺入道時頼公、諸国をめぐつて貧狼はういつの族徒をいましむ。是によつて月若是をうつたへ、藤栄を糺問して其よこしまをあらため所領を返したまふといへり。
○猿丸太夫弁公光旧栖、此所也。村の内外に古迹のこせり伝証不レ詳。猿丸太夫の石塔ハ川ゟ東ニ有。
一鵜家　芦屋川東かい道下手に有。近衛院の時、源三位頼政、矢にて射落されし化鳥、鵜舟に入て西海にながす。此芦屋の浦にながれよつて留る。浦人是を取て是に埋む。
一湯元の薬師　同所三条村の間に有。塩通山と申。当国有馬温泉の潮ハ、熊野権現の神力にて、南海ゟ此芦屋の浦に引通ふと云。往昔ハ有馬温泉山の僧坊、月次参籠して此尊像を拝す。後世伽藍破壊して、今草堂となれり。むかしの松残り、仍て湯元の松といふ。
一芦屋洋　同浦　同潟　同沖
あしの屋の離の塩やき暇なミつけの小櫛もさゝすきにけり　業　平

夫木
螢とふ芦屋のうらにあまのたくひとよもはれぬ五月雨の比　後鳥羽院
明渡るあし屋の浦のなミまよりほのかに見ゆる紀路の遠山　為　家
遙なるあし屋の沖のうきねにも夢路ハちかき都なりけり　俊　成
芦屋かた月すむかたの浦風に海士のたく火の煙さへなし　国　冬
一金津山　打出村に向、北の岡山なり。
阿保親王、此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚を埋せ、此里飢饉におよぶ時是をほり取てやしなふべしと也。よつて金津の号ありと、俗伝に云、三十一字を以て是を伝ふ。
朝日サス入日輝クコノ下ニ金千枚瓦万枚ト云云
一打出宿　兵庫ゟ四里余かい道の少脇一村也。この浦むかし神功皇后三韓征罰し給ひて築紫にかへり給ひ皇子生す。是則第三の御子応神天皇号八幡大菩薩　于時第一の皇子麁坂第二忍熊の皇子是を悪給ひ軍士を以て此浜に集て舟を待。皇后是を知給ひて南海に巡て帰洛し給ふと也。皇子軍士討出るを以てうち出の浜の名ありといへり。歌名所打出の浜ハ近江なり
○尊氏ミやこおちの時、左馬頭直義ぢん所。
一阿保親王御廟　右打出村上手にあり。平城天皇第二皇子三品弾正尹贈一品阿保親王。仁和三年、在原行平朝臣須磨に配流の時、此廟を遷されたるよし。打出村の内に則阿保山親王寺と申寺あり。
○建武年中畠山阿波守国清湯の山ゟ山越に出る陣所也。

(四)享保十九年（一七三四）の関祖衡、並河誠所の計画した地誌『日本輿地通志』のうちの『摂津志』では、

畿内部巻第五十九　摂津国之十一

〔郡名〕　菟原郡　東至武庫郡界、南至海浜、西至八部郡界、北至有馬郡界、
〔郷名〕　賀美廃　葦原　原当作屋今呼本荘
〔村里〕　津知　一作辻　森　三条　葦屋　属邑五　打出　属邑一　○以上呼曰本荘
〔山川〕　葦屋溪　源出葦屋山中直注于海　○中略　漢人浜　在葦屋村名葦屋浦
〔神廟〕　天神祠　在葦屋村
〔式外〕
〔陵墓〕　阿保親王墓　在打出村、四畔有冢六、傍有寺、号曰阿保山親王寺、親王者平城天皇第一皇子母葛井氏、素性謙退、才兼文武、有膂力、妙弦歌、弘仁元年、太上天皇有入東之謀、親王坐此、出為太宰員外帥、天長初、特有恩詔入京、歷治部兵部卿弾正尹上野上総等太守、薨時春秋五十一、贈一品
〔仏刹〕　法恩寺　在葦屋村、有三好長慶文明年中喜捨文
〔古蹟〕　鷹尾城　在葦屋村、永正八年細川高国使瓦林正頼守之、細川淡路守攻之、淡路守敗走、澄元退於播州、七月高国使波多能勢荒大等救之、澄元率播州軍士、再囲之、城陥　○中略

葦屋駅　在原氏別荘　行平業平、毎以官暇、与朋友数輩、遊于此、見伊勢談、土人以其宅阯、呼見俳優外百番○俱在葦屋村曰猿丸大夫第　月若宅

〔氏族〕石占忌寸　出自後漢霊帝子延王阿知王之後　葦屋漢人　前同　○中略

在原業平　阿保親王第五之子、正三位行中納言行平之閑麗、放縦不拘略無才学、善作和歌、貞観四年三月、授従五位上、五年二月、拝左兵衛佐、久之、左近衛少将、尋遷右馬頭、累加従四位下、元慶元年、遷為右近衛権中将、明年兼相模権守、後遷兼美濃権守、四年五月二十八日、卒年五十六

〔文苑〕葦屋浦　井漢人浜　○続古今集曰、為家、明渡葦屋浦浪間従、幽所見紀路遠山。万葉集曰、在衣辺著而袴尼杏人浜過者恐布在奈利

(五)そして摂津の名所案内の集大成ともいえる『摂津名所図会』が秋里籬嶋によって、寛政八年（一七九六）に刊行された。

菟原郡

打出浜　打出村の浜をいふなるべし。伝云、むかし神功皇后三韓を征し筑紫に帰陣ます時、皇子を産給ふ。嫡后腹の廃坂忍熊の二王子、兄に於て弟に随ふへきやうやあるとて、軍船を此浜に集メて皇后の御船を覆し[みなころし]奪にせんと謀り、其諸軍の討出るにより、打出浜、打出宿とも号[なづけ]たり。和歌名所打出浜は近江国也。

阿保親王古墳　打出村上方二町許にあり。側に小冢六ツあり。抑此親王は、平城天皇第三の皇子、御母は葛井氏なり。素性謙退にして、智才は文武を兼たり。又胥力あり弦歌に妙なり。天長のはじめ、恩詔ありて兵部卿弾正尹贈一品を授けらる。

金津丘　打出村の西端に一堆の冢丘あり、これをいふ。土人口称曰、むかし阿保親王此地に殿舎ありし時、黄金千枚金瓦万枚を此墳の中に蔵め置く。此里人飢饉に及ぶ時これを掘出して五穀に交易[かえ]て飢を凌ぐべしと也。此所の牧童、今に歌諷[うたふ]ふ。其言に云、

朝日さす入日かゝやく此下にこがね千枚瓦万枚

按るに親王の御領にして別荘も此地にありしか。此辺の字に、御所内、堂の上といふ所あり。此親王は、在原の行平、業平の御父也。

天満宮　金津丘の側にあり。打出村の生土神とす。例祭九月十七日。

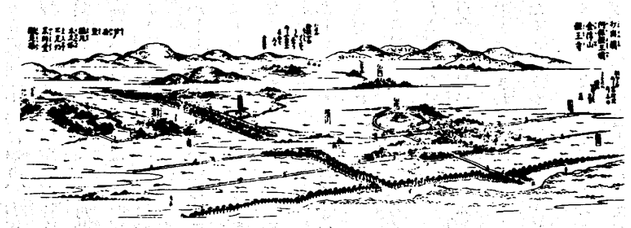


図93　摂津名所図会にみる芦屋の里

今から約200年程前の江戸時代の芦屋付近。京から西国街道を旅してきた人びとが打出の浜に出ると、そこには海がみえ、白砂青松の景観がひらけていた。この絵図には、阿保親王塚や金津山、薬師堂など今にその跡を残す旧跡も描かれている。

阿保山親王寺　打出村の中にあり。浄土宗。本尊阿弥陀仏[慈覚大師の作、長弐尺五寸、此地親王の殿舎といふ、後世寺となし阿保山と号す]

八十塚　打出村の西、岩平の山中にあり。数の多きより名とす。

葦屋里　東芦屋、西芦屋、芦屋新田等の字あり。古詠多し

[新古]いさり火のむかしの光ほの見へて芦やの里に飛蛍かな　[振政太政大臣]

[続後撰]問かしなあしやの里のはるゝ夜に我すむ方の月はいかにと　[少将内侍]

[続古]いつもかくさひしきものか津の国のあしやの里の秋の夕くれ　[家隆]

[続拾遺]ぬれてほす隙こそなけれ夏刈の芦屋の里の五月雨の頃　[衣笠内大臣]

[続古]ほの〳〵とわか住かたは霧こめてあし屋の里に秋風そふく　[定家]

[新千載]きつゝなけわか住かたの友ちとり芦屋の里の夜はのかりねに　[宣秋門院丹後]

[新続古]浦風もわか住かたのよや寒きあし屋の里に衣うつこえ

在原業平別荘古蹟　芦屋里の中なり。芦屋川の傍にあり。今田圃の字となれり。相伝、業平朝臣は阿保親王第五の子、正三位行中納言行平卿の弟也。母公は桓武帝の皇女伊登内親王也。此朝臣は体貌閑麗なり。和歌歌仙の其一にして代々の勅撰に秀歌多し。貞観四年三月、従五位上を授り、同五年二月に左兵衛佐にて、久しくこれに任じ

其より左近衛権少将に遷り、右馬頭になり、累て従四位下を拝し、元慶元年に右近衛権中将とし、翌年相模権守に美濃権守を兼て、同四年五月廿八日卒す。寿齢五十六

河海抄曰、業平朝臣は仙術を得給ひて、吉野の奥、天川より昇天し給ふとあり。さだかならず。

伊勢物語云 むかしおとこ津の国むはらのこほりあしやのさとにしるよししていきてすみたり 闕疑抄云菟原郡芦屋里は業平朝臣領知なるべし

昔の歌に

又新古今出 あしのややなたのしほやきいとまなみつけのをくし もさゝすきにけり　　業平朝臣

とよみけるそこの里をよみける。こゝをなんあしやのなたとはいひける。

新古今には業平の歌とす。称名院殿の御説に、むかしの歌とは遠きむかしに非ず、業平の自記にて、其始よみたるといふを、むかしと書給ふ也、と見へたり。

古今序 ありはらのなりひらは、そのこゝろあまりてこと葉たらず、しほめる花の色なうてにほひのこれるがごとし

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして　　業平朝臣

おほかたは月をもめてじこれぞこのつもれは人のおいとなるもの　　同

猿丸太夫古墳 東芦屋の西、芦屋川の傍にあり。高三尺許幅弐尺許、御影石にして、中に六字名号、左に猿丸、右に太夫と鐫たり。近年此辺より掘出せしとぞ。又西芦屋里に猿丸吉兵衛と名乗る民家一戸あり。何れも旧記なし其証分明ならず。摂津志曰、芦屋里在原氏別荘の宅址を土人呼んで猿丸太夫が旧第也とぞ。これ又詳ならず。

帝王正統録云 弓削王或は猿丸太夫といふ。厩戸皇子の後也云々。

扶桑隠逸伝 猿丸太夫は深草の人、今に至て土人深草を名て猿丸郷といふ。いまだ何れの代の人といふ事を詳にせず。或人曰元慶の間の人也。又曰、聖徳太子の孫弓削王也とぞ。其是非を知ず云々。鴨長明方丈記曰、田上川をわたりて猿丸太夫の墓を尋ぬ、と書り。又かの奥山に紅葉の詠は山州深草山也。今に奥山と称す。都名所図会に見へたり。

葦屋川　水源武庫の山中より流て芦屋里を歴て海に入。

月若宅址　西芦屋にあり。俗伝云、芦屋里近郷七百余町の領主芦屋藤左衛門尉といふ者、没後に一子月若に所領を譲る。月若幼少なれば伯父藤栄後見とす。遂に藤栄七百町を横領して月若を追放す。月若孤独となりて、最明寺入道時頼に訴ふ。故に藤栄が非を糺明して、月若に本領安堵の御教書を下す。此事謡曲外百番の中に出たり。

真偽不詳。

芦屋駅 いにしへは芦屋里駅也今は西宮より兵庫とつゞく

後拾旅 あしの屋のこやの渡りに日は暮ぬいつち行らん駒にまかせて　能因法師

鷹尾古城　芦屋里山手にあり。永正八年細川高国瓦林政頼をもつてこれを守らす。細川淡路守こゝを囲て攻る事急なり。同年七月高国、波多野荒木等の勢をもつてこれを援ふ。淡路守大に敗走す。澄元も播州へ退きて同八月播州の軍士を多く卒して再びこゝを囲む。遂に落城に逮ぶ

公光第 月若の古邸に隣る。謡曲雲林院の中に、芦屋公光と見へたり。これによりて古迹とする歟。

湯本薬師堂　西芦屋にあり。芦屋浜の潮、此薬師堂の下を潜り、有馬温泉山に通し湧出すといふ。故に此浜を有馬浦、有馬潮といふ。又寺を塩通山報恩寺と号し、いにしへは伽藍魏々たり。後世廃して一宇となる。

若宮祠　薬師堂の北にあり。むかしの鎮守なり。今此地の生土神とす。

鵶家 芦屋川、住吉川の間にあり、今さだかならず。むかし源三位頼政薨目にて射落したる化鳥、鵺に乗て西海へ流す。此浦に流よりて止るを浦人こゝに埋むといふ。又東成郡淀上江村の東、田圃の中にも鵶家と称するある事も一説あり。別記に書す。

漢人浜 芦屋浜をいふ。姓氏録曰、葦屋漢人は後漢霊帝の子、延王阿智王の後也。

芦屋浦　打出より青木までをみな芦屋浦といふ。

続古明 わたる芦屋の浦の波間よりほのかに見ゆる紀路の遠山　為家夫木

螢飛あし屋の浦に海士のたくひと夜もはれぬ五月雨の空　後鳥羽院

芦屋潟

続後拾 ふしや潟月すむ方の浦風に海士のたく火の煙だになし　津守国冬

葦屋沖

新勅撰 杳なるあしやの沖のうきねにも夢路はちかき都なりけり　俊成

新後撰 暮ぬとてわか住方にかへるなり芦屋の沖のあまの釣舟　前内大臣実夫

今宵われあしやの沖の月を見て鹿の音さそふ嵐をぞきく　為家

同 夕されは芦屋の沖に風過て生田の小田もほなみ立たり　実家

芦屋海士（あしやのあま）

新続古 春は又わか住かたにかへるなり芦屋のあまの衣かりかね　後鳥羽院

芦屋灘　惣して西宮より、蒐原、住吉に至りて、これを中灘といひ、住吉より生田に至るを大灘といふ。浦口浅滷にして、船を泊るに宜しからす。

続古 あしのやのなたのしほ屋のあまのとをおし明方そ春は淋しき　順徳院御製

同 あしの屋のなたの塩汲むあま人もしぼるに袖のいとまなきまて　後鳥羽院御製

沖竜燈　芦屋の沖に闇夜に時々見ゆる火也。浦人云、海中の魚鱗竜神を祭る也とそ。

(六)同様の播磨中心の『播磨名所巡覧図絵』も西摂の描写をしている。

巻第一

阿保山親王寺　打出村の内にあり。

○尊氏都落のとき左馬頭直義陣所。

阿保親王御廟尹右打出の上手にあり。平城天皇第二の皇子三品弾正尹贈一品阿保親王。仁和三年御子在原業平朝臣須磨に配流のとき此廟を遷されたるよし。

打出宿　兵庫より四里余。街道の少し傍の一村なり。此浦むかし神功皇后三韓征伐し給ひて築紫に帰り給ひ皇子生す。是即第三の御子（応神天皇、号八幡大菩薩）于時第一の皇子廢坂（かたさか）、第二忍熊皇子是を悪み給ひ、軍士を以て此浜に集めて船を待。皇后是を知りたまひて南海に巡り、帰洛し給ふとなり。皇子の軍卒打出るを以て打出の浜の名ありといへり。歌名所打出の浜は近江なり。

金津山　打出村に向ふ所の岡山なり。阿保親王此岡山において金の瓦一万、黄金一千枚を埋ませ、此里飢渇に及ばん時、是を掘取てやしなふべしと也。よつて金津の号あり。俗伝に三十一字を以て是を伝ふ。

朝日サス入日輝（かがやく）コノ下ニ金千枚瓦万枚云々

芦屋洋　同浦、同潟、同沖　証歌多し、略之。

新古今 あしのやの灘の塩やき暇なみつけの小櫛もさゝすきにけり　業平

湯元薬師　同所、三条村の間にあり。塩通山と申。当国有馬の温泉の塩は、熊野権現の神力にて、南海より此芦屋の浦に引通ふといふ。むかしは有馬温泉山の僧坊月並参籠して此尊像を拝す。後世伽藍破壊して、今草堂となりて、むかしの松のこれり、湯元の松といふ。

○鷹尾山城趾

鵺塚　芦屋川の東、街道の下手にあり。近衛院の時、源三位頼政矢にて射落されし化鳥、鵺船に入れて西海に流す此芦屋の浦になかれよりて止まる。浦人是を取て爰（ここ）に埋むとなん。

猿丸太夫　公光旧栖

藤栄屋敷　古迹村の内にあり。昔芦屋の里及び近郷七百余町の領主藤左衛門尉、病の床に臥して、一子月若を伯父藤栄が猶子と成して、相続の事を遺言して、終に卒す。藤栄恣にして、遺跡悉く横領せり。因て月若孤独の身となれり。最明寺入道時頼公諸国を巡つて、貪狼放逸の賊徒を禁しむ。依之月若是を訴へ、藤栄を糺問して其邪を改め、所領をかえし給ふといへり。

業平朝臣仮居古迹　此芦屋の里は行平卿領地たりし故に業平卿も暫く遊歴の所なり

新古今 晴る夜の星か川辺の螢かも我住かたの海士の焼く火か　業平

葦屋里　街道の北、山際の村也。

あしや川

後拾遺 ほの〳〵と我住方は霧こめて芦屋のさとに秋風そ吹く　定家

明治十八年の陸地測量部による二万分の一の地形実測図では、以前のいわゆる本街道は「至神戸道」と記していて逆に浜街道筋に「西国街道」の名がみえる。江戸時代と比べて、賑わいが逆転したのかもしれない。しかも両道筋が、ほぼ国道二号線および四三号線として近代的自動車道へと成長しているのである（次頁参照）。

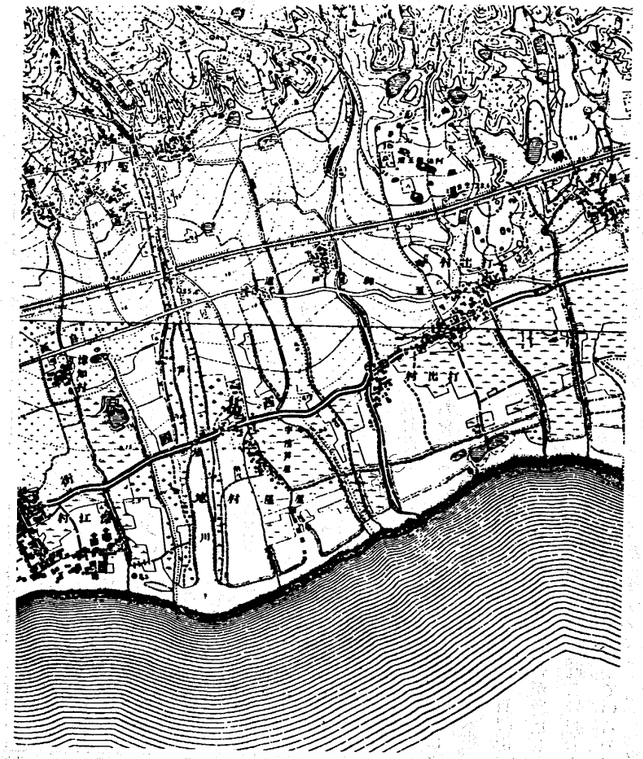


図94　地図にみる70年前の芦屋
（明治17・18年測量陸地測量部二万分一地形図）
芦屋川の川幅が下流ではかなり広かったことや、旧西国街道が打出付近で本街道と浜街道とに分岐する様子がよくわかる。また、街村や塊村が旧四か村の集落位置をよく示している。

第四章　芦屋の芸能

1　農作業の唄

苦しい労働の中で、近在の名所や、こまやかな男女の情を唄った農民の健康なおおらかさがうかがえる。なお歌詞は、各々の唄に転用された。

田植唄

様はよい声細谷川の、鶯の声ほそぼそと
様のさんど笠横ちょに被りゃ、少しお顔が見とござる
様の寝姿けさこそ見たが、五月野に咲く百合の花
様は三十でまだ子は一人、うどの出ばなか立て花か
春は花見におはるさんつれて、長い堤をばるばると
娘十七八抱き頃寝頃　お手をひき頃ひかれ頃
娘十七八渡場の舟よ　早く乗らぬと人がのる
娘十七八根深の白根　うまい所に毛がはへる
年増抱いて寝りゃ文句で困る、赤襟だいて寝りゃねて困る
年がいてよがおいにょ（老女）であろうが　年の上下の隔てない
雨は降って来る身は濡れて来る　傘は伊勢路の茶屋にある
田植しもたら植早苗振よ　鯖の鮨食て遊ばしゃれ
田植しもたら植早苗振よ　いとし殿御と寝て語ろ
今年ござる田の神様よ　ごえんあるならまた来年も

あがれとおしゃれ田主どのよ　人は一度でこらさぬものよ
腰の痛さよまちの長さよ　四月五月の日の長さ
面白いのは五月の田植　猫のほがぶりあとへよる

草取唄

お日はちりちり山の根にござる　わしの仕事は小山ほど
歌はよいもの仕事ができる　話や悪いもの手が止まる
歌はいろいろ八百八色　色の交らぬ歌はない
一夜こけて来い菜種折らん様にこけてこい
一夜ござれよ三夜さまござれ　七夜ざくらよ八夜ござれ
今夜庚申話にござれ　話すぎたら寝にござれ
声はすれども姿は見えぬ　夏の葉のきりぎりす
腰の痛いのにこの田の長さ　五月六月日の長さ
とろりとろりと寝むたい時にゃ　馬に五十駄の金もいや
馬に五十駄の金くだされば　何の寝たかろねむたかろ
さんど笠きて竹の杖ついて　あれは備前の牛ばくろ
わしは備前の岡山育ち　米のなる木はまだ知らぬ
酒は酒屋で飲んでは来たが　娘煙草の火を貸しゃれ

殻竿搗唄

殻竿搗して手に豆できて　主人と二人で寝てつぶす
暑や悲しや手拭ほしや　様の浴衣の袖なりと
馬は豆が好き馬子は酒がすき　すいた男は銭がすき
酒といふ字は三水扁に　旁こよみの酉と書く
山が焼けてもたたぬが雉よ　なんでたちましょ子をおいて
京の清水音羽の滝に　親の願なら打たれませう
親のない故七つの歳に　売られましたよ此の茶屋へ
蘆屋マルマル(トンネル)セメンでせめて　私しゃく

るわで身をせめる
深江越えたら大日如来　高いたかばし踊り松
ここは西宮戎の前よ　前は淀川ふねが着く
大阪道頓堀竹田の芝居　おあし(料金)や安ても面白い
大阪焼けても新町やけな　わしの名染の茶屋焼けな

臼摺(籾摺)唄

お伊勢参りをしたいぞや様と　お手を引合うて宮巡り
お伊勢参りは皆ぬけ参り　わしもぬけましょ此の春は
お伊勢様程お大社様に　何で宮川橋がない
宮へ参って何と言うて拝む　一生此の子のまめな様に
瀬田の唐橋唐金擬宝珠　光り輝く膳所の城
梅にほれても桜に惚れな　同じ花でも散り易い
桜に惚れても梅には惚れな　梅にゃホケキョのまぶ
(情夫)がある
梅もいやなら桜もきらい　も、とも、とのあい(間)がすき
梅は岡本桜は吉野　密柑紀の国栗丹後
丹波よいとこ女の夜這　男後生楽寝て待ちゃれ
山に行ってさえ遅けりゃ待つが　今年や行きゃるか百日に
倉の百日一銭ダラ(貨幣)きらい　二文足らずの百がすき
今夜茲で寝て明日の晩はどこで　あすは田の中畦枕
様の三斗俵か秋田の米か　お倉入にはなりゃしょまい
音頭とりさん壺へ入れられて　壺の中から音頭とる
打出甚右衛門さん大金持ちで　金のいきりで火がとぼる
お医者様でも有馬の湯でも　惚れた病は癒りゃせぬ
沖の暗いのに白帆が見える　あれは紀の国密柑船
臼の軽さよ相手のよさよ　相手かわるな明日の日も

(唄については『打出史話』・『芦屋郷土誌』などによった。)

2　その他のしごと唄

そうめんづくり

水車とともに消えていった芦屋の産業に、素麺づくりがある。

水　車　江戸時代、芦屋川の用水争いの頃から、水車谷・東芦屋・打出・三条などで二十数台の水車が、菜種油絞り、米踏みのために建設された。明治に入るとそれらは、素麺づくりに利用されていたが、しだいに精米に利用されるようになった。しかし、原動機の出現により水車は利用されなくなり、今では、姿さえ見ることが出来ない。ただ、開森橋上流の石垣にはめこまれた百以上の石うす・水車谷という地名から、かっての水車の存在を知るだけである。

そうめんづくり　江戸時代から六甲南麓でおこなわれていた素麺づくりは、十二月初めから三月初めまでの

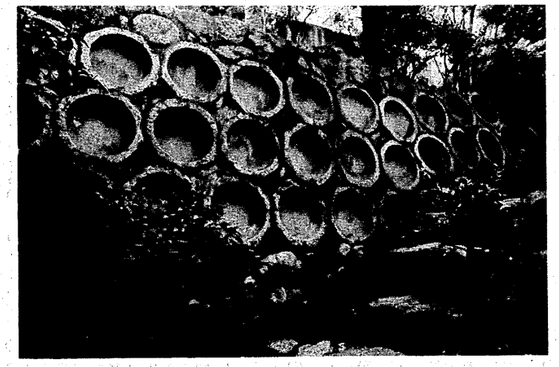


図95　民家の石垣に残されている水車臼（開森橋上流）

農閑期に行なわれていた。「ソーメン唄」に〝ソーメン師しょうより　ほかに職ないかえ　せめて朝まで寝る職がえ…〟とあるように、職人（農民・漁師）達の寝る時間もないほどの労働であったが、水車で作った小麦粉を利用し、東芦屋・西芦屋・三条・打出などで盛んに作られた。神戸・大阪と大消費地がそばにあり、その頃としては利益の大きい仕事の一つで一年間の収入で家が建つ（千円普請）といわれた。しかし、大正期になって芦屋の手延べそうめんは、衰退の一途をたどっていった。それは、播州そうめんの進出・機械による大量生産・芦屋の住宅地化などである。

江戸時代の『広益国産考』などにも、三輪（奈良県）とならんで、灘地方のそうめんが紹介されている。

このそうめん作りにまつわる作業唄として、次のようなものが伝承されていた。

そうめん作り唄

○可愛い殿ごにかけ場をさせて　わたしゃおそばで箸をとる
○可愛い殿ごの揑前の朝は　水は湯となれ風吹くな
○寝たや眠たやねた夜はよかろ　仕舞うてねた夜はなおよかろ
○可愛い殿ごはそうめん屋の頭　朝の塩水冷たかろ
○そうめん屋殺すにゃ刃物はいらぬ　雨の十日も降ればよい
○かけ場するのもこなしもたばも　殿に似りゃよい腹の児が
○そうめん上手は灘吉さまよ　うたの上手は丹波きち
○殿ご持つならそうめん師がよかろ　細うて長くて切れはせぬ
○そうめんししょうより　ほかに職ないかえ　せめて朝まで寝る職がえ
○灘のそうめん師にどこがよてほれた　朝のかけ場の手にほれた
○そうめん師夫に持ちゃかえるの面よ　空をながめて雨を待つ

糸紡唄

とろりとろりと眠たい時にゃ
馬に五十駄の金もいや
梅の匂を桜に持たせ　柳の枝
に咲かせたい

はた織唄

連れて行ってやろう丹後の宮
津　浜のちりめん織る気なら
歌は理でつむ　布杼でつむ
書いた文句は筆でつむ

芦屋市清水町

石つきうた

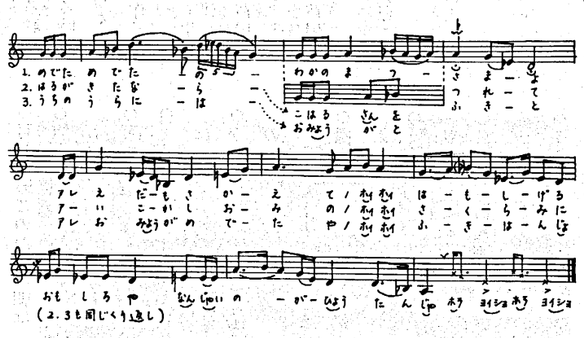


図96　石つきうた　中島富蔵 うた　芦屋市教育委員会（昭和49年採集）　中村茂隆 採譜

3　祝いの唄

各神社の祭りに神輿が出されると、ところどころで神輿かきの音頭が唄われた。また、村の家に祝いごとがあったり、祭りの日であったりして、酒宴などがあると、必ず伊勢音頭が唄われた。これらは、必ず唄い始めは、祝い（又は目出度）目出度の若松さまよ　枝も盛えて葉も繁る

で、はじめられ、めでたい歌詞の唄が（伝承のものや即興のものが）つづけられ、最後には、

御世は治まる思うことかのうた　末は鶴亀　五葉の松

と、唄いおさめられるのであった。

みこしかき音頭

神の松から吹きくる風は心勇んで色をなす
打出名所はかずかずあれど　わけて名高い黄金塚
宮の前なる腰掛松の　下で喜こぶ氏子中
神の前なる鳥居をくぐり　町を廻わってお旅所へ
打出名所はかずかずあれど　わけて名高い一つ松
月と花とに思いのますは　春の曙秋の暮
里は栄えて氏子はふえて　神もうれしとおぼしめす
朝日夕日に照り輝やきて　官居まばゆき神やしろ
神のみいずは昔のままに　氏子数ます村まつり
君と親とを氏神様に　千代に八千代と祈るなり

伊勢音頭

ああよーいさ　めでためでたの　ヨイヨイ　わかアまーつさまよ　アーヨーイセー　ソーラセイ　それ枝もなあ栄えて　そうれさ葉も茂る　ソラヤートコセーヨーイヤナ　ソレワイナーコレハイナー　ソラヨーイトセ

○此処の座敷は目出度い座敷　床なる松を眺むれば
一なる枝には一分金　二なる枝には二朱金　三なる枝には裏に波うつ四文銭　末は銅銭が鈴こなり

○此処の座敷は目出度い座敷　床なる掛図を眺むれば
戎子さんと大黒さんと相撲とる　大黒さんが負けた

ら槌渡そう　戎子さんが負けたら鯛渡そう　福は
此方へ皆渡そう
此処の座敷は目出度い座敷　上から鶴が舞い下る
下から亀が舞い上る　鶴と亀とが舞を舞う

4　遊び唄

手まり唄

○一番初めは一の宮　二には日光の東照宮　三には讃岐の金比羅さん　四には信濃の善光寺　五つ出雲の大社　六つ村々の鎮守さん　七つ成田の不動さん　八つ八幡の八幡さん　九つ高野の弘法さん　十で東京の二重橋

○大黒様という神は　一に俵にふんばえて　二ににっこり笑うて　三に酒造って　四つ世の中よいように　五ついつもの如くに　六つ無病息災に　七つ何事もないように　八つ屋敷ひいろげて　九つ米ぐらたて　初めて　十でちょうど治った

○うちの裏のちさの木に　うつつい鳥が三匹と　ばばいい鳥が三匹と　うつつい鳥のいうことにゃ　莚三枚呉莚三枚　合せて六枚しきつめて　夕べ帰んだ花嫁御　今朝は座敷へ座らせて　金らんどんすを脱したら　あっちを向いてはほろほろと　こっちを向いてはほろほろと　何でそんなに泣きなさる

○わしの弟の千松が　七つ八つから金掘りに　金が無いやら死んだやら　一年待っても状が来ず　二年待っても状が来ず　三年目に状が来て　状のうわ書一寸見たら　長い脇差ととさんへ　短かい脇差兄さんへ　櫛やこうがい姉さんへ　わんわん綿帽子かかさんへ　ちゃん　ちゃん茶袋ばばさんへ

5　新しい民謡

芦屋音頭

河野茂雄　作詞
山内隆補　訂

一、花の月若　チョイト　業平さまの　歌のきくよな
あしやのまちは　ヤレ　とろり　さみどり　朱に

うるむ
（囃し）
チョイキタ　さんさん　眸にうるむ
親王塚から　ぬえの橋　チョイナ

二、お山六甲の　チョイト　朝やけ雲に　灘の五郷の
風さへかおる　ヤレ　ましてあしやの　玉つばき
（囃し）
チョイキタ　さんさん　山つばき
高座の滝なら　双面　チョイナ

三、夢のなないろ　チョイト　あしやの虹が　松の並
木の　みどりのひまに　ヤレ　波の花さく　ちぬの海
（囃し）
チョイキタ　さんさん　るりの海打出の浜なら
打出の浜なら　緋のよろい　チョイナ

四、あしやの文化は　チョイト　海から山へ　萩の城
山　奥池あたり　ヤレ　やがて　灯が招ぶ　雲の中
（囃し）
チョイキタ　さんさん　もやの中
弁天岩から　湯泉の有馬　チョイナ

芦屋音頭

○ハー　芦屋な　ヨイサ　芦屋よいとこ住みよい所
アーセーヨコホイ　うしろ山　前は海
ハー　あしのな　ヨイサ　足の軽さよ　この日の
軽さ　アーセーヨコホイ　田植すまして　帰り道

○ハー　夏はな　ヨイサ　夏の涼しき　高座の滝
アーセーヨコホイ　落ちて流るる　芦屋川
ハー　歌はな　ヨイサ　歌はたもとに　まだある
けれど　アーセーヨコホイ　ちょいとここらでひと休み

6　草ずもう

芦屋では、村の社の祭りに相撲を奉納していた。岩園天

神社には、祭礼の奉納相撲の額が残っており、また、土地にも、力の強い草ずもうの力士がいた。市内の共同墓地から、芦屋霊園に移転した墓石の中には、「有田川松之助」「若の浦」など、そのような力士の墓が残っている。

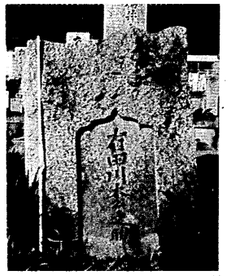


図97　公光墓地にあった力士の石碑。現在、市霊園に移転されている。

7　しゃこ踊

盆踊りでおどられる芦屋上宮川町のしゃこ踊りは、大正時代にこの地に定着しているが、伊丹市の麦わら音頭などとも踊りとしては同系列で江戸時代のものと思われ

図98　しゃこ踊り
(昭和53年11月11日、芦屋市民文化祭「郷土芸能の夕べ」〈ルナ・ホール〉)

る。口碑によると西宮から伝播されたといい、西宮市の西福寺では明治以前からこのしゃこ踊をおどっていたという。それが芦屋へ伝えられたのだが、伝わった年代は判然としない。

大正時代にようやく定着しはじめたが、昭和の初めまで西宮から指導にきてもらうことがあった。ようやく自立しはじめたころに第二次世界大戦となり盆踊は中断。戦後、有志の手で復興がはかられ、同好会が結成された。現在の踊は、もとの西宮のものからはすこし変形しているといわれるが、芦屋でのしゃこ踊の新しい成長ともいえよう。

農業の収かくをよろこんで、しゃこのように飛びはねておどるところからこの名がついたといわれる。かつては多くの踊り手がいて、疲れた人からいれかわり休んでは、踊の輪にかえっておどりつづけた。伴奏は、三味線・よつ竹・鐘・太鼓。激しいリズムの中で「三味線が勝つか踊が勝つか」とか「糸が切れるか皮が破れるか」といわれたものである。

8　だんじり

戦前まで芦屋市内には、八基のだんじりがあった。打出・津知・三条という旧村落に各一基、それに芦屋村内の五集落（山芦屋・東芦屋・西芦屋・茶屋芦屋・浜芦屋）の五基とである。

図99　地曳きされるダンジリ

これらのうち、三条・津知の両村は近世以前、本庄九か村と称して今の神戸市東灘区域の村々（森・中野・小路・北畑・田辺・深江・青木）とともに保久良神社の氏子として、古くは五月十三、十四日の祭りにだんじりを曳いていた。打出のものは、十月十七日の打出天神社の祭りに、他の五基は十月十五、六日の芦屋神社の祭りに巡行がおこなわれていた。

このうち山芦屋、打出の二基は現存する。津知・西芦屋・茶屋芦屋・浜芦屋のは戦災で焼失し、東芦屋のものは解体、三条のは売却されてしまった。

打出のだんじりは、近年まで天神社の祭日に境内南方のだんじり倉から出されて飾りつけられていたが、ここ数年は巡行が有志の手で復活された。

一方、山芦屋では、交通事情や曳き手不足で昭和三十六年から四十八年は地曳きは断続的になった。そこで、昭和四十八年、「山之町地車愛好会」が結成され、今日では十月十五、六日にもっとも近い土曜・日曜に、市内巡行がつづけられている。

だんじり自体は、明治九年製で明治四十年頃に神戸市兵庫区から購入されたもので、正面には素盞嗚命のオロチ退治、泥幕には義経の八艘跳や近江八景、脇障子には源平の敦盛と熊谷などの彫刻をもっている。また後方の小屋根の下には、賤ケ岳の戦いや加藤清正の虎退治が彫られてある。だんじりは、昭和五十三年に大修理が行なわれた。

また、装飾幕が二枚あり、古い方には竜や牛若丸、新しいのには南北朝の忠臣（楠木正成・新田義貞・児島高徳）の図が描かれている。

だんじり内では、太鼓・二丁鐘・半鐘が入り、地曳に際しては、出発・回る・前進・後退・宮入り・地ばやしの六種のだんじりばやしが奏される。

第五章　芦屋の伝説・物語

1　芦屋の菟原処子

むかし灘の地方の海べには、そこの湿地にはえる葦をきって屋根にふいた家が点在していた。そこで、このあたりを芦屋の里とよんでいた。

この芦屋に菟原処女とよばれる美しい娘があった。多くの男が彼女を恋しく思い妻にしたいと願っていたが、中でも同じ里の菟原壮士と、和泉の国からきた茅渟壮士（小竹田壮士）という立派な若者が最後までせりあって彼女に求婚した。二人は水の中でも火に入ってでも闘かおうと、太刀を握り弓矢を取って激しく争そったという。

しかし、処女はこのようすを見て心をいため、「私のような者のために、あんな立派な方たちを争わせたうえは、この世で誰と結ばれましょう。黄泉の国で待っていましょう」

と、自ら死を選んでしまった。

その夜、茅渟壮士の夢に処女が現われた。「ああ、彼女が選んだのは、私の方なのだ」と考えて壮士も後をおって死んでいった。そのことを知った菟原壮士は、じだんだ踏んで歯ぎしりし、遅れてなるものか、と、また後を追って死んでしまった。

そこで、三人の縁者たちが集まって、

「若者のいちずな心を後世に伝えてやろう」「そうだ、処女の墓を中央に、二人の男の墓をその左右に並べて築いてやろう」

と相談したという。

こうして作られたのが、東明（神戸市東灘区御影塚町）の処女塚と、呉田（同区住吉宮町）の東求女塚、味泥（灘区都通）の西求女塚だと伝説する。このため、中央の処女塚は南むき、そこから東西に同じく約二キロはなれた両求女塚は互に中央をむいて築かれているのだというのである。

この物語は、近在で最古の伝説の一つで、すでに万葉の三人の歌人――高橋虫麻呂、田辺福麻呂、大判家持――が歌っている。

そして後世、これは多くの人の心をうち、平安時代の『大和物語』、室町時代の謡曲『求塚』、森鷗外の戯曲『生田川』に素材を与えた。ただ『大和物語』以降は、処女を競った二人の若者は生田川に浮かぶ水鳥を射あって処女をうばいあった、と話のすじをふくらませ、三人の死・と生・田の地名をむすびつけて舞台を生田川へとうつしていった。

2　金兵衛車やけぐるま

六甲の山地をえぐって深い谷を刻みながら流れてきた芦屋川が、山地から平地に出ようとする付近に「水車谷」の地名がある。今の浄水場あたりから川下には、かつて数多くの水車場があったのだ。

江戸時代の中期から農村が経済的に成長をとげ、各地に特産品・手工業が興る。この地方でも名にしおう灘の酒造りが盛んになり、酒米精製のための動力源として、六甲山地を南流するいく多の河川が人々に利用された。白鶴美術館の上手には、現在でも八輛場・七輛場などの地名があり、灘区六甲川には水車新田と呼ばれる土地もあった。芦屋の水車谷も、同様に水車業のなごりの一つであり、水車にまつわる有名な民話がつたえられている。

灘の清酒は、有名になるにつれて御所や幕府に献上され始める。献上酒用の米をつく水車は高い格式が与えられた。

ある年、丹波の国の若者が、この格式高い水車での米

つき手に選ばれた。それは彼にとっても家族にとっても

また村にとっても大きなほまれであった。が、彼の胸中に一まつの不安があった。彼には幼なじみで想いあった美しい娘がいたのである。芦屋への旅立ちの日が近づくにつれ、別離の苦しさがつのり、いつしか二人は若者の任務を解いてほしいと願うようになっていた。けれども周囲の人々は、そんな二人の望みに耳を傾けはしなかった。

六甲越えで芦屋に着いた若者は由緒ある「金兵衛車」に入った。その水車の主人は、その水車の格式や彼の任務の名誉あることを説き、酒米をつく時には、まず芦屋川で身を浄め、全部つきおえるまで水車から出ることも他人とむだ話をすることもかたく禁ずるしきたりを言い渡した。この日から、若者はいよいよりりしく勤めにはげんだ。

一方、丹波に帰った娘には、縁談が持ちこまれた。思いあぐねた娘は、ついに村を出、恋しい若者のあとをしたって、はるばる芦屋の里に訪ねついたのだった。しかし娘の前には、水車の主人が立ちはだかった。

幾度たずねても会えぬうちに、とうとう半狂乱になった娘は、裏山から、二枝の榊を持って現われ、眼をつり上げ髪ふり乱して山野をかけめぐり、最後に、ぐるぐる水車のまわりをかけまわった。そのうち彼女の姿から妖しい炎が出始め、まもなく体中が焔と化して天空に昇っていった。その夜もふけた頃、金兵衛車は奇妙な光に包まれ、水車も臼も若者も主人も、ついに一つの火の車となって夜空に昇り姿を消してしまったという。

それがいつのことか、また若者の名を何といったか、誰も知らない。が、そののち芦屋では、子供達でも「金兵衛車やけぐるま」と謡うようになったのである。

3　怪物の墓「ぬえ塚」

『摂津名所図会』に、「鵺塚・芦屋川住吉川の間にあり。今さだかならず。むかし源三位頼政、墓目にて射落したる化鳥、鵺に乗せて西海へ流す。此浦に流れよりて

図100　松浜公園内にある〝ぬえ塚〟の碑

止るを、浦人ここに埋むといふ」とある。

仁平三年（一一五三）の夏、近衛天皇は不可解な病に悩まされていた。毎夜、丑の刻になると京の東三条の森の上に怪しげな黒雲がわきあがり、それが御所の上空をおおうと、鵺（とらつぐみ）の声ににたぶきみな鳴き声がひびくのだ。すると決って天皇は苦しまれる。徳の高い僧にご祈祷してもらっても、一向にききめがなかった。迷信ぶかい貴族たちは、これはきっと妖怪変化のしわざにちがいない、その怪物を退治しなければならない、と話し合った。そこで、百発百中の弓の名手、源頼政が御所によびだされた。その夜、いよいよくだんの時刻がやってきた。東三条からわきあがった黒雲が紫宸殿の上をおおった。「頼政きっと見上げたれば、雲の中に怪しき物の姿あり。射損ずる程ならば、世にあるべしとも覚えず。さりながら矢取って番ひ、南無八幡大菩薩と心の中に祈念して、よっ引いて、ひょうと放つ」（平家物語）

みごと一矢で怪物はしとめられ、雲間から落ちてきた。そこを頼政の家臣、猪早太がすばやく刺し殺した。

人々はてんでにあかりをたずさえ、怪物の死体に近づいた。見ると、「頭は猿、軀は狸、尾は蛇、手足は虎の如くにて、鳴く声鵺にぞ似たりける。怖しなども愚なり」（同書）。今はやりの浅はかな怪獣とくらべても、猿の頭蛇の尾・虎の手足に狸の胴体というこの様相はすさまじい。

この武勇のほうびに、頼政が獅子王という剣を賜った時には、宮廷の上空にはかっこうが二声三声。しずけさがもどっていたという。

さて、京都の人々は殺された怪物のたたりを恐れて、その死体をうつぼ船に乗せ、加茂川に流した。やがて淀川を下ったその船は、大阪東成郡の上江村に一たん漂着したのち、海上をただよって、芦屋川と住吉川の間の浜にうちあげられたという。人々は、いつしかこの怪物の鳴き声が鵺に似ていたことから、ヌエと呼ぶようになっていた。浜べの人々はこの怪物の死骸をねんごろにほうむった。これが「ぬえ塚」なのだという。

『摂津名所図会』では、住吉川と芦屋川の間にあったというが、塚の位置はわからない。今では、芦屋川の河口ちかく、東岸のテニスコートの近くの松林の中に、「ぬえ塚」という石碑が建てられている。

4　芦屋谷の鱶切り岩

六甲山中の巨石・巨木は、しばしば信仰の対象にされ興味深い伝説につつまれている。芦屋川の深い谷ぞいにも、そのような巨岩がいくつもある。山手町から川沿いの芦有道路を登ると、芦屋川が山間から山麓部へと流れ出る付近に水車谷というバス停があって、かつての盛んな水車業がしのばれる。そこでバスを降り登ってゆくと

図101　フカ切り雨乞い掛軸（鎌田彦市氏所蔵）

道の西側に貯水場がある。ここの東の尾根の上を見上げると、赤みがかった巨大な花崗岩がつき出している。烏帽子岩だ。明治末の『西摂大観』は、その姿を「……聳立し、いまや墜落せんとするの状勢なるより、之を仰き看るもの自ら心胆を寒ふす」と記している。ここからすこし北で道は大きな二つのヘアピン・カーブを描いてV字谷の西の斜面を一気に登っていく。その途中で、道路は西から張り出した巨岩のために、東へゆがめられ建設された箇所がある。この岩は、夫婦岩、福岩あるいは親子岩と呼ばれ、数箇の組みあわさった巨岩からできている。この岩の頂に登ると、石ノミの跡があり、豊臣秀吉が大坂築城の時これを石材として切り出そうとしたという。が、切り出すために穴をうがつと、そこから赤い血潮が流れだしたため、以後、石工は決してこれを切ろうとはせず、この禁を破ればたたりがある、と伝説されてきた。

この夫婦岩の上手に、弁天岩と呼ばれる巨岩がある。水の神の住み家と信じられ、今も岩の前には小さな石の祠がある。この岩が、江戸時代から山麓の芦屋、打出の村人にとって、雨乞いの霊場であった。

農民にとって水は欠くことのできぬものだが、六甲南麓の地方には雨も多く降らず、大河もない。山地を南流する中小河川は、ひと雨ふると水かさを増すが、少し日照りが続くと流れはやせ細ってしまう。芦屋付近の人々は、旱魃に苦しむと、芦屋川を登って弁天岩の水神に雨を乞う祈りをした。岩の前での祈願も効なく、さらに川の流れがかれ始めると、人々は一旦山をおりる。打出の沖で、大きな鱶を取るためだ。鱶を捕えると、もう一度ここに登って来る。弁天岩の東下の谷間に、弁天滝という一条の滝がある。この滝の落ち口のところに、上面が平坦な巨大な長方形の岩が、乗りかかるようにしてある。人々はこの巨岩を鱶切り岩とかマナイタ岩とよび、運びあげた鱶をその上で切り殺す。そしてそれを上手の弁天岩まで持ってゆき、岩膚に投げつけるのである。古くは、水神へ生けにえをささげる風習だったのだろうが、人々は、こうすると神聖な住み家を血でけがされて怒った水

神が、それを洗い落とすために激しい雨を降らせてくれる、と信じてきた。

天保五年（一八三四）八月に、九十五日の日照りのすえ、この鱶切りを行った、と、芦屋に残る記録は教えてくれる。

5　月若と藤栄

鎌倉時代にこのあたりにあった北野神社領の芦屋荘という荘園についてくわしいことはわからない。が、当時の芦屋荘を舞台に、謡曲『藤栄』が知られている。

芦屋荘の地頭、藤左衛門は、幼ない子の月若をのこして息をひきとる時、自分の弟・藤栄に後事をたくしていった。しかし藤栄は助けてやるべき甥の月若を追い出し、芦屋荘を横領してしまった。そこで月若は浜辺で貧しい暮らしをしていた。

この月若の家に、ある日、旅の僧が訪れた。その夜、まずしい家のこの少年の気品に不審を覚えた僧は、少年の身の上をたずねようとした。

「どうも浜べの漁師と思えぬが……」

はじめはためらっていた月若も、とうとう不運な身の上を僧に語って聞かせた。僧はいたく同情したようであった。

一方、藤栄は鳴尾の長者とともに芦屋浦で船遊びをし楽を奏し舞に興じていた。この藤栄の舞を見ていた先の旅の僧は、やがて一舞いおわった藤栄に、もう一舞いを所望する。

「無礼な旅の僧め、せいばいしてくれる」

と叫んだ藤栄に、逆に僧が名のりをあげた。

「われは前の執権北条時頼じゃ。最明寺入道と号して世の悪事をただそうと諸国行脚の身である」

こうして、時頼は藤栄の悪事を追及し、所領を月若に返してやった。藤栄も心を入れかえ、以後、許されて月若をたすけ芦屋荘の経営にはげんだので、一族は大いに栄えたという。

この月若の屋敷址と称されていたあたりに月若町の名

がつけられている。

6 雲林院

芦屋に住んでいた公光という者があって若いころから伊勢物語を読み、在原業平をとても尊敬していた。

ある夜、美しい花園の中にとうとう業平とその后とを見ることになった。その夢の舞台は、京の北山の紫野にある雲林院であることがわかった。そこで、芦屋からはるばる京に上り雲林院を訪れてみた。ちょうどそれは夢のとおり花のころであった。

花の一枝を手おった公光の前に一人の翁が現われた。公光が、夢に誘われ業平をしたってここまでやってきたことを話すと、翁は夜にその花のかげに待っておれば、伊勢物語の秘伝をさずけられよう、と語って姿を消した。

やがて夜半になると、翁の言葉どおり、業平の霊が現われて、伊勢物語を語ったり楽の遊びをした。と、謡曲『雲林院』はうたう。

この公光の屋敷址が、月若町あたりにあったというが判然とはしない。公光町・公光橋などは、これにちなむ名である。

7 荒地山——七右衛門嵓

芦屋と神戸の境にある荒地山は、石宝殿にまつられている六甲山の山の神のすまいだといわれていた。だから六甲の山中で悪事をはたらくと、この荒地山にまよいこんで神罰をうけるのだといわれてきたのである。

むかし、ふもとの芦屋村に七右衛門という若者がいた。彼には身よりがなかったが、正直な働きものなので、村人に愛されて成長した。そのうち七右衛門には、一人の兄のように慕う友人ができた。ところが、あるとき、その友は七右衛門をうらぎった後、姿を消してしまったのである。絶望した七右衛門は、それからすさんだ生活を送るようになった。仕事もしなくなり、遊びほうける七右衛門を村人もしだいにかえりみなくなった。

ある日、六甲の山をこえる旅人が、命からがらふもとの村へ逃げおりてきた。息せき切った旅人は「山中で、追いはぎに会った」と語ったのである。村人は旅人のいうその賊の姿の話をきいて、

「それは、七右衛門だ」と思った。その時にはすでに七右衛門の姿も村から消えてしまっていた。

「山中で悪事を働いたために、神かくしに会ったに違いない。きっと荒地山だ」

いい伝えを信じて荒地山へ登った村人は山中でも、とりわけ、るいるいとけわしい岩場の下で、頭をくだかれて死んでいる七右衛門をみいだしたのである。

この時から、六甲おろしにさらされた、このすさんだ荒地山の岩場を、だれいうとなく「七右衛門ぐら」とよぶようになったという。

8 蛍合戦と芦屋沖の龍灯

この芦屋の里に七不思議といわれるものがあった。伝説で名高い「金兵衛車やけ車」「七右衛門ぐらの祟り」「鰻切り岩の雨乞い」「湯本薬師の潮湯」それに、芦屋はむかし蛍が多かった。山のせまったこの里を流れる川にすむ蛍が芦の原を飛びかうのが夏の風物詩であった。『伊勢物語』の在原業平の「晴るる夜の星か河辺の蛍かも我すむ方の海士のたく火か」の歌、『続古今集』に援政太政大臣作という「いさり火の昔の光ほの見えて芦屋の里に飛ぶ蛍かな」の歌などをみると、平安・鎌倉時代以来の景色だったと思われる。この蛍たちが、無数に群らがってたまになって二つ三つ、と飛びかうようすを、土地では「芦屋の蛍合戦」とよんで、これも七不思議の一つにかぞえていた。江戸時代の『播磨巡覧記』は、「片田川あしや川にそひたる細き流れなり、水絶ゆることなし、弘法大師の呪する所やといふ、夏は蛍多し」と記している。

七不思議のもう一つは「打出の沖の海鳴り」である。打出沖、親王寺の沖合いを船で通る時には、必ず帆を下げて通らねば、その船に奇妙なわざわいがおこると言わ

れていた。それを知らずに帆をあげたまま通過しようとすると、海が荒れ、海鳴りがしたという。

また「芦屋沖の龍灯」も不思議な現象で、明治初めまで、しばしば出現したという。暗夜の海上に、ボッ、ボッと灯がともり風にさからって走っては消えるのである。『摂陽群談』や『摂津名所図会』によると、これは大阪湾の魚たちが、夜に龍神をまつってたく火だと記されている。

9　六甲山の石宝殿

六甲山最高峰の東、約一キロメートルの見晴らしよい峰の上に石宝殿とよばれる大きな石祠があって、登山者の目印として親しまれている。

伝説では、神功皇后が三韓から持ち帰った神の石を納めた所だとか、この祠の側の三ツ葉ウツギの根もとには皇后が黄金の鶏を埋めた。それで元旦の黎明にはその鶏の鳴き声が六甲の峰々に響き渡る、などと伝えている。

この祠の姿は、江戸時代の絵地図にもよく描かれており、『摂津志』は「六甲山山頂有二小祠一隷二西宮一」と記している。風雪で磨滅した現在の祠の右扉のかすかな刻銘によると、石祠は慶長十八年に西宮の氏子らが建立したことがわかる。

しかし、この地は、それ以前から霊場視されていた。六甲には山伏や天狗に関する多くの伝説があり、昔山中には八十八の社があって神々がその中心・石宝殿から四方の高山に修行に出たとも伝える。修験道場だったようだが、現在の祭神菊理媛命が山岳信仰の白山の神であり社伝に白山の古文書の記録が伝えられているから、古く白山系の山伏の手で開かれた行場だったと思われる。

中世末に山稼ぎで六甲の山中に入っていった東麓・社家郷（西宮市）の人々がこの霊場を見つけ石祠を建て自らの氏神・広田西宮の末社とした。今、西宮神社境内の末社六甲神社が菊理媛命を祀っている。これは山頂の石祠が遠すぎるので寛政元年末に改めて境内に勧請されたものなのである。

このような山伏や神社との結びつきの他に、石宝殿は近世、山麓各地の農民の間では雨乞の場として信仰されていた。東灘の小路では旱魃の夏、村人が遥々ここに登って一晩こもり般若心経と雨乞の呪文を唱えた。夜が明けても雨が降らなければ祠の南の谷川で沢蟹をつかまえそれを宝殿に投げつけて帰った。すると神様が怒ってザーと雨が降ったと言う。隣の田辺村ではお籠りをしても降雨がなければ二匹の雨蛙を石祠にこすりつけ塗り潰して帰村したと伝える。石宝殿への同様な雨乞は唐櫃や宝塚・西宮でも行われていた。ここが船坂川・仁川・芦屋川・住吉川など近在の河川の分水嶺上に位置するために起った信仰だろう。

「災暑之節庄内は不レ及レ申、四国辺または隣国より…昼夜之差別なく為二請雨一之参籠」したと古文書の言う石宝殿は今は休日のハイカーの靴音でにぎわう。それでも水不足のひどい時など、周辺各市の水道関係者がここで行者に雨乞の祈祷を頼むこともある。祠わきの縁起書に水商売繁昌の神と説いているのは、雨乞と言うことの水への反映なのだろうか。

10　猿丸太夫

『百人一首』の「奥山にもみぢふみわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」で知られる猿丸太夫は、芦屋に住んだと伝えられる。

現在芦屋には猿丸家があり、また、芦屋神社境内には、

図102　伝猿丸太夫之墓　芦屋神社内

猿丸太夫の墓と称する石塔があるため、この地に住んだと考えられるようになったものである。

しかし、猿丸太夫については、ほとんど伝記が不明なうえ、例の歌も、近江国曽束の山中で歌われたと考えられており、直接、芦屋とはむすびつかない。芦屋の奥山という地名も、近代になって付された字名である。

ただ、芦屋神社にある伝猿丸太夫墓の石塔は、高さ二一センチの台座の上に、一・三二メートルの高さをもつ石製宝塔で鎌倉時代の石造品とされるが、刻銘はない。また芦屋川の東岸・阪急の北の猿丸家墓所の域内にも、中央に名号を刻みその左右に、猿丸・太夫を刻んだ約二メートルの墓石がある。

11　湯もとの薬師

芦屋の字名を調べると、山芦屋・西山・西芦屋の各町に、法泉寺・西ノ坊・大僧・寺田と寺院関係の地名の集中がみられる。これが法恩寺（芦屋廃寺）の故地である。法恩寺は、行基の開山や在原業平の堂宇建立の伝説を持つ古刹だが、城山にあった鷹尾城と共に芦屋の里が巻込まれた戦国争乱の渦中で、灰燼に帰してしまった。再度、平安が甦えった時村人は寺址に小堂を建てて薬師仏をまつった。

観光地としてよりは湯治場として賑わう往古の温泉地には、医療を司どる仏、薬師如来への信仰がさかんであった。有馬の中心も薬師仏を本尊とする温泉寺だが、芦屋の湯本薬師はこの有馬の温泉寺の奥院とされ、温泉寺のお坊さんは、薬師堂に月参りをするため、毎月、山を越えて芦屋の里を訪ねたといわれる。

もともと有馬温泉は、熊野権現の神力で紀州の熊野灘に一すじの潮流がおこり、紀伊水道を通って大阪湾をよこぎり、芦屋の浦で地中にもぐって六甲の山をくぐり、地熱で温められたものが、山の裏で涌き出ているのだ、と考えられていた。この地下の水脈がちょうど芦屋の薬師堂の下を通っていると人々は信んじていたので、これを「湯本の薬師」とよんでいたのである。当時の人々は

炭酸水をこのように海水が流入して温められたものと考え、塩湯とよんでいた。このお堂の側の泉にも、むかし塩湯が涌いていたそうだ。

12　蛙（かえる）岩

芦屋の三条や東灘区の森から裏山に登ると尾根の上に大きな岩があり、すわったカエルの姿をしているので蛙岩とよんでいる。

五十年ほど昔。ある村人がタキギを取りにここに登り岩にもたれて一休みしていた。ふと気がついて、びっくりしてしまった。

「岩に大きなウワバミがまつわりついとる」

おどろいて、山をころがりおちるようにしてこの大蛇から逃れたそうだ。

江戸時代の絵図をみると、この岩は、狼岩（おおかいわ）とよばれている。

第六章　芦屋の史跡

1　ナウマン象化石出土地

芦有道路料金ゲート北方約一〇〇メートルの芦屋川左岸の洪積層

芦屋から有馬へ行く最短のコースに六甲山地を横断する芦有ドライブウェイがある。昭和三十六年三月、この道路の開設工事に際し、奥山で一個の象化石が出土した。料金ゲート北方約一〇〇メートルの芦屋川河畔、石仏谷と石釜谷と呼ばれる小谷の中間に位置する河岸段丘面で、ゴロゴロ岳をずっと西に下った標高三二〇メートルぐらいの所である。

化石は挙大程の大きさのもので、大阪市立自然史博物館の鑑定によると、ナウマン象の右下顎の第三真臼歯（乳歯）とみられ、出土した地層から三～一〇万年ぐらい前のものと推定されている。銀灰色の一種独特の形から〝ユタンポ化石〟とも呼ばれ、上下の歯のかみ合わせの咬合面にはエナメル質のたくさんのヒダがつけられている（図103）。

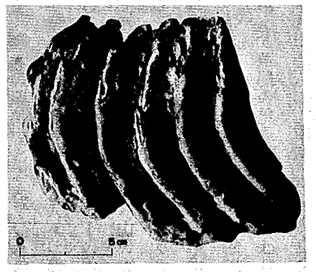


図103　ナウマン象の下あご骨の化石

臼歯の輪郭は三日月状に多少わん曲している。下あごでは、このわん曲は頬面（外側）にへこみ、舌側（内側）にでっぱっているが、上あごでは逆になっている。

ナウマン象の化石は、他に市内山手町の山手小学校東側の地でもかって牙の断片と思われる化石が発見されており、やや下流になるが、河畔の高位段丘出土のものと伝えられている。また、近辺では明石の屏風ケ浦、大阪の上町台地や泉南からの出土例があり、瀬戸内海の海底からは集中的にみつかる場所が何か所も存在し、公開品・秘蔵品含めてその数、数千点を上まわるという。

芦屋に象がいた頃――それは地質学上、洪積世の末期（ウルム氷期前半）、俗に氷河時代とも呼ばれ、寒い氷期と暖かい間氷期とがくり返し訪れた時代であり、海水準の変動によって世界中の海面が一斉に低下した。日本列島とアジア大陸とは言うまでもなく陸続きとなり、象をはじめオオツノジカなどの大形獣が多数渡来し、そうした様子は近年、長野県野尻湖底の発掘によって次第に解明されつつある。

芦屋ではその頃に人間が棲息していた確実な痕跡は見当らないが、往来する人々は、一〇〇メートルに達する海面低下のため、海の汀線をはるか彼方の紀淡海峡まで南下しなければ見ることができなかったであろう。

2　朝日ケ丘先土器・縄文遺跡

朝日ケ丘町・市立芦屋病院の南方約二〇〇メートルの地域一帯

芦屋に最初に足跡を残した人々の生活の場は、一体どこにあったのだろうか。

長い間、疑問であったこの素朴な問いに、県立芦屋高校の一生徒による一片の黒褐色の小さな土器のカケラの発見が解答の鍵を与えてくれた。昭和三十九年二月、芦屋病院南方の道路工事現場での出来事である。みつかった市内最古の遺跡は同年緊急発掘が行なわれ、四十八年の春には範囲や内容をより詳しく調べるための調査が実施されている。現在、遺跡の所在を明示する石碑が道路東の民家の門前に建てられているが、遺物が出土する地域はその周囲一帯に大きく広がっている。

遺跡の立地している所は、標高五〇メートルの山麓台

地で、南は傾斜して前面の沖積平野に連なり、見晴らしもよく居住性に富んだ生活には格好の場である。ただし数万年ぐらい前の地層からはボルダーと呼ばれる花崗岩の流石塊が多数見出されており、その当時は、山側から洪水などで大きな石がゴロゴロと転がってくる荒れ地であった。

出土した遺物は、今から一万二〇〇〇年～二万年ぐらい前の先土器時代後・晩期に属する旧石器と約八〇〇〇年前の縄文時代前期の土器・石器などがあり、断続的ながらも、長い期間にわたって人々の往来があったことがうかがえる。

最も古い旧石器には、サヌカイト製のナイフ形石器をはじめ刃器・削器・掻器・彫器・尖頭器・石核・有舌尖頭器・台形石器・剝片などが多様にみられ、瀬戸内地域を中心として遠く九州や東北地方との関連も考えられる遺物が含まれている。

縄文土器は、アカガイやハイガイなど二枚貝類の貝殻腹縁をこすりつけた条痕や爪形状の押さえ跡が文様の主

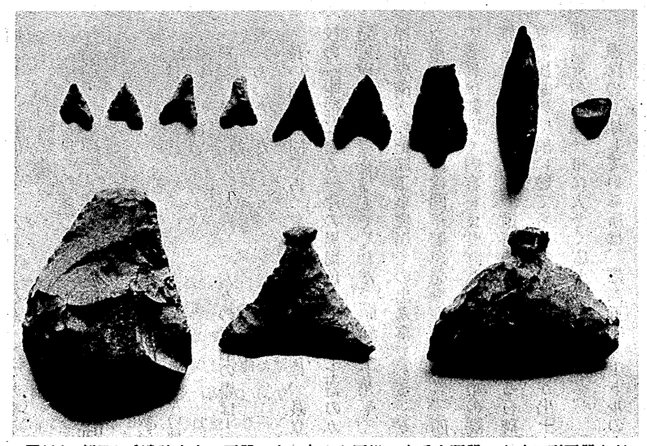


図104　朝日ケ丘遺跡出土の石器　上．左から石鏃・有舌尖頭器・ナイフ形石器など
下．スクレーパー

流を占め、平底の深鉢とみられる破片が多く、西の瀬戸内地方の影響を色濃く受けている。同時代の石器には、大量に出土した石鏃を中心に石匙・刃器・打製の石斧や叩石・磨石・砥石などがあり、とくに石鏃はていねいにつくられていて美しい。中にはサヌカイト以外にチャートや黒曜石製のものも少数ながら含まれ、付近に原産地がないので他地域との交易が想像できて興味深い。

東日本とは異なり、近畿地方では縄文時代の遺跡が数少なく、朝日ケ丘でみつかっている柱穴らしい遺構は、阪神間ではきわめて珍らしい生活跡として注目されている。大自然をバックに、大昔のハンターたちは生活の本拠を海に臨み湧水にめぐまれた台地の上にかまえ、手に弓や槍を携え、山林原野をシカやイノシシを追い求めて駆けめぐったことであろう。三角の形をした約二〇〇点におよぶ石の鏃は、この時代の人々の生活基盤が小動物を対象とする狩猟にあったことを想像させる。

3　会下山弥生集落跡

三条町・市立山手中学校裏山

現在の海岸線からおよそ二キロ北方、市立山手中学校の裏側に会下山と呼ばれる標高二〇〇メートル程の小高い山がある。昭和三十一年、この山のふもとからたくさんの弥生式土器が発見され、学校植物実習園の造成工事は、数年にわたる遺跡の発掘調査のきっかけとなった。その結果、山頂や狭い尾根筋から約一八〇〇年ぐらい前のムラの跡と当時の生活遺品が地表に姿を現わした。

遺跡へは山手中学校の校門を抜け、校庭を通って背面の遊歩道をジグザグに上るか、西方、三条小学校の北の墓地から斜面に通ずる登山路でたどり着くことができる。昭和三十五年、兵庫県史跡第一号に指定されてからは周辺環境の整備が整い、復原家屋や解説板も設置され、山の自然と親しめる市内唯一の歴史教材園となっている。

山頂からは眼下に芦屋の市街地や埋め立て地、大阪湾

図105　会下山遺跡から武庫平野を望む
（手前は復原された高床式倉庫）

を一望でき、視界のよい日には東に広大な武庫平野を経て遠く北摂・生駒山系の山並みを見渡せ、また西は神戸の街から六甲連山を、北は林立する表六甲の高峰を指呼の間に望めるすぐれた立地を占めている。会下山は考古学上、〝高地性集落〟と呼ばれる遺跡の典型であり、その発見を契機に西日本各地で詳細な研究が進められ、邪馬台国問題とも関連して、今日大きくクローズアップされようとしている。

発掘によって明らかになった遺構は、数軒分の住居跡（C・E・F・J・L・N・Xの各地区）・山頂部二か所の祭祀場跡（Q・S地区）を中心に南北に延びる細長い尾根と東方に分れる尾根に点々と見出され、墓地（M地区）やゴミ捨て場（U地区）など付属施設も備えている。

住まいは斜面に立地する関係から高い方に壁をこしらえた半竪穴形式のものが多く、最大規模のF住居が最も見晴らしのきく場所を占めており、室内には炉をもっている。この家にはムラのリーダーが住んでいたのだろう

図106　会下山遺跡出土の弥生式土器
左）貯蔵用の壺　　右）煮沸用のカメ
ともに住居跡から出土した後期（3世紀）の土器

か。当時の家の平面形は円形が主で、四～五本の支柱をもち、カヤ葺き復原家屋のモデルとなったC住居は床面に小さな溝が掘られ、室内の排水か間仕切りの用をたしていたようである。

東斜面のJ地区では倉庫跡が発見され、現在、高床式の倉一棟が復原されている。ここに収められる生産物はムラ全体で管理されたらしい。柱の上部にとりつけられたネズミ返しの板がおもしろい。また、N住居の南には火たき場の跡が残っており、ソトクド（野外の共同調理場）とも、のろし台とも考えられている。のろしは交通や通信の未発達な当時にあっては、最も簡便で確かな伝達手段であった。低地の集落からは見ることのできない船の航行などを順次告げたのであろうか。

出土した遺物は、日常容器である弥生式土器、打製・磨製の石鏃・石錐・刃器・石剣・石斧・石錘・砥石・石弾などの武器・生産用具の石器類に加えて、青銅器・鉄器の金属製利器が新たにみられ、大陸から伝来した弥生文化を特色づけている。ただし、この山の上で稲作農耕

をやっていた証拠は乏しく、常時生活していた三〇～四〇人ぐらいの人々には、瀬戸内航路の確保や海上支配権がからんだ臨戦時の見張所的な役割を考える人もあり、二世紀末頃に起こった中国史書の伝える倭国大乱との密接な関連から、軍事的な防御集落とみる意見も少なくない。

紀元前二世紀頃、日本列島に登場した長身のパイオニアたちは、集約化された農業労働を生産の中枢にすえ、鉄器と青銅器という性質を異にする大陸の文化を急速に融合していった。農耕生産にともなう余剰は必然的に社会の階層分化と階級対立を促し、それが進む過程において〝クニ〟が発生し、統合が行なわれて、やがて古代国家の成立をみるようになる。

会下山のような高地性集落は弥生時代中・後期の瀬戸内沿岸を中心に数多く存在するが、こうした胎動期における戦時の居所を防衛するにふさわしい遺跡ではなかろうか。

4 城山遺跡

鷹尾山山頂尾根筋一帯

浜側から六甲を仰ぐと、芦屋川の右岸に、尖り帽子のような急峻な山容が目にとまる。通称城山と呼ばれるこの山には、標高二六〇メートルの項上北側の尾根筋一帯に弥生時代の遺跡が広がっている。山腹および山項からの展望はすこぶる良く、東は西摂の平野が、南は大阪湾が一望でき、晴天の時には泉州・紀州の山々も遠望できる。また、西南の方向には高座川を隔てて会下山集落址の全景を手近に見下す位置にあり、西側は岩塊群のロックガーデンが展開している。六甲連山に霧がかかり視界が全くさえぎられるような時でも、この城山だけは三角錐形の特徴的な姿をくっきり前に浮き出すともいう。

眺望の最もよい所は、昭和三十二年十二月の予察調査で柱穴状の遺構の検出された山項をやや降った地域で、山項部では東か西の一方しか展望がきかないのに対し、ここでは東西への眺望が自由で、項上よりも地の利を得

図107 芦屋川から城山を望む

ている。現在は、全山が国有林であり、緊急に現状変更が予想されることはないので詳しい発掘は行なっていない。

遺跡の年代や性格は、出土した土器から弥生時代中期末を盛期とする集落址で、将来には学術調査の好対象として注目すべき高地性遺跡の一つといえよう。

5 漢式三翼鏃

三条町出土・会下山山腹、市立山手中学校敷地内

会下山遺跡の発掘調査と関連して、土砂崩れによって発見された日本ではきわめて珍らしい舶載遺物（渡来品）である。長さ四・四センチ、幅一・二センチの断面が正三角形の流線形をした立体感のある青銅製の鏃で、頂点の三方に鋭利な翼をもっている。

日本での出土例は、土製・骨製の一部を除いては全くなく、その分布は遠く朝鮮半島および中国でも華北から内蒙古・東北地区を中心に広がっている。その源流は古

く中国殷代の骨鏃にまでたどることができ、戦国・秦・漢代に盛んに用いられた実用武器の一つである。

類する資料は、中国歴史博物館（北京）・広州博物館（広東省）・漢武帝茂陵出土品（陝西省）・秦始皇陵陶俑坑（陝西省）・秦都咸陽都城址出土品（陝西省）・包頭（内蒙古）その他にみることができ、それらとの対比から会下山のものは前漢の頃（紀元前一～二世紀）につくられたことがわかる。

当時の日本では、戦闘に際して矢の先端には石製の重い鏃が主に用いられ、銅鏃は数少なく、もっぱら祭りなど儀礼的な場で異なった用途を担っていた。この強靭な漢式三翼鏃はその中にあって、異国の品物としてさらに重宝な扱いがなされたに相違なく、製作後、人々の間で少なくとも一～二世紀は伝世されたものではなかろうか。

図108　漢式三翼鏃

鏃身の三方に鋭利な翼をもっている。ほぼ原寸大。

中国からはるばる渡ってきたこの小さな遺物は、古来大陸との交渉を示す史料・文物の豊富な芦屋の歴史を考える上に貴重であり、鈍く不気味に光る青銅の重厚な肌ざわりに多くの謎が秘められている。

6　流水文銅鐸

楠町出土・国鉄芦屋駅東方

市街東端の旧小字「堂ノ上」の地域で江戸時代に銅鐸が一個出土している。字名は『摂陽群談』や『摂津名所図会』などにみえる在原業平の父、阿保親王の別荘（堂）が建っていたという伝承に由来するものと思われ、国鉄東海道本線に沿って南側一帯の地域で、南は国道二号線に面している。現在この地には、国鉄荘・国鉄寮・芦屋くすのき住宅や伊藤忠寮などが密集しており、正確な出土地点は定かでない。

この銅鐸には、従来より元禄四年（一六九一）の阿保

親王塚陵墓の周濠修築の際に発見されたという所伝があり、打出親王寺の縁起にもその記載がみられる。しかし、山口県文書館所蔵の毛利家文書の中には、実際の出土地とその年代に関する別な記録が残されており、本銅鐸の両面の図が寸法入りでかなり詳しく描かれ、「銅鐸・堂ノ上ト云処ヨリ掘出ス宝永年間之事ナリ」という記述もみえている（『阿保親王御廟詮議』兵庫阿保親王寺蔵銅鐸の図）。

また、親王寺の宝物に関する古文書類の中に「兵庫親王寺銅鐸之図」という原図（山口県文書館蔵）が発見され、「宝永三年（一七〇六）戊三月中旬ヨリ」との補記から、より詳しい出土年月を知ることができ、昔からあった親王塚出土の伝承は誤伝と考えられるようになった。

銅鐸は総高四五・三センチ、底径二四・〇センチ、重量四・七キログラムの大きさで、裾広がりの釣鐘状の身に半環状の鈕（つり手）がとりつけられている。つくりは厚手で鋳上りはよくなく、全体的に磨滅が著しく、粗質である。鐸身には水の流動感を表現したような流水

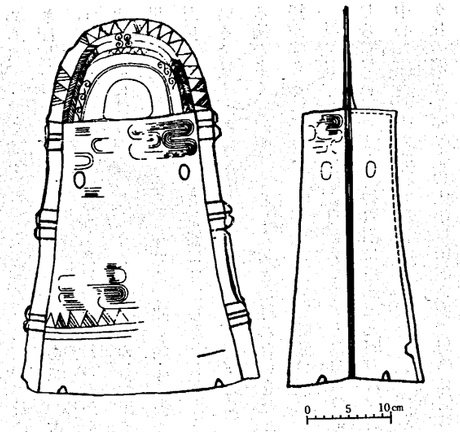


図109　楠町出土の流水文銅鐸（実測図）

文が描かれ、その下には二条の平行線を伴った連続複線鋸歯文が配されている。上部に表裏四か所認められる楕円孔はいわゆる型持の孔で、鋳型の外型となかごとの組合せの際、身の厚みだけの空間を支える支柱があったことを示す痕跡である。下端の切込みや身の天井にある二つの孔も同様で、銅鐸では普通一〇か所みられる。

鈕は厚さ〇・八センチと薄く、外縁から内行鋸歯文・綾杉文・連続渦巻文の順に連ね、中央には双様渦巻文と外行鋸歯文を置いて飾っている。身の両側の薄いひれはもともと鋳型の合わせ目に生じたはみ出し部分を装飾化したもので、三対の双耳と四条の太い平行線を配している。鐸面は暗い青緑色で、部分的に美しく神秘な光沢を放っている。

銅鐸は今から約二千年程前の弥生時代を代表する国産青銅器で、全国では今日までに四〇〇個余りが出土している。そのつくりは始めは小さく、次第に装飾が加えられて大きくなり、最大のものは一三四・五センチにも及ぶ。堂ノ上出土銅鐸はその変遷を四段階に分けてみた場合、第二段階目に属する古い特色をもっており、弥生中期前半（紀元前後）頃に製作されたものと考えられる。

銅鐸の元祖は朝鮮の小銅鐸を含めて中国古代の鈴に求められ、大陸では牛・馬・犬・羊などの家畜の首につるされた小型で装飾も乏しい音響発振具であった。古来から家畜の飼育のみられなかった日本に伝わってからは、水田農耕に伴う祭りの荘厳なふんい気をかもし出すに効果的な宝器として一人歩きを始め、聞く機能を失ってただ見るだけの加飾豊かな祭器に変化したとも考えられている。堂ノ上銅鐸の頃のものは内面の凸帯が磨滅している例が多く、内側につるした舌との触れ合いを証し、銅鐸が鳴らされていたことがわかって興味深い。

現在、兵庫県下からは四五例に達する銅鐸の発見が報じられている。その内約六割に当る二九個が六甲山系を中心とする西摂の地域でみつかっており、神戸市灘区桜ケ丘の例を筆頭にその大半は山麓斜面や岩陰に何ら施設をつくらず単独で埋められている。銅鐸はその数から弥生時代の各ムラムラがもっていたとみるより、大ムラな

いしは小ムラの集合体が祭祀を共通とする結合のシンボルとして共同管理していたものと思われる。最近では銅鐸を集中的に生産した集落やそれを村内の溝などで捨て去った事実も明らかになり、その製作地・使用場所・埋納地が互いに遠く隔っている可能性も考えられるようになった。

堂ノ上の銅鐸は、地形的には標高一七メートル前後の翠ケ丘台地の東斜面で出土しており、近隣の西宮市津門鐸と共に表六甲では低地からみつかった例として珍らしい。現在、親王寺の寺宝として所蔵されている。

7　金津山

打出春日町・阪神打出駅北東二〇〇メートル・市立図書館の西南一〇〇メートル

阪神電車を打出駅で降りて北へ約百メートル、図書館との中間あたりで東をみると、民家の屋根越しに数本の松木立ちが頭を見せている。これが芦屋市内で最大の墳

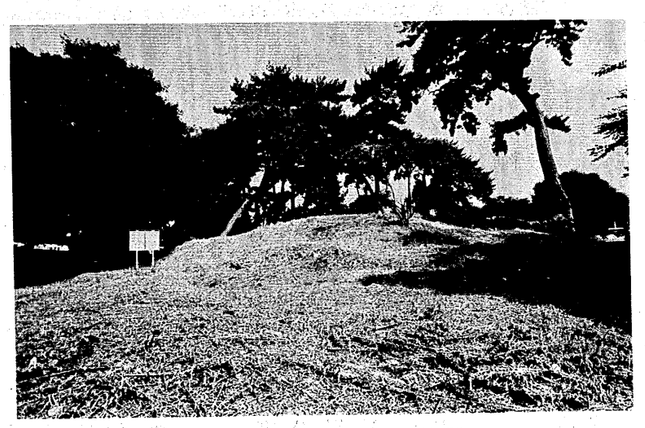


図110　金津山古墳（小松新三郎氏撮影）

丘を今に残す金津山古墳だ。今では家々の間の小道の、いささか奥まった場所になっているが、江戸時代には打出村を通る西国街道のすぐわきにあって、人に知られた名所である。寛政八年（一七九六）の『摂津名所図会』にも描かれている。かつて打出天神のお祭で歌われたみこしかき音頭にも「打出名所はかずかずあれど、わけて名高い黄金塚」という一節があった（『打出史話』）。

現在この古墳は、四周を民家に囲まれ、四四メートルの直径に高さ約四メートルの円墳の形で残っている。ただ、市街地の中にあってあたりの地形が相当変形されているため、もとは東面する前方後円墳だったとの説もある。

この古墳は、金塚・黄金塚・金津山といろいろに呼ばれるが、その名の由来にまつわる伝説がある。昔、阿保親王（平城天皇の皇子で、在原業平らの父）の御殿がこの打出の里にあった。親王はその村人達を深く愛し、打出が万一、飢饉になれば掘り出せるようにと、財宝をこの塚に埋めたという。元禄十四年（一七〇一）に、すでに『摂陽群談』が、「阿保親王此岡山に於て、金瓦一万黄金一千枚を埋せ、此里飢餓に及ぶ時、是を掘て飢を養」と書いている。また、打出の人は江戸時代から「朝日さす入日かがやくこの下に、金千枚、瓦万枚」と歌っていたという。宝物の埋められた古墳だから金津山と呼ぶのだというのである。

これと同様な伝承は広く各地に分布している。

市内にはこのほか、阿保親王と関連する言い伝えをもつ古墳が数か所ある。もちろん伝説なのだが、楠町八番地の笄塚や小槌町三十九番地の鞍塚は、ともに親王の使った笄（髪かざり）や鞍を埋めた所だと伝えられていた。また翠ケ丘町には、彼の墓という古式の古墳があり、そこから親王塚町の町名のあることは周知のとおりである。

8 阿保親王塚

翠ケ丘町・国鉄芦屋駅北東約一キロメートル

市街の東部、国鉄東海道線と阪急神戸線の間の住宅地に老樹のうっそうとした静かな森がある。宮川と並行して南に延びる翠ケ丘台地の上にあたり、寛政八年（一七九六）刊の『摂津名所図会』にもその美しい木立ちは描かれている。古くから〝親王さんの森〟として親しまれ、平日にも参詣する人々が絶えず、また清掃を奉仕する市民の姿をみかけることも少なくない。かっては打出の沖を航行する舟が必ず帆を下げ、お墓に敬意を表したとも伝えられている。

平城天皇の皇子、阿保親王が祀られているとの伝承をもつこの古墳は、現在宮内庁書陵部の桃山陵墓監区事務所によって管理されている。古墳の外形は、周囲三五六メートル・面積七四〇〇平方メートルの方形の区画の中に、径三六メートル・高さ約三メートルの円墳があり、扁平な墳丘のまわりにはコの字状の周濠がめぐらされている。

山口県文書館所蔵の毛利家文庫の中には、この塚に関する何枚かの絵図と「阿保親王御廟詮議」「阿保親王事

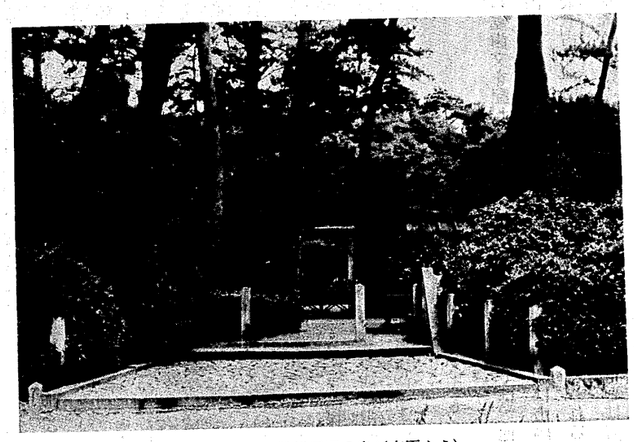


図111 阿保親王塚の森（南面から）

取集」など種々の記録がみられ、長州藩主毛利家が阿保親王の後嗣であるという関係から、江戸時代を通じて特別な保護に力をつくしたことが知られる。参勤交代の途上必ずここを参拝したともいわれ、南面御拝所にある四対の石の大灯籠も同家の寄進である。藩政の改革で有名な村田清風も命を受け、調査のため来訪している。

古墳の棺槨・出土遺物についての記録は定かでなく、阿保親王の菩提寺とされる親王寺に三角縁神獣鏡など古鏡四面と石製帯飾具五個が保管され、寺伝では、元禄四年（一六九一）親王八五〇回忌に際し、毛利綱元が墓域を改修した時に発見されたという。ただし、毛利家文庫によると、石帯は宝永年間（一七〇四～一七一一）に東の周辺にあった四つの塚の一つから出土したことが知られ、享保十九年（一七三四）の『摂津志』などの記載にも付近に六基の古墳の遺存が確認できる。

古鏡の一面は、径二一・四センチの大きさで、「陳孝然作竟」と五字の銘文が鋳出されている。いわゆる魚帯文四神二獣博山爐鏡と言われるもので、三角縁の内縁に鋸歯文を配しているのが特色である。遺物では、他に円筒植輪片も採取されており、古墳の築造時期は市内で最も古く、前期の末（四世紀の終わり）頃と思われる。したがって、阿保親王の逝去年代（八四二年）とは著し

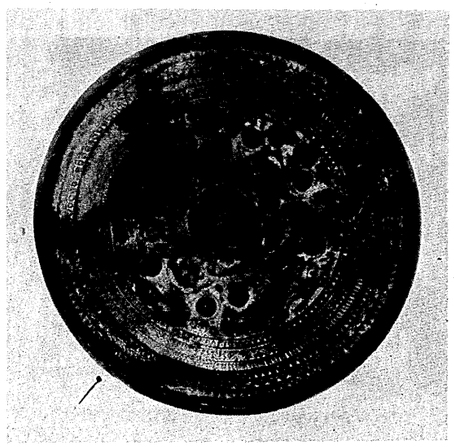


図112 「陳孝然作竟」銘の三角縁神獣鏡

く異なった時代につくられたものであることが知られ、親王との関連はむしろかって存在した四ツ塚の方が深いといえる。

なお、大阪湾北岸の海に面した平野部には、西求女塚・処女塚・東求女塚（神戸市）・稲荷山・大塚（西宮市）・水堂（尼崎市）や前述した金津山など、この頃につくられた古墳が適度な距離を保って並んでいる。

陵墓は昭和四十六年二月から市内上宮川町在住の新宅基良氏（阿保天神社宮司）が管守となり、日常的な巡回と清掃管理の任にあたっておられる。四十九年、鳥居改築・灯籠移設・外周生垣・拝所両側の樹木保護など基本的な改修工事が実施され、景観の保全が整えられた。

御陵は、その森の美しいところから芦屋十景のひとつにも選ばれ、明治の中頃までは命日とされる旧暦十月二十二日、全村半日業を廃してここを詣でることを打出の年中行事としたが、昭和十一年以後は毎年十二月一日、墓前で正辰祭が行なわれ、今日に至っている。

変転する芦屋の町の中で、ここだけは緑とオゾンに包まれた静寂を今なお保ち続けている。

9 八十塚古墳群

朝日ケ丘町・岩園町・六麓荘町、
阪急バス「八十塚橋」駅下車徒歩東へ三分

南の市街地から一段高くなった六甲南麓の台地上に広く点在する古墳時代後期の群集墳で、一部は西宮市老松町や苦楽園五番町にもおよんでいる。古墳は東西五〇〇メートル・南北一キロメートルの広範な地域の山林・邸内に約四〇基の所在が確認されており、往時は一〇〇基以上遺存していたものと思われる。その中心は、通称ドンドン川にかかる八十塚橋東方の山林内で、現在道路に面して解説板が設置されており、その奥には三基の古墳の石室が残っているので、見学者も多い。また、その南の岩ケ平神社境内にも二基の横穴式石室が露出している。

市街北東部の山麓丘陵上に数多くの古墳が群がることは早くから知られており、寛文年間（一六六一～七二）

に打出村の分村として岩ケ平周辺が新田開発されたのを契機に村人たちに注目されるようになったらしい。

「八十塚」の呼称は、近世に編まれた地誌に由来し、享保一九年（一七三四）の『摂津志』には、「打出村西岩平山中有数冢呼曰八十冢」とみえる。また、寛政八年（一七九六）に刊行された『摂津名所図会』には、「八十塚、打出村の西、岩平の山中にあり、数の多きより名とす」と記され、全国各地に残る「百塚」「千塚」「塚原」「塚脇」などの地名と共に、群集墳特有の総称が長く親しまれてきた。

古墳は散在するのではなく、尾根や谷の地形変化に基づいて大きく五つのグループに分れ、市域にはそのうち三つのグループ（朝日ケ丘支群・岩ケ平支群・劔谷支群）が属している。外形は径一〇～二〇メートル、高さ二～三メートルの小さな円墳で、南に向って開口する横穴式石室を内部に構築している。昭和三十四年以来、芦屋・西宮両市教委によって既に一四基の古墳の発掘調査が実施され、石室の構造や副葬品から多くは六世紀後半

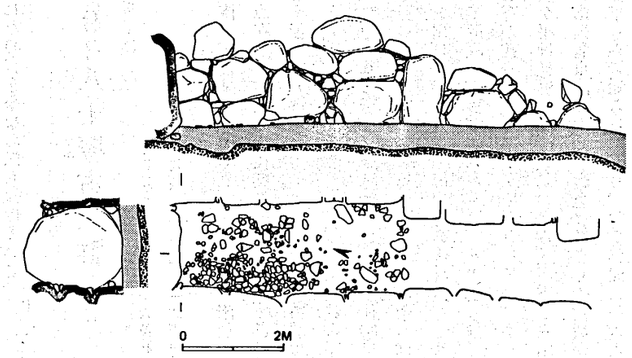


図113　八十塚A号墳の石室（実測図）

の築造にかかり、七世紀代には盛んに追葬の行なわれていることが明らかにされている。

群集墳の盛行した古墳時代後期は、朝鮮半島から移住者集団の渡来によってもたらされた鉄製農耕具の普及により、農業生産力を飛躍的に拡大させ、と同時に、地域共同体成員にも富の蓄積が可能となり、次第に階層の分化が促進されてくる。このような政治的社会的動向を経て古墳それ自体にも変化がみられ、副葬品に装身具や飲食物を入れる日常容器（須恵器）が出現し、古墳が死後の生活の場として、家族墓として営まれるようになる。大陸に系譜をもつ横穴式石室は、開閉自由な入口を設け、その点が考慮された新しい墓制として採用され、社会の構造はそれらの集合体である群集墳の様相に反映されてゆく。

八十塚古墳群は阪神地方有数の群集墳であり、近世以降には火の雨の降った遠い昔に人々がそれを逃れてこの石室に住んだというおもしろい伝承や狐が子供を産み落としにくるという言い伝えもみられ、今日なお機知に富んだ歴史を宿している。

10　城山古墳群と山芦屋古墳

山芦屋町・字城山一帯

芦屋川とその支流である高座川とにはさまれた通称城山の南麓斜面一帯には、戦前数十基近くの古墳の存在が知られていた。その頃、郷土芦屋をなめるようにして歩かれた吉岡昭氏は、それらの分布を克明に記録された。また、大正年間につくられた芦屋名所絵葉書にも「城山古墳」と題した中腹所在の石室が載せられており、昭和の初め頃までは人々の周知するところであったらしい。

現在、付近一帯は恰好の住宅地として開発が急速に進められ、工事に際して埋もれていたいくつかの古墳が再び地上に姿を現わし始めている。昭和五十一年十二月に民家の造成現場で発見された山芦屋古墳は、その中でも異色な規模を誇り、石室の内部が詳しく発掘された。

古墳の規模や形態は、過去の土取りや整地によって盛

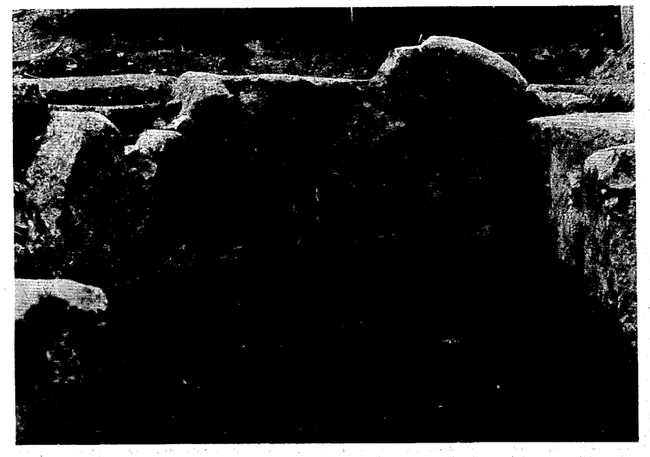


図114　山芦屋古墳石室（正面は巨石の奥壁）

土を失っていたためはっきりしないが、直径二五メートルぐらいの大きな円墳とみられ、ほぼ南に開口する大型の横穴式石室を収めている。石室の奥壁には重さ三〇トン近くある巨石一枚を使用し、側壁にも調整加工のなされた大きな石塊をすえる典型的な巨石墳で、熟達した石材技法によって築かれている。巨石の多くは、最近話題になっている〝修羅〟のような石材運搬具によって近くの山から運ばれたのであろう。

石室の規模は玄室の幅が三・二メートルと大きく、長さも残存一〇・八メートル程あり、県下でもこれに類する石室は少ない。築造にあたっては大規模な墓拡を造成し、綿密な設計に基づいての作業が行なわれたらしく、高度な土木技術と大量の労働力が投下・動員されたことが予想される。

石室の床からは、水晶製三輪玉（刀装具）・ガラス製なつめ玉（装身具）をはじめ、金銅装馬具など阪神地方初見の珍らしい副葬遺物が見出されており、被葬者の生前の勢力や性格を物語る資料として注目されよう。石室

の平面形も独特のもので、正方形に近い玄室（遺体安置場）に狭長な羨道（通路）を付設しており、遠く近江地方の渡来系氏族の墳墓形式に非常に似かよっている。

古墳のつくられた時期は六世紀の中葉、奈良県明日香村の石舞台古墳にやや先行し、城山古墳群の盟主格の位置を占めるものといえよう。

11　旭塚古墳

山芦屋町・旭化成寮内

山芦屋古墳の東約一〇〇メートルの所にある横穴式石室墳で、旭化成寮の中庭に金網で囲まれて保存されている。昭和三十六年二月、寮の増築に伴い京都大学考古学研究室の小林行雄博士らが発掘調査を実施した古墳で、調査も行なわれることなく消滅していったこの付近の多くの古墳の中では貴重な存在であり、高座ノ滝方面への登山路の入口近くに位置しているため、ハイカーたちの格好の見学の場となっている。

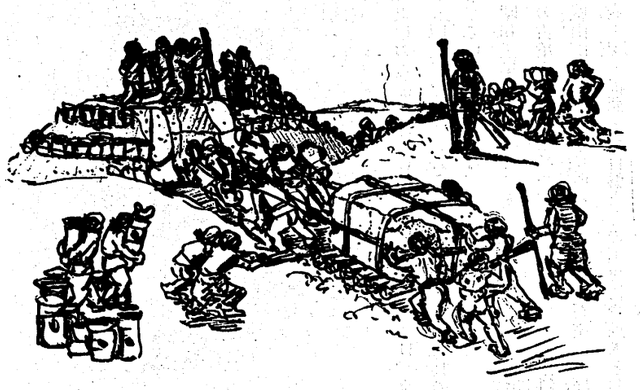


図115　古墳をつくる人びと（想像図〈森沢達夫 氏 画〉）

石室の形は、入口を南にもつ両袖式で、全長一一メートル、玄室の長さ四メートル、幅一・八メートル、羨道の幅一・六メートル、現存の高さ二・二メートルの大きさで、大部分が大きな花崗岩で構築されている。

石室の入口両側には珍らしい石垣状の列石がみられ、直線に延びているので、古墳の形は方墳であったかもしれない。

残存していた遺物は、須恵器の高杯・杯蓋など数点と鉄鏃一本であり、現在、京都大学文学部に保管されている。築造された時期は、七世紀初めの頃と思われる。

12 竈形土器と外来系氏族

古代の芦屋が渡来系氏族と密接な関係をもつ地であったことを示す興味深い考古資料の一つに、竈形のミニチュア土器がある。土師質の竈・釜・甑の三点セットで、三点を重ねた時の高さは二三センチ程のかわいらしい大きさだ。一番下の竈にはきちんと焚口がつくられ、最も上にのる甑は上方に一対の把手をとりつけ、丸底に大きな円孔を穿ち、これら一式であたかも炊飯具の機能を果しているかにみえる。

昭和三年、三条字寺ノ内で地ならし中に発見された一基の古墳からの出土品で、海岸に向って低く傾斜している城山山麓の中腹下に所在した横穴式石室に、杯・高杯・壺・瓶・提瓶・台付盤などの須恵器や鉄鏃と共に副葬

図116　三条出土カマド形土器
（京都大学 提供）

されていたという。他に、大正八年頃、同じ城山南麓で開墾工事に際して竈形土器の二点セットが見出されており、この付近一帯には古墳時代後期の特異な性格の群集墳が存在したようである。

こうした竈セットのミニチュア品は類品に乏しく、近年、近江の志賀郡や河内の石川郡など畿内の限られた地域の古墳で分布することが確認されており、百済系や漢人系の渡来氏族の居住を伝える地のみにみられることが注目を浴びている。ここ芦屋も例外ではなく、当地方を本貫とする古氏族の中には、「葦屋漢人」「葦屋村主」「葦屋蔵人」など外来系諸氏族の後裔と称されるものが多く、芦屋の浜を古来〝漢人浜〟と呼んでいるのもそれらに因んだものであろう。

竈は故国で〝家神〟として信仰の対象になっており、家族墓的な横穴式石室に葬られるにふさわしく、現世の思惟が彼岸にも息吹いていることを静かに伝えている。

資料は現在、京都大学文学部の陳列館に保管されている。

13 芦屋廃寺址

西山町・阪急芦屋川駅北側
水道筋を西へ三〇〇メートル

元禄五年（一六九二）の『寺社御改委細帳』に最もくわしく、行基の開創による塩通山法恩寺の名がみえる。また、在原業平が伽藍を修復し、嘉吉二年（一四四二）の頃兵火で焼失したので、その跡に薬師堂を設けたことを伝えている。

『行基年譜』には、「天平二年（七三〇）菟原郡に船息院・同尼寺を建てる」という記事があり、天平十九年（七四七）の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』には、「摂津国菟原郡参拾壱町陸段弐百捌拾捌歩」と記され、菟原郡内に寺院や法隆寺領のあったことがうかがえる。行基の頃に遡る寺院の存在を考えさせる伝承は、他に『摂津志』や『摂津名所図会』、『摂陽群談』、『芦屋の里』、『塩通山故事』、『務古の浦風』などにも取上げられており、

図117　芦屋廃寺址塔心礎（県重要文化財指定）

明治四十一年の奈良時代の様式を示す遺瓦発見を契機に幻の芦屋廃寺についての関心は急速に高まった。

その後、昭和八年に礎石の一部が発見され、創建当初の塔心礎と考えられる一個が、現在、月若町の猿丸吉左エ門氏邸内で保存されている。礎石は径一三〇センチ、高さ約五〇センチの五角形の自然石で、中央に枘孔を設けている。伝承では孔にたまった水を〝イボ落し〟に使っていたという。

昭和四十二～四十三年、マンション建設に伴って部分的ながら発掘調査が実施され、奈良時代前期から中・近世におよぶ多量の遺物と薬師堂跡に伴う礎石・石列、中世の石垣列、近世の東川用水路跡などの遺構が見出されているが、明確な伽藍配置は確認されていない。出土した遺物のうち、屋瓦は創建期のものが法隆寺の系統をひく八葉複弁蓮華文軒丸瓦で、磚築基壇の残欠や文字磚などと共に注目され、他に弥生・古墳両時代にまたがる生活層や周辺庶民の日常雑器類も豊富に認められる。

阪神間には、猪名寺廃寺・若王寺廃寺（尼崎市）・伊

図118　芦屋廃寺創建期の軒丸瓦（拓影）

満開の蓮の花を想像させる美しいモチーフで、よく似た文様は大和国長林寺出土の瓦にある。

丹廃寺（伊丹市）・新免廃寺（豊中市）など、中央との結びつきを強くもった地方寺院址が点在しており、その西端を占める芦屋廃寺の存在は、『延喜式』にみえる芦屋駅との関連を考える上でも重要である。

14　三条岡山遺跡

三条町・神戸市との境界、現甲南女子大学学生寮周辺

神戸から東進する山手幹線が芦屋市の市境と接するあたりの丘陵上には、かって近世からの共葬墓地があった。明治初めの『三条村誌』には、「本村の西方字岡山にあり反別二畝六歩たり」とその所在を記し、細川道草編著の『芦屋郷土誌』では、それを西の墓で、姓名の下に何々兵衛のつく〝兵墓〟と考え、天保八年（一八三七）の『三条村絵図』に東西の墓のみえることと対比している。付近には、いまも五輪塔などの石造遺品が点在し、近くの人々によってねんごろに祀られている。

遺跡はその丘陵地一帯に広がっていたらしく、昭和三十五年、付近の民家の造園工事中に発見された。市域の最西端に位置する遺跡で、近辺では古式の須恵器や出土の珍らしい埴輪・陶棺片のみられたことが当時から注目されていたが、昭和五十二年四～五月、甲南女子大学の学生寮建設に伴って発掘調査が行なわれ、弥生時代から近世におよぶ長い期間の複合遺跡であることが明らかとなった。

出土した遺物から復原してみると、弥生時代には台地

の端に高地性集落、その北に中期・後期の古墳があったようで、奈良時代や中世以降の生活址もひき続き営まれている。とくに、中世の日常雑器類には、南北朝時代から室町時代頃にかけての擂鉢・羽釜・皿・陶磁器などがあり、備前や瀬戸など中世六古窯の各地の製品を含み、遠く中国華南の竜泉窯系統の青磁までもが認められる。

芦屋に残る中世文書は数少なく、このあたりに何があったかをいま知るすべはないけれど、出土した遺物からは単なる村落ではなく、戦国時代この地を舞台とした土豪の居館なども想像される。

15　鷹尾城跡と松若物語

城山山頂尾根筋一帯

永正八年（一五一一）、細川高国、澄元両軍勢による鷹尾城をめぐる攻防は、阪神地方の代表的な古戦場としてつとに知られている。標高二六〇メートル、いま城山の山頂には雑草の灌木が繁茂し、中世の城砦としての遺構は、尾根筋に並行して走る堀割らしきものを除いて何も残っていない。

この山城を築いたのは、高国方の国侍、摂津豊島地方の豪族瓦林政頼である。この地は阿波の澄元方の進路を押える交通上の要衝であり、肥沃な灘筋を制圧する上には格好の場であった。激戦のすえ一時は城側が勝ったが

図119 鷹尾城の攻防（福永道子画）
「城ヨリ一度ニ切テ出ケレバ、寄手多討レテ皆々方々ヘソカ逃散ケル」
（『瓦林正頼記』）

敗報を聞いた澄元側の赤松勢は、大軍を催して播磨から押し寄せ、「さかしき谷、高き岸ともいわず」「息をもさせず」攻めたてたので、ついに政頼らはひそかに城を捨て伊丹城に逃れた。

ところで、この城の攻防には一つの悲哀な物語がまつわっている。それは次のような話である。

松若物語　勢力の強くなった政頼に降参を申し入れてきた澄元方の地侍の一人に河島兵庫助という者がいた。政頼は彼を好遇して、鷹尾城を守らせ、歌道にたけたその子息松若を居城の越水城で側近として召しつかった。ところが、兵庫助は敵に内通しているのではないかという風聞が高まり、彼は越水城で殺される運命にまで追いやられた。

利こうな松若はその危急を父に知らせるため、鷹尾城へはせさんじたが、時既に遅しと感じたのか、逃亡することもなく、伯母聟今西将監の宿所に入り、覚悟のほどを述べて政頼に取次ぎを頼んだ。政頼はこれを聞き、近ごろけなげな振舞いとふびんがったが、あまりの利発さを恐れる家臣もあり、ついに西宮の六湛寺で生害させられることとなった。

時に松若弱冠十六歳。辞世に

父に我つかふ願も三瀬川ともに越べき道のうれしさ

の一句を残し、首をうたれたのであった。『瓦林政頼記』に描かれた史実に近い悲話のひとコマである。

16　芦屋の地名

西宮から神戸へとつづく海岸地帯、江戸時代のいわゆる灘の地方を古くは、芦屋の里とよんでいた。おそらく沿岸にひろがる湿地に芦がしげり、それで屋根を葺いた民家が点在していたのだろう。

しかし、律令制のもとでは、ほぼ夙川から生田川にいたる六甲山地の南方に菟原郡が置かれた。平安時代の『和名抄』によると、菟原郡の東端に賀美郷（打出から西宮市西端）、葦原郷（芦屋から東灘区東端）の二つの郷名が記

されている。この葦原は葦屋の誤りともいわれ、おそらく郡の名として菟原がつけられたため、以前に広く灘地方をさしていた芦屋という地名は、菟原郡内のせまい一郷名に用いられるようになった。

律令国家は交通の整備のために、主要道路に駅家を設置したが、『延喜式』を見ると、山陽道に、草野と須磨の両駅の間、「葦屋駅」に十二頭の駅馬がおかれたことがわかる。この駅家の厳密な位置はわからないが、その頃から、西摂平野をよこぎってきた道の、海と山の迫る六甲山麓への入口の地に当るため、交通の要地となったのであろう。

平安時代には、山陽道ぞいの白砂青松の地として、しばしば、歌に文学に描かれ、中世になると、その松林は時として戦いの場となっている。やがて、中世の終りころには郷村が確立していくが、芦屋はそのような村の名となり、明治までつづいていった。

明治二十二年、町村制の施行に際して、近在の四か村――芦屋・打出・三条・津知の村々――が併せて一行政村を形成した。この時、新村名決定に際して、打出と芦屋は自村の名を主張してゆずらなかった。そこで、芦屋村内にあった小学校の名をとって、新しい行政村名とすることになった。これが、精道村である。精道小学校は明治五年の学制公布で設けられた芦屋小学校（安楽寺内）と打出小学校（親王寺内）とが明治十九年に統合されたもので、西宮の漢学者・豊田政苗が「養精修道」の語から撰した校名であるという。

こうして、近代の地方制度の確立と同時に発足した村名だが精道の名はあまり親しまれず、結局、昭和十五年十一月の市制の実施に際しては、また、古来からの芦屋の名が採用され、現在にいたっているのである。

17　在原業平別荘の跡

日本文学史上、歌物語の代表作として知られる伊勢物語は、平安時代の業平の風雅な生活とともに芦屋の里の情景をしのばせ、ある程度史実を伝えるものとして、名

勝芦屋は業平ゆかりの地としてクローズアップされた。

「むかし、男、津の国菟原郡（うばらこおり）芦屋の里にしるよしして、行きて住みけり。……」

業平は芦屋の里の海辺に住んでいたが、京の都から貴人が来遊したとき、芦屋からちょうど一日の行楽の布引の滝（神戸）へ案内して、夕暮に大阪湾の海上に浮ぶ漁火を望みつつ帰来する記事など、じゅうぶんありうることと思われる。

業平の別荘がどこにあったかは、史実として確証はむずかしいことと思う。しかし、この地が業平の領地であり、父君である阿保親王がなくなられた地との伝えもあって、在原氏と芦屋との深い縁故が推察される。江戸時代の地誌は、その別荘跡を「業平朝臣仮居古跡」とか「在原業平別荘跡」と記し、現在の業平町にある市民センター付近にその位置を示しているが、もとより伝承によるものである。

芦が一面に繁茂し、野鳥のなき声のする芦屋川の南流風雅な造りの別荘、宮人たちの歌合わせ。このような美的世界を表現する歌物語の舞台設定に、都士人の感傷の地として芦屋の里は大きな役割を果たしてきた。

業平と芦屋を結ぶゆかりや、伝承については、業平植樹の初代汐見桜や、既述の「蛍合戦」・「雲林院」（第五章の六・八参照）がある。月若公園の西方には業平神社がある。また、業平橋でよまれた「業平朝臣東下りの姿」（星野天知・明治二十七年（一八九四）など、近代文学の舞台にもなっている。例年五月末の日曜日には、芦屋短歌会主催による業平祭が、市民センターで行われ、福田眉仙画伯の業平画像も公開される。

18　楠公戦跡碑

楠町・阪国バス山打出停留所の東二〇〇メートル

国道2号線沿いの北側に石垣をめぐらして、りっぱな花崗岩製の「大楠公戦跡碑」がある。このあたりは、戦国動乱の世に京都防衛の要地として、芦屋地方を舞台と

図120　大楠公戦跡碑

した古戦場のひとつである。

楠木正成が湊川で討ち死にする直前の延元元年（一三三六）二月十日、足利尊氏と打出、西宮で戦った。正成は足利直義に直撃を加え、尊氏らを兵庫に走らせた。「……はるかの沖を見渡せば、大船五百余艘は帆をあげて東をさしてはせたりける…」と、このときのようすはくわしく太平記に記されている。

この碑は、昭和九年、精道村教化団体聯合会が、楠公六百年祭記念事業としてとりあげ、村内有志の寄贈により、当時、工費七千六百余円をもって昭和十一年五月頃竣工した。

裏面の撰文には、正成軍と尊氏軍の合戦の様子が詳述されている。表面の本庄繁陸軍大将の筆になる題字「大楠公戦跡」を見あげるとき、およそ六百年前、この地に起ったはなばなしい合戦のイメージも、車の騒音とともに消し去られる。

19　大阪城と採石地芦屋の刻印石

芦屋から西宮にまたがる表六甲山系一帯から、元和六年（一六二〇）徳川秀忠によってはじめられた大阪城築城工事にともない、多量の花崗岩が、石材として切り出されたことが知られている。

これより前、豊臣秀吉が、天正十一年（一五八三）、大

石碑に記載
「昭和10年2月11日建立」

阪城築城に着手した際には、摂州本庄・芦屋郷・山路庄内で、石材採取、運搬に従事する者に、不法行為を禁じる「定」が出されている。また、天正十三年、秀吉が加藤嘉明に、尼崎・西宮・芦屋方面から、くり石を船で運ぶことを命じた史料が残されているが、秀吉時代の大阪城の採石場については、明らかになっていない。このことは、徳川製大阪城と築城方法が全く異るからである。近年、行なわれた大阪城本丸地下の調査によって、野づら積みの石垣が数か所確認されており、割石を使用していない自然石の石垣であった。徳川製大阪城では、クサ

図121

図122

図123

図121　大阪城東外濠刻印
図122　野外活動センター周辺（A）
図123　野外活動センター周辺（B）

ビによって割られた直方体の規格品が大半を占めている。

六甲山系一帯の採石場は、西は、おとど道の通称「かえる岩」付近から東は、仁川西岸までの東西約六キロメートルの間に点在し、それは、『徳川製大阪城東六甲採石場』と呼ばれている。昭和三十四年、大阪城石垣の総合学術調査が行なわれたとき、北と西の外濠から、ひらかなで「あしや」と刻まれた刻印が一一個確認されている。しかし、現在、表六甲山系からは、ひらかなの「あしや」の刻印は、発見されていない。

東六甲採石場にみる刻印の種類は豊富で、例えば、大名の家紋を示す㊂・○○・✥、石工の持ち場を表わす㊀・△一などの刻印があり、乙・⊕・卍・回など、意味の明らかでないのもある。分布状況も、いくつかのグループに分けられる。西から、城山を中心とした一帯には、✕・㊂、野外活動センターの周辺には、回・⊖・✕・△一・⊕・○がみられ、岩園町から六麓荘町にかけて、㊥・㊀・ⓜ・㊀の刻印、越木岩神社一帯には、✥の刻印、北山池一帯には、㊀・✥・#の刻印、甲山一帯には、○○・回の

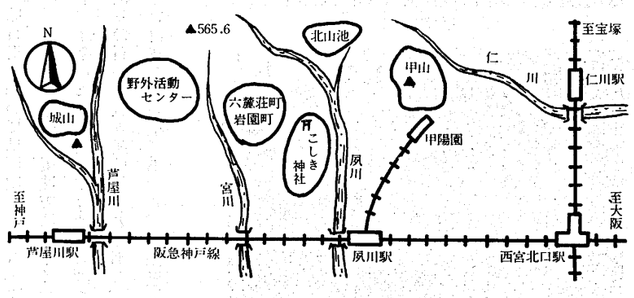


図124　東六甲採石場の刻印群分布

刻印など、六つのグループの分布があげられる。

このことから、東六甲採石場に分布する刻印と、大阪城石垣にある刻印とを照合してみると、明らかに芦屋と結びつきのある刻印は、野外活動センター周辺に分布する✕・乙・△・乙・大一・卍などが、東外濠の石垣にみられる（写真参照）。ひらかな「あしや」の刻印は、採石場以外のところで刻まれたものであろう。

表六甲山系に点在する刻印群、それは、築城に関係する資料として、近年とくに関心が強められているが、支配者と被支配者という関係においてみるとき、それに従事する人びとの様々な葛藤の名残りを止めているものといえる。

花崗岩が石材として、築城やその他の用途に、多く使われてきたことは、史料にもよくみられる。寛永十六年（一六三九）から、寛文元年（一六六一）までの「公義御普請」によると、江戸城普請の際、尾張殿御進上として「一角石廿四本　但見影石」が、天野麦右衛門・横山甚兵衛・中嶋弥兵衛の三名の氏名で献上されている。また、明和六年（一七六九）の『芦屋村差出明細帳』にも、農業が手すきのときには、石堀などを行ったことが記されている。明治になって、神戸～大阪間に鉄道が敷設されたころ、「打出村御林内の石材は症合（しょうあい）もよろしく、入費も格安」と、石材調査の記録が残されている。

このように、時代を問わず、表六甲山系の山々から、ひっきりなしに石材が切り出されたことがわかる反面、その作業に地元の人びとが従事させられるなど、無計画な採石や伐採が、山崩れ、洪水の原因となり、六甲の治山に大きな影響をおよぼすこととなった。

20　ドビワリの水争い

六甲南麓の沖積平野は、瀬戸内式気候のもとで大河も無く、そこで生きる農民にとって水の入手は、死活に関わる大問題であった。六甲山上の石宝殿や東灘区本山町中野の山中にあるドブ返しの池、さらに有名な芦屋の奥池など、今ではハイカーの憩いの場となっているが、江

戸時代の人々の願いを込めた歴史の跡なのである。水への渇望は、また時として村と村との間に激しい水争いを呼び起こした。芦屋の山中にある「ドビワリ」はこの水争いの名残りの地名である。

芦有バスを、東お多福山登山口で降りて、西方へ蛇谷（ジャダニ）の谷川に沿って歩いてゆくと、二〇分ほど

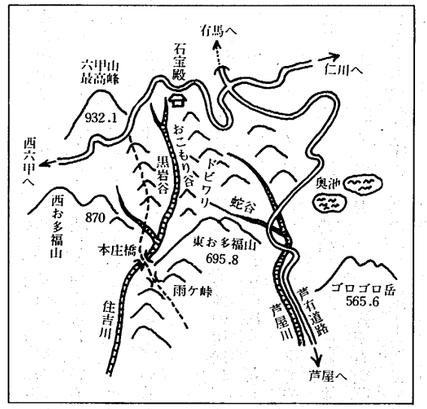


図125　ドビワリの位置略図

で六甲山頂への道と、東お多福山頂への道と、住吉川へ下る道と、今来た蛇谷の道とが十字に出会った峠にさしかかる。ここがドビワリだ。蛇谷は芦屋川の一源流であり、他方ドビワリから西の谷を見はるかせば、眼下に住吉川が南流している。言わばドビワリは、芦屋川と住吉川との分水嶺である。

文政十年（一八二七）六月、ひどい早魃にみまわれた芦屋川は、日毎にやせ細った。そこで下流の打出・芦屋の村人は、水源を調べに川をさか上って行った。シノキ山（現東お多福山）の裏に登った彼らは、西側の谷に流れを細めたとは言え住吉川が、かなりの水量を有しているのを見た。彼らは、おこもり谷・黒岩谷と流れ下ってくる住吉川の水を、芦屋川へ引こうと謀り、峠の所にドビ（土樋）を通して蛇谷に流し取ろうと工事をした。一方、急に減水した住吉川に不審を抱いた流域の村人は、川をさか上って、ついにシノキ山の北の峠で土樋をみつけた。知らせを受けた住吉下流の六か村（住吉・横屋・魚崎・田中・野寄・岡本―ともに現東灘区内）の村民は

激怒した。血気にはやる若者は、ついに峠へ登って、土樋を粉々に打ち壊した。

打出・芦屋の村では「住吉村外五ケ村之もの共大勢右場所え罷越……理不尽ニ致ニ破壊」と、大阪奉行所に訴え、一応六か村側の謝罪で和解したが、なお、紛争は続いた。それで八か村に関係する尼崎藩の役所と、天領支配を行っていた京都小堀代官所が立合いのもとに仲介者をたてた結果、今後打出・芦屋の村人は住吉川に流入する谷川から決して引水をしない。ただ此の度の破壊行為に関しては六か村の側から、賠償に銀五貫を支払うこと。打出と芦屋は、その銀を元にして溜池を築き、水不足に備えること。以上の条件で、話し合いが成立した。奉行所にそれが報告されたのは、文政十年も、日でりの夏をすぎ、木の葉いろづく十一月のことであった。

21　打出陣屋と神戸事件

市内翠ケ丘町にある阿保親王塚は、旧打出村の自然景観をよく伝えているが、その東方（字広野・中尾）には住宅が建ち並び、かつての打出陣屋のおもかげを偲ぶことはできない。史料の上からは維新前後の芦屋地方についてなかなかの事件があったことがわかる。

いまから百三十四年前の安政元年九月十八日にプチャーチンの率いるロシア軍艦が大阪湾を廻航したとき、打出村や鳴尾村の人びとは非常に驚かされた。幕末には摂海防備の必要性がますます高まり、文久元年（一八六一）三月二十三日には、打出陣屋が設けられた。「長州様御陣屋造、屋敷二町余」と記録され、その平面図はいまも山口県文書館の毛利家文庫に保管されている。西宮港の西波止海岸にある国の史跡、石造円筒形の「西宮砲台」が完成したのもその頃（慶応二年（一八六六））である。

「二、三門を据えて空砲を発ったが、煙が内に充満して堪えられず、実戦の用にはたたないだろうと評判になった」（吉井良秀『老ひの思い出』）

人心不安の当時の様子は、勝海舟の日記に「聞く当月（慶応二年五月）八日、兵庫に民商集合する事、一万四

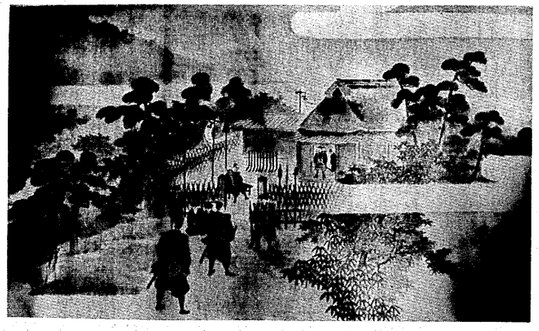


図126　打出陣屋之図　松村廷年筆（阿保天神社所蔵）

五千人たちまち四方に乱入し、富家を潰（こぼ）す、灘・西宮辺におよべり。鎮撫多数押うること能わず鉄砲を以て打殺す……」とあり、幕反行動がクローズアップされている。その翌年十月十四日に将軍慶喜は朝廷に大政奉還を上奏したが、例幕派の薩摩・長州・芸州も同日に密勅を受け上京することになり、十一月二十九日には、長州藩兵一千人余が打出浜に上陸するなど、芦屋地方の風雲は急をつげた。十二月九日、遂に「王政復古」の大号令が発せられた。明けて慶応四年（明治元年）正月十一日、二千人余の岡山藩兵が打出陣屋に陣所を置いて西宮札ノ辻の警備にあたるため、続々船で神戸に到着し、出兵の途中、重大外交事件が突発した。当時の三宮付近は、鳥羽伏見の戦いの後で大阪や横浜から難をさけるため、また新開港を求めて多くの外国人が集まり、兵庫の港には外国の軍艦や商船が入港し、居留地の完成をまっているような状況であった。

いまも神戸の大丸百貨店の筋向いにある三宮神社境内の西南のすみに「史蹟神戸事件発生の地」の碑がある。

事件の内容は、岡山藩兵の行列が三宮神社の南、旧西国街道で隊列を横切ろうとした外国人と衝突し、第三隊長の滝善三郎が手槍で外国人を負傷させたことから相方多数で、鉄砲が飛び交うという戦闘状態となり、港の軍艦からの上陸も察知されたので、備前軍は家老の日置帯刀とともに、はるか摩耶山を越え、唐櫃村を越えて、明くる十二日早朝、打出の陣屋に到着した。陣屋での混乱はもとより、芦屋地方に大きな不安を与えることになった。このような外交上の突発問題を起した日置帯刀は、その収拾のため東奔西走した。また打出陣屋に滞在していた長州藩兵三百人も治安維持と事件の交渉のため神戸に派遣された。しかし、外国側の強い要求を新政府は外交上、受けざるを得なくなり、逐に慶応四年（明治元年）（一八六八）二月九日、滝善三郎正信は兵庫南仲町永福寺でフランスなど六か国の外国人立会いのもとに、切腹した。時に三十二歳であった。

善三郎正信の分骨は三条岡山の共葬基地（神戸市東灘区の山手幹線道路と、芦屋市三条町の市境とが接する付近（第6章14参照））に埋められた。また、『武庫郡誌』に、「滝善三郎の友人、森下立太郎がこの事件を墳激し、慶応四年四月に記した一書が、打出陣屋のある芦屋の久保某氏に保存されている」と記されているが、その文書の所在は定かでない。なお、神戸事件については、岡久渭城著「明治維新　神戸事件」（昭和十三年発行）に詳述されている。

さて、摂海防備のため設けられた打出陣屋も王政復古や神戸事件などの動乱を経て、明治時代の夜明けとともにやがてその必要性が薄らぎ、警備の藩も明治元年から備前藩―尼崎藩とかわり、明治二年（一八六九）三月下旬、あわただしい時代の流れの中に消え去った。

22　有馬へのトトヤ道（魚屋道）

東六甲の登山地図をみると、神戸と芦屋の市境ちかくで山に登り、風吹岩・東お多福山を通って住吉谷に下り本庄橋あたりから一気に六甲山最高峰の東肩を越え、有

馬に至る山道が描かれていて、「魚屋道」と記されている。今、ハイカートでにぎわうこの道筋だが、江戸時代初期にまでさかのぼれる、最古の六甲の山越え交通路のひとつである。

芦屋に伝わる民話、例えば湯本の薬師・七右衛門ぐらの祟り・金兵衛車やけぐるま、などにはその中に共通する一つのモチーフがうかがえる。芦屋にある薬師堂の地下には、大阪湾から潮水が流れていて、それが六甲山の地下をくぐって地熱に温められ、再度わき出すのが有馬温泉だという湯本薬師の伝説。六甲の山中を通る旅人を襲ったため山の神の罰があたって、芦屋の荒地山で倒れていた七右衛門から、この山が七右衛門嵜と呼ばれるようになった伝説。また水車の働き手として丹波から出稼ぎに芦屋へ来た金兵衛車の主人公の悲恋の伝説。これらには、芦屋地方と有馬との直接的山越え通行の存在を思わせるのである。

江戸時代の地誌や古地図にも衆知されたこの山道は、灘地方と有馬との交通に利用されていた。従来、有馬への街道は、灘地方からは、芦屋付近を通って西宮に出、そこから北、小浜（現、宝塚市）や生瀬（西宮市）の宿場を経て今日の蓬莱峡の谷を西に進んで船坂、湯山に達した。だが、灘あたりからすれば、これは大きな迂回である。灘の村人や有馬の町人は、そこで山越えの直線コースを利用した。が、それは、生瀬・小浜・伊丹・昆陽・西宮など宿場の商人や運送業者にとっては、大きな減収を意味した。そこでこの山道の歴史は、江戸時代を通じて、最短コースを利用しようとする地もとの村人と、宿物の利益のためにこの道を閉じさせようとする宿場の商人との対立となっていく。文化三年（一八〇六）には小浜・伊丹・尼崎・生瀬の商人は、正規の街道でない所に大工事を施し、宿場も通さず抜け荷をしていると有馬湯山と灘本庄九か村（今の東灘区および芦屋市内の、津知・三条・森・中野・小路・北畑・田辺・深江・青木の村々）を相手どり大阪奉行所に訴えた。だが、被告の側はこれは柴刈り道だとか、谷川の土砂くずれを修理したのだとか言って、抜け荷のことは否定している。約半年の

後、結局「新規道ハ切埋、切広候道ハ以前之通リ細道ニ仕」ることで話しあいがついた。明治維新以降、宿場商人の特権が認められなくなり、自由な通行が始まる。しかし、明治二十年代を最後にむしろこの道の通行は急速にさびれてゆく。その原因は、皮肉なことに交通の発達にあった。つまり大阪・神戸間の鉄道は、当時、西宮・三宮間には住吉駅のみが開かれていたのである。

明治二十四年の『有馬温泉誌』は「住吉停車場まで汽車に乗り、住吉より六甲山越の路に由るを第一の便とす。此路は三里余にして明治十一年に修めし所なり……途中に茶屋もありて休憩に便す。」と記し、住吉ステーションを、有馬への表玄関としている。多くの文人墨客が、この道を通って有馬を訪れた。そんな中の一人、幸田露伴は『まき筆日記』の中に住吉ステーションから山越えの有馬への旅を記している。住吉駅北の有馬道商店街の名や、住吉神社東の有馬道の石碑に当時のおもかげをしのぶことができる。

23　奥池と猿丸安時

美しい詩情とかんがい用水として大切な役割を果してきた奥池は、海抜五百メートル以上のところにある周囲八百メートルの大きな池である。

奥池水神社　ユース・ホステルに近い西側の湖辺に石祠が祀られていて、そのそばの大きな花崗岩の磨かれた切断面に「天保十二年ここ奥山に猿丸安時は治水のため谷をせきとめ辛苦二十余年を要してこの池を築造しここに祠を建て水神を祀り末永く池の安全を祈る」と刻まれている。

江戸時代から芦屋地方の村々は、日でりが続くと田畑の水不足に悩み、水争いがたえなかった。当時、芦屋村の年寄であった猿丸又左衛門安時は、このような争いの原因を解消するため、天保十二年（一八四一）から約二十年かかって奥池の開さくに成功した。このことは、や

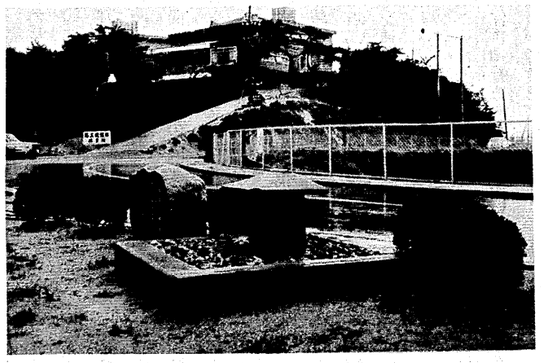


図127　猿丸安時　水神の祠と碑文

がて村々の用水不足解決への大きなはげみとなった。

安時の功績をたたえる歌（「池乃玉藻」大正七年刊から）

池水を田畑にひきて年々に
　　芦屋の里もうるほひけり　　唐橋在正

奥山にいのちの親の一つ池
　　世々につたへん君の恵みを　　玉置千代子

今も猶池のおもてにみおる哉
　　たかの尾山の高き功は　　吉井良秀

安時はまた、幕末から維新にかけて一八か村の総代庄屋をつとめ、村政の窮迫の打開につとめたので、幕府および県令からしばしば表彰されている。安時のお墓は、阪急芦屋川駅の東、約百メートルの沿線ぞい、猿丸家墓地にあり、大正五年に建設された頌徳碑が開森橋の東詰にある。また、東芦屋町、芦屋神社社殿の裏庭には安時七十六才の時の奉献梅樹の句碑がある。

万代のぬさにと梅をうえおかば
　　花咲くごとに神やめづらん

奥池と奥山貯水池　六甲山のなかで、もっとも美しい池が奥池であり、濃い緑に映える池面の静かさは、清い空気や風のなかによく調和を保っている。昭和三十五年六月、池畔にユース・ホステルが建設され、翌年の九月には芦有自動車道路が開通、三十九年十月にユネスコ会館が開館し、多くの人びとが訪れるようになった。いま奥池周辺には、会社の社宅や別荘、住宅が建ち、新しいまち、芦屋ハイランドもつくられている。

芦屋の人びとの生活に必要な芦屋川の表流水も年々持続性が乏しくなり、将来の需要に応じるため、昭和四十五年から、事業費約五億円を投じて着工した奥山貯水池も、昭和四十七年六月、奥池の隣接地に完成した。有効貯水量は、三四六・七四〇立方メートルで奥池の四倍以上にあたる。利用水量も、奥山浄水場で遠隔操作によりコントロールすることができる。周囲は延長千百キロメートルで、巾約十メートルの巡回管理道路がつくられており、散策道となっている。

自然の大庭園である奥池、野鳥たちや植物の宝庫、そ

図128　左．奥池、右．奥山貯水池　芦有道路展望台から見る

れは、長い歴史のなかで、芦屋市民に、はかり知れない恩恵を与えてきた。それらの価値がいつまでも変わらないよう、多くの人びとの理解と協力で守ってほしいものである。

24 芦屋の社寺

芦屋神社

東芦屋町・阪急芦屋川駅北東一キロメートル

祭神　天穂日命

例祭　十月十六日

創建は明らかでないが芦屋村の氏神として知られる。元禄五年（一六九二）寺社改帳・明和六年（一七六九）差出明細帳によれば、本殿は、面五尺五寸、妻四尺八寸御拝四尺五寸、屋根のし葺。拝殿は、桁三間半、梁行二間。敷地は、東西十八間、南北二十一間。境内は、東西九十二間、南北六十一間。馬場は、五十二間、横幅一間二尺。石鳥居は高さ九尺。末社に出雲神、愛岩、多賀大明神、荒神あり。また、門丸の森、庚申塚、十王堂石ほこら、天照大神宮、大将軍塚、弁才天女、若宮、同末社才の神があって、いずれも神主吉左衛門。

寛延二年（一七四九）本殿改築。安永五年（一七七六）

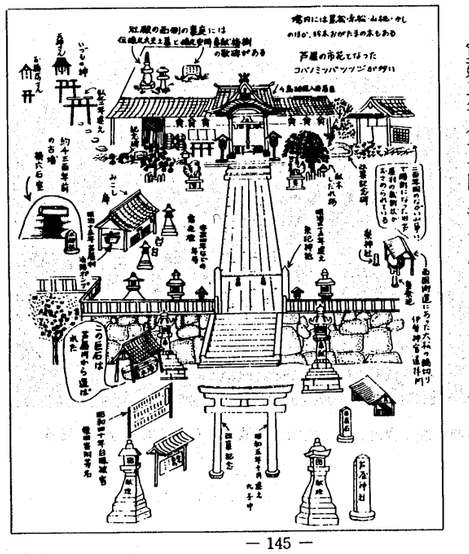


図129　芦屋神社、略図

に修復が行われた。

現在の社殿をはじめ、諸建築物は昭和五年に新改築された。また、昭和二十一年、天神社を芦屋神社と改称した。

神社の歴史的背景を知るものに山勝祭がある。これは四百年ほど前、織田信長が天下統一をめざして活動していたころ、芦屋市内の芦屋庄二か村、西宮市内の社家郷六か村、神戸市内の本庄九か村が共有山の領有をめぐって争い、芦屋庄二か村の農民すべてが、逃散するという大事件があり、数年後やっと帰村するにいたった。この争いは以後二百年間にわたり、寛延三年（一七五〇）幕府の裁決で芦屋の勝訴となり、村民は、その判決文を芦屋神社に奉納した。このように神社は、村民の決起・団結をはかる場として、大きな役割を果してきた。

いまも神社の境内は、黒松・赤松・かしなどの樹木でおおわれ、古い歴史を秘めていることがうかがえる。四季を通じ訪れ人も多い。境内には、市花「コバノミツバツツジ」や珍木、おがたまの木がある。かって、業平橋の東方、旧西国街道にあって、参勤交代の大名の休憩所や旅人の目じるしになっていた大松の輪切りが、伊勢神宮逢拝所として残されている。石造品には、社殿の裏庭に、猿丸太夫之墓と伝える宝塔や幕末、奥池の開さくに貢献した猿丸安時の歌碑、明治三十七年建立の日露戦争武建長久の碑、芦屋川から運搬した巨石でつくった手洗鉢などがある。このほか、境内の南西、みこし庫のひさしにつるされている旧芦屋村の手押消防ポンプ、その西側には七世紀の古墳が残されていて、芦屋川の上流、弁天岩に祀られていた水神社が移されている。

打出天神社

打出春日町・市立図書館東側
阪神打出駅北二〇〇メートル

祭神　菅原道真・事代主命

例祭　十月十七日

創建・由来とも詳かでない。寛文七年（一六六七）六月、初代宮守南嶺が願主となって菅原道真の木像を寄進。寛政八年（一七九六）刊の『摂津名所図会』に「生土（うぶすな）

神」と記されている。

明治四十一年（一九〇八）四月、旧打出村の金比羅神社（字下宮塚）・春日神社（字寺開地）・若宮神社（字若宮）・南宮神社（字北羅）・厳島神社（字小松原〈金津山〉）を合祀した。

本殿は、瓦葺流造り、幣殿は銅葺切妻造り、拝殿は、銅葺入母屋造りであったが、昭和二十年八月五日の阪神大空襲で社務所（大正三年建造）を残して焼失。三十九年に新社殿（流造り）が竣工した。

境内には、元禄四年（一六九一）の石灯籠などのほか神輿庫の新築記念碑があり、「諸人のつくす誠に千早振る神もめでてや守りますらむ」従七位阿部光忠。

尽力の功や菊の花盛り　細谷玉水

と刻まれている。

岩園天神社（岩ケ平天神社）

岩園町・阪急バス苦楽園行で岩ケ平下車
東北三〇〇メートル

祭神　菅原道真・秋葉大神・春日大神

例祭　十月十七日

創建については、元禄五年（一六九二）の寺社改帳に「天神社、表一尺六寸、御拝有、板葺、敷地二十間に十五間、除地。是は前々より鎮座御座候へ共勧請の年暦不分明候」とある。

明治年間改築して木造切妻造り瓦葺の社殿となる。境内には、元禄九年（一六九六）奉納の石灯籠がある。南西角に七世紀末頃の古墳の石室があって、その上に「役小角」の像が花崗岩の石に刻まれて建っている。古くから土地の人びとは〝行者さん〟と呼び、お宮と同じように大切に信仰されている。神社の裏側にも古墳の横穴石室が一基ある。

昭和五十三年八月、本殿および拝殿は近代的な鉄筋コンクリート造りに新築された。拝殿に奉納されていた絵馬は、現在、市民センター史料室に寄託されている。

岩園天神社奉納絵馬

図130　毛剃九右エ門博多小女郎波枕　安政４年（1856）
岩園天神社絵馬（A）

図131　牛若丸鞍馬山修業　明治12年（1879）
岩園天神社絵馬（B）

○佐々木高綱・梶原景季
宇治川先陣争之図　安政三年（一八五六）
○勝五郎箱根霊験記　安政四年
○毛剃九右エ門　博多小女郎波枕　安政四年
享保三年（一七一八）十一月、竹本座で人形浄瑠璃として初演された近松門左エ門作の世話浄瑠璃で、歌舞伎には、延享元年（一七四四）中村喜代三郎座で上演された。享保三年十月、密貿易の一味が捕えられて処刑された実説を脚色したもので、近松の世話物中でも珍らしい題材を扱っている。
（解説『月刊文化財』一九七〇年四月号から抜粋）
○牛若丸鞍馬山修業之図　明治十二年（一八七九）

阿保天神社

上宮川町・国鉄芦屋駅南東二〇〇メートル

祭神　阿保親王・在原業平・菅原道真
例祭　十二月一日

創建については明らかでないが、木造瓦葺の本殿や拝殿があり、参詣者も絶えなかった。

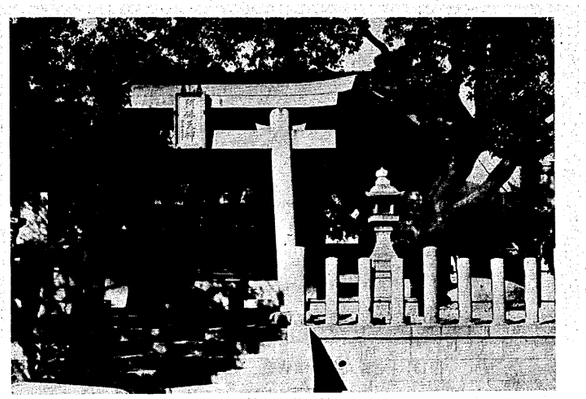


図132　阿保天神社

昭和二十年八月五日の阪神大空襲によって、京吉稲荷神社（鉄筋コンクリート造）を残すのみで全焼した。昭和二十七年六月、有志が復興に努力し、主神の道真公のほかに、阿保親王と在原業平を増祀して阿保天神社と改称した。また、戦災で焼失した六麓荘の氏神、大国神社（祭神の御神影は、福田眉仙筆）も合祀されている。

昭和三十一年、戦災の社殿を再建、本殿は流造銅板葺拝殿は入母屋造瓦葺。現在の宮司は、新宅基良氏が迎えられている。

社頭には、松山興兵衛家から移築した「大明作天下泰平」の記銘のある石製の仁王像一対がある。境内には、元禄年間の鳥居の石材や猿丸吉左エ門氏の紹介による阿保天神御神明の石製額が鳥居上に掲げられている。境内の東北すみには、古式の手洗鉢や「力石五十貫」と刻まれた卵形の六個の石があり、むかし、境内で青年たちが力比べを競いあった面影を伝えている。

宝物　松村荘年筆による「阿保親王・業平・菅公三体之図」・「業平布引観瀑之図」・「楠公打出浜の合戦・打出陣屋之図（絵巻）」などが保管されている。

なお、阿保天神社の東側、南北の道に面して、消防や青年団など、自治活動に貢献した「灘本忠左衛門氏頌徳碑　紫水庵主人書　大正十二年九月建之　村中」と刻まれた、高さ約三メートルの大きな花崗岩製の頌徳碑が建立されている。

八幡神社

三条町・阪急芦屋川駅北水道筋西方三〇〇メートル

祭神　八幡（やはた）皇大神（おおかみ）・大山積大神・市杵（いちき）島姫神ほか
例祭　十月十五日

創建は、元禄五年の寺社改帳に、何百年も以前から村中廻持ちの支配であったと記されている。旧三条村の古くからの氏神は、本庄九か村の氏神である森村の稲荷大明神であったが、江戸時代には八幡宮が三条村の精神上の指導的役割を果していた。

明治四十年八月、山神社（字西畑）・厳島神社（字塚穴之場）を合祀した。同年九月に本殿・拝殿を改築、石鳥居などを新造した。本殿は、瓦葺切妻造り。昭和十七年八月、社務所新築。神社には数百年を経た巨松三本があったが、昭和十六年頃枯死した。境内には、近くの西山町、塩通山法恩寺跡（元栃木氏邸内）にあった国指定天然記念物（昭和九年指定）「六甲クロガネモチ」（高さ二〇メートル・幹周三・五メートルの巨樹）（昭和三十三年枯死）の石標が移管され、同地にあったモチの孫木も植樹されている。また、三条町一六一番地にあった境界石標「従是東尼崎領・西尼崎領　他領入組」（高さ一九五センチメートル・巾二〇センチメートル）が移管され解説板がたてられている。

日吉神社

津知町・業平橋から国道2号線を西へ四〇〇メートル・津知バス停の南西一〇〇メートル

祭神　大山咋神（おおやまくいのかみ）

図133　修築中発見された文政三年の棟木

例祭　十月十五日

創建は明らかでない。近江の国日吉大社から分かれた。元禄五年、寺社改帳に社名がみられる。近年、社殿の修築中に文政三年（一八二〇）再建と記された棟木が発見されている。本殿・拝殿とも瓦葺切妻造り、明治四十三年（一九一〇）二月、厳島神社（字一ノ坪）を合祀。祭神は市杵島比売神（いちきしまひめのかみ）で「歯神さん」といわれている。大山咋神は、大年神の御子で比叡山に官居された山神であるが、造酒の神としても信仰されている。拝殿の東側には、ほうそうの神が祀られていて、遠く淡路方面からも参詣に来られる。境内には修養施設、日吉会館がある。境内の周囲池をめぐらした浮島に厳島神社が祀られ、その近くに石祠（石がん）がある。

図134　日吉神社境内の石祠

石祠　総高五八センチ、屋根高二〇センチ、幅五一センチをはかる花崗岩製の石祠で、屋根に「永正十七年」の銘文がみられる。永正十七年（一五二〇）は、細川高国・瓦林政頼と細川澄元が芦屋・西宮地方で合戦をくりかえしていた頃である。現在、芦屋市内に遺存する最古の金石文であり、旧津知村の歴史を物語る大切な資料でもある。

安楽寺

西山町・阪急芦屋川駅北側水道筋西一〇〇メートル

芦屋村寺社改帳（元禄五年（一六九二））・芦屋村誌（明治十七年（一八八四））などの史料によると、当初京都知恩院末寺で浄土宗大甲山長福寺と号した。宝永年間（一七〇四）に寺号を安楽寺と改称した。

本尊　阿弥陀如来。本堂は昭和四十三年、鉄筋コンクリート造りに改築した。

本堂の東側には、代々の住職の卵塔などの墓石や古い墓がある。

如来寺

川西町・阪神電車芦屋駅北西三〇〇メートル

大正十五年五月建立。本尊　阿弥陀如来。大正年間、川西町在住の野瀬七郎氏が「日本如来講」を創設（大正十年三月）した高山市出身の仏教信者「如来まんじ志希

女」を芦屋に招き、しばしば宗教講座を開催したことが契機となり、「芦屋如来講」ができた。野瀬氏は更に敷地と本堂・庫裡の建築費などを負担し、如来寺（財団法人芦屋精舎）が建立された。その後、仏教の道場として遠方から多くの信者が訪れるようになったが、昭和三年六月、志希女史が歿した。昭和四年六月、如来志希女史の墓碑が、境内の十三重層塔、護国念仏塔の北側に建立された。昭和六年十二月、芦屋如来寺と改称、真宗京都仏光寺派に属し、正式に寺院とした。毎月、二十五、六日には説教が行われる。昭和三十六年八月、「老人いこいの家」が併設された。

親王寺

南宮町・阪神打出駅南西二〇〇メートル

承和十一年（八四四）、阿保親王の住地に建立されたと伝えられる。本尊、阿弥陀如来。天文二十四年の芦屋庄住民の逃散（芦屋神社の項参照）で浄土宗に帰依した人びとが、永禄三年還住の後、宗満寺の跡を親王寺に改めたという。長州藩主毛利家が、阿保親王の裔孫大江広元の子、季光を祖としたから、当時を厚く崇敬し、種々の寄進宝物が蔵されている。知恩院末寺で、元禄十年ごろの住職は、覚誉であった。

宝物　阿保親王寺縁起・竹園之伝記・阿保親王画像・業平朝臣画像・経典・考古資料など。

寺内には、五輪塔・角石塔・香合形・板碑形・笠付形・卵形など様々な形の墓石が安置されている。とくに境内東側にある石仏は、尊像全体が大きく、珍らしい構造である。北寄りの定印弥陀像は、室町時代後期のもの。東南にある板碑は、江戸初期の造立である。

図135　親王寺内にある板碑

妙福寺

南宮町・阪神打出駅南東五〇〇メートル
市立精道中学校北

寺伝によると、四百年ほど前、この地の浄満寺跡に三好日向守が、妙覚寺を建てた。

慶長十一年（一六〇六）、江州金が森の真弟竜玄の孫、善教を招いて妙覚寺の開基とした。竜玄の持尊蓮如上人真筆の草書六字の名号をもって当寺の本尊とした。元禄八年（一六九五）打出村の大火で妙覚寺も類焼した。正徳五年（一七一五）、第七代住職貞順が現在の阿弥陀如来を請い受けて、本尊とし、寺号を妙福寺と改めた。文政二年（一八一九）、第十五代住職広慧が本堂を再建した。

昭和三十三年十月、第二阪神国道建設のため、寺を南宮町一一九番地に移転した。真宗大谷派東本願寺末、真相山妙福寺。

照善寺

上宮川町・国鉄芦屋駅南東二〇〇メートル

開基は明らかでないが、元禄五年の寺社改帳によればかって、辻本道場といって、説教所のようなものであった。享保十七年（一七三二）に、釈昇道という僧侶が本山の京都西本願寺から阿弥陀如来の立像を乞いうけて本尊とし、光明山照善寺と号して正式の寺としたと伝う。

寛政四年（一七九二）大火のため焼失し旧記一切を失った。戦時、阪神大空襲のため、本堂をはじめ、主なる建物が全焼したが、いち早く復旧した。

照楽寺

三条町・阪急芦屋川駅西北五〇〇メートル

貞享三年（一六八六）までは、西本願寺末の摂津国川辺郡小浜毫摂寺下の三条村辻本道場と称したが、同年四月五日、本寺から水無瀬山照楽寺という寺号を受けた。

寛政ごろは、無住の状態が続き、文政九年（一八二六）四月、教乗が入寺するまで役僧は輪番としてつとめた。寺伝によると、開基の教伝は、永正元年（一五〇四）に六十五歳で没しているので、開創は、十五世紀末と思われる。

25　神宮寺本尊十一面観音立像

阪神電車打出駅北、市立図書館西方、神宮寺

図136
神宮寺本尊
十一面観音立像

市内にある仏教美術中、特筆されるものに天台宗梅松山神宮寺の観音堂に安置されている本尊がある。

この木造は、口碑によると、寛和年中（九八五―九八七）、恵心僧都が業平の遺風を慕って来遊し、阿保親王廟に参拝したとき、その荒廃をなげいて自らこの像を刻んでお祀りしたという。

寄木造の像は、像高一・一四メートルで両手、肩先などに後補の部分がみられるが、前面の原形をよく保ち、側面も量的な表現を有している。とくに面部のやや面長の顔は、静かな優しさを保ち、眉・眼の緊張した線と、

頭上の十一面の化仏とともに、美しい調和がみられ、拝する人びとの心をとらえる。古代末期にさかのぼる文化財である。

昭和二十年八月五日の空襲で観音堂は全焼したが、本尊および脇仏八体とも無事であった。そして現在再建された観音堂に安置されている。

なお本像については、『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第十三輯〈武藤誠「打出観音堂の十一面観音像」〉に詳細に報告されている。

26　潮見（汐見）ざくら

山手町・阪急芦屋川駅北方、開森橋東詰

大正十三年（一九一三）四月十一日の『西摂新報』に「精道村芦屋の汐見桜は、有名な沿道の名木であるが、昨年返り咲きが多かったのと虫害のため、大いに衰えて開花は例年の半分位であるが、昨今見頃で掛茶屋や出し店で賑っている」と記され、当時は阪急芦屋川駅に〝潮

図137　開森橋西詰にあった名木“汐見桜”

見ざくら見ごろ〟と看板が出され、遠方からの見物客も多かった。

初代の潮見ざくらは、西山町の芦屋廃寺〈塩通山法恩寺〉内に、在原業平が植えたと伝えられている。潮見桜の名称は、法恩寺のあたりから芦屋沖が一望され、紀州熊野から流れてくる虹のような潮筋が見えたことから起ったと言う。二代目は、前田町仏教会館の西南、国道2号線の北にあった大竺堂の森にあって、江戸時代の地誌『摂津名所図会』に記されているほどであったが、明治初年、売却される際、その老樹には狐がすみついていたと言う。三代目は、開森橋の西詰に明治六年（一八七三）芦屋小学校の校舎新築の際、校庭に植えつがれた。二本の枝垂ざくらは、よく成長し、京都の祇園ざくらのように美しく昭和初期まで芦屋の名木として知られた。四代目は、昭和三十三年四月、芦屋史談会有志によって、山手幼稚園北側の現在の場所に植樹された。いまの潮見ざくらは五代目である。

開森の潮見ざくらの名のみにて
海こそ見ゆれ咲く花もなく　　富田砕花

27　名勝　芦屋の松

芦屋の自然景観を代表する美しい情景に松があげられる。京都から西国街道を旅してきた人びとが打出の浜に出ると、そこには海が見え、白砂青松の風景がひらけていた。

史跡　西山町にあった塩通山法恩寺（芦屋廃寺　奈良時代～室町時代）の境内には、松の緑によって潮のよしあしを判じて、芦屋浜の漁をする人びとは船を出したという「潮見の松」や「芦屋の松」・「行基の松」があった。法恩寺に近い三条八幡社にも三本の巨松があったが、いまは神社に奉納された松の絵にそのおもかげをとどめるにすぎない。旧西国街道の打出には、名所金津山（黄金塚　春日町）があり、小松原の地名の通り、美しい小松が多く、その中に厳島神社が祀られていた。また、一

図138　西山町134番地にあった「行基の松」の碑

里塚の跡ともいわれる樹令数百年の老松がそびえていた「打出の一本松」や茶屋芦屋の街道筋にあった巨松は、大名の参勤交代や、旅する人びとの憩いの場であり、道しるべとなっていた。その巨松も輪切りとなって現在は赤松・黒松の多い芦屋神社の境内に安置され、伊勢神宮遥拝所となっている。

「芦屋のみこしかき音頭」に

神の松から吹きくる風は心勇んで色をなす
打出名所はかずかずあれどわけて名高い黄金塚
宮の前なる鳥居をくぐり町を廻わってお旅所へ
打出名所はかずかずあれどわけて名高い一つ松

また、子規門下の島道素石『芦屋風景』に

芦屋一の百尺の松天高し　　法恩寺跡
松疎々と霜に日当る黄金塚　　黄金塚

地誌・文学　万葉のむかしから地誌や文学に芦屋の松は題材として、しばしばとりあげられてきた。

《古代・中世》『伊勢物語』（平安時代）芦屋の段によまれている浮海の松、『拾玉集』（鎌倉時代）巻第二の芦屋の里の松の夕風、『夫木和歌抄』巻引には〝ゆふされば秋やは松をふく風に　軒うちそよぐあしやのさと〟などがみられる

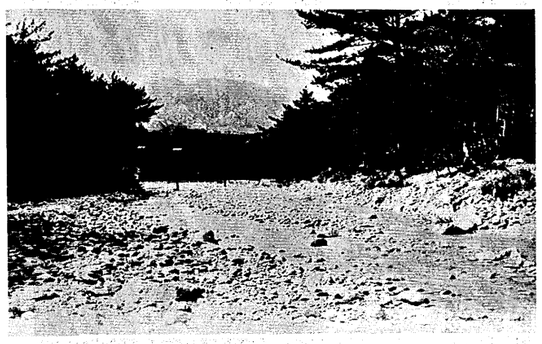


図139　大正時代、松のおい茂った芦屋川風景

《近世》『福原鬢鏡』（〈延宝八年〉一六八〇）にえがかれた阿保親王塚の松林、『摂津名所図会』（寛政十年〈一七九八〉）の芦屋浜と芦屋川流域の松並木の鳥瞰図「海瀕舟行之記」や「尼崎より明石までの海道名所図」など絵巻物や地誌に興趣のつきない芦屋の松の情景がえがかれている。

《近代》　精道村時代の白砂青松の風景は多くの写真に残されているが、松はまた、近代文学の名作のなかに生かされる。

「河原も道路も蒼白い月影を浴びて、真白に輝いていた。対岸の黒い松原蔭に、灯影がちらほら見えた。道路の傍には松の生い茂った崖が際限もなく続いていた。そしてその裾に深い叢があった。月見草がさいていた。……」（徳田秋声『蒼白い月』）

「黄昏の海を見ていると、
味のいい葡萄酒の匂いがする。
黄昏の松原を見ていると、
紫色の絹の匂ひがする」　（柳沢健『芦屋風景』）

「芦屋にはオリーブの代りに黒く堅い松の林の連続がある。私も悪いともいえないが、オリーブのみどりに比べると色彩が単調で黒過ぎる。葉が堅い。従って画面が黒く堅くなる。地面は六甲山から流れてくる真白の砂地である。白と堅いみどりの調和は画面に決して愉快な調和を与えない。」

（小出楢重『めでたき風景』）

林　相　芦屋市域の生活居住区に近い芦屋川の南には黒松が多く、上流の六甲山地には、赤松が多い。黒松・赤松の緑、枝振り、樹幹の色は阪神地方の風景を構成する要素のひとつとなっている。赤松は樹冠が日光を通しやすいので生育しやすく、砂防植物としても大切である。現在のような赤松林に変わったのは、自然条件として花崗岩山地のはげしい侵蝕や比較的乾燥した気候条件のためと、人為作用で伐採、山火事が繰返され、常緑広葉樹林にかわって、第二次的な森林が出現したためである。昭和四十九年、大阪市立自然史博物館が奥池のイモリ池におけるボーリングによる炭化物のカーボン測定によれば、シイ・カシなどの常緑樹林が松林にかわった年代はいまから千三百年～千四百年前の古墳時代後期（六～七世紀）という結果が出ており、その頃人為作用がおよんだことがわかる。

市木・市花　芦屋の町名や小字名も、松浜町・松ノ内町・旧三条村の松本・松林を切りひらいた開森、芦屋神社に近い松風山荘など松に起因している。

芦屋川流域の海岸から業平橋までの2キロメートルにわたって昭和十年、約四百本の黒松が植樹されているが、桜並木や山麓グリーンベルトの松林と相まって、松のある芦屋の景観の保全が痛感される。

昭和四十六年、芦屋市は、市制三十周年記念にあたり記念事業のひとつとして花や木を大切にして、まちを緑と花でつつむ市民憲章の精神をいっそう進めるため、市の木に「クロマツ」を市の花に「コバノミツバツツジ」を選んで制定している。

28 打出焼

芦屋の代表的な特産品として特筆されるものに「打出焼」がある。

打出の土地は古くから壁土の産地として知られ、明治の中頃には芦屋の先覚者、斎藤幾多氏が、その特有の粘りや土質のよさに着目して陶工を招いてお庭焼の窯を築いた。明治四十二年（一九〇九）には、打出春日町七（旧打出村字古敷二三）の打出丘陵に登窯を築いて、仁清の流れを汲む阪口庄蔵氏（初代砂山）に秘伝を継承され、「打出焼」と称した。茶器や花器などの渋い作風は、広く京阪神の人びとに愛用されるようになった。原料の粘土の不足は、信楽・京都方面の土を混入し、需要をみたした。しかし、戦中戦後の不況が重なるなかで初代砂山氏が没し、二代目として阪口淳氏が窯元を継ぎ努力を続けられた。同氏は仁清・南蛮・三島風などを研究されていたが、伝統の芸風に固執することなく、陶工芸

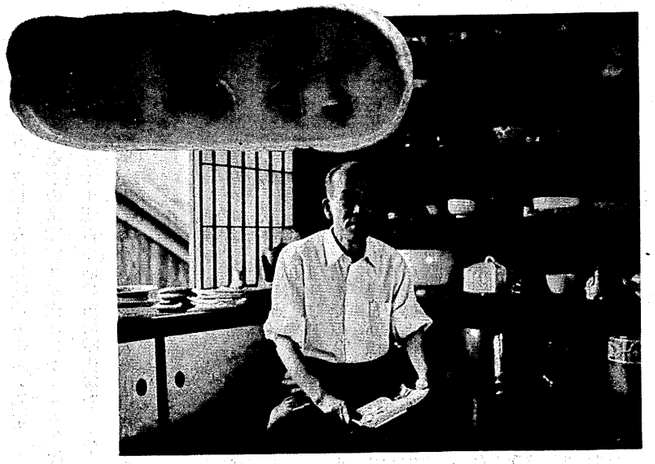


図140　打出焼窯元　故 阪口　淳 氏

図141　「壁土を打つ人」打出丘陵
大正6年11月「児玉隆男氏遺作スケッチブック」から

当時、“打出の壁土„は、上質の粘土として知られ、西宮や神戸市の新在家方面にかなり運ばれた。

市内の民家の屋根には、いまも打出の土で焼いた厚みのある瓦が残っている。

に対する正しい認識を一般に普及するため、民芸風の味を生かした「陶芸趣味の会」を主催し、昭和三十年代までは阪神間の多くの人びとが参加し、各地へも送り出すほどであった。また、宮内庁から市内翠ケ丘町にある阿保親王塚の管守に任ぜられ、昭和四十六年一月まで奉仕に当られた。

打出焼の製作工程　手ロクロ、蹴ロクロを用い、型には押型、手造りの方法によって素焼するか、または成形されたものをすぐ素焼し、装飾したものを施釉して、摂氏千三百度の登窯に入れて二昼夜ぶっ通しで焼き、製品として仕上げる。したがって本焼は、仕上製品までに二・三か月はかかり、その作品は、ドッシリとした感じで光沢もあり、冴えた音がして仲々優雅な趣をたたえている。「打出焼」の普及に努められてきた砂山氏は、その後、体調をこわされ、病気がちとなり、昭和四十年頃からは製作を中止され養生につとめられたが、五十三年六月、逝去されたことは惜しまれる。

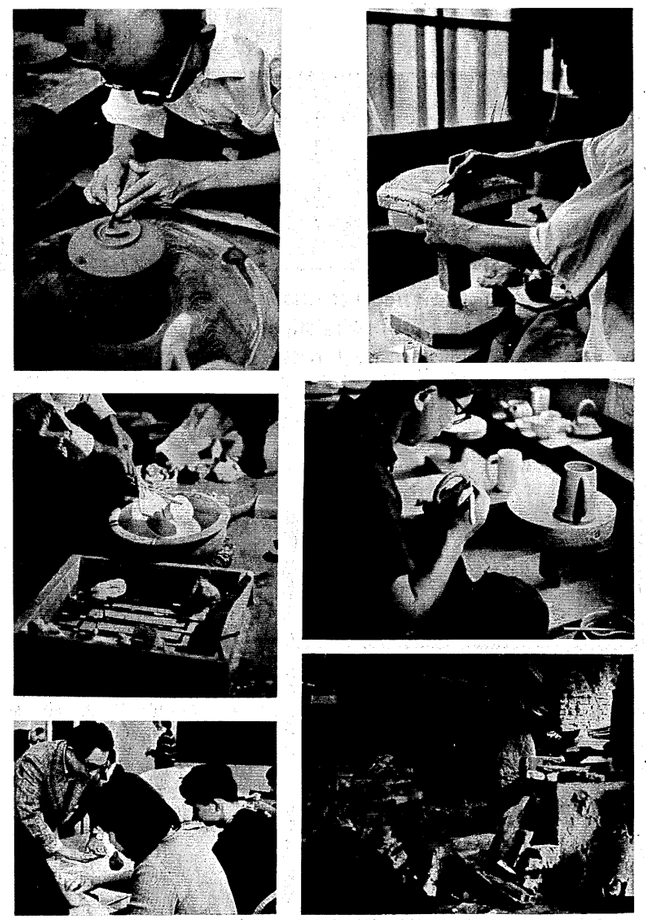


図142　打出焼製作工程　上段　右．押型　左．手ロクロ　仕上げのけずり
中段　右．ジョッキの手付　左．くすりがけ
下段　右．本焼石炭ガマ　左．陶芸グループを指導中の阪口 孝 氏

いっぽう、次男の阪口孝氏は、陶芸に職人的な世界から脱し、純粋芸術理論に立脚した美と科学の追求を志し、昭和二十三年、京都市工業研究所に勤務されるとともに楠部弥弌氏（昭和五十三年〈陶芸部門〉文化勲章受賞）に師事され、たびたび日展に入選するなど、活躍された。昭和四十三年八月九日の皇太子・同妃殿下の芦屋市民会館への行啓の際には、同氏の指導される陶芸グループの製作状況を親しくご覧になった。現在は、尼崎市に居住され、芦屋市と尼崎市の美術協会員のほか、西宮市芸術文化協会運営委員として市の芸術文化事業に協力されている。また、阪神間五市の陶芸グループの指導育成にもつとめられている。

29　国指定重要文化財　旧山邑（やまむら）家住宅

（淀川製鋼研修館）

阪急芦屋川駅北方山手町県道沿い

芦屋川の左岸、山手幼稚園のあたりから山麓をみると

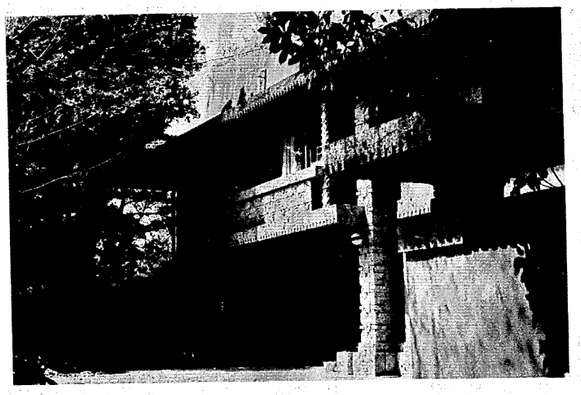


図143　車寄せ外観全景　旧山邑家住宅（淀川製鋼研修館）

川と県道にはさまれた傾斜の急な丘陵上の南端に、うっそうとした樹林にかこまれたベージュ色の建造物、旧山邑家住宅が望見できる。この建て物は、大正十三年（一九二四）頃、醸造家山邑太左衛門氏が建てた別荘で、日本の近代建築に深い影響をあたえたアメリカ人建築家フランク・ロイド・ライトが設計したもので、昭和四十九年三月、国の重要文化財に指定されている。

大正十年前後の芦屋　大正十年（一九二一）頃の「芦屋別荘地図」をみると、開森橋の北に城山橋がかかっていて、東側の丘陵には、ドクトル・エーチ・テンカラー邸と佐多邸など数軒が記されている。明治四十年（一九〇七）大阪府立高等医学校（阪大医学部前身）の校長であった佐多愛彦氏が、その専門とする結核病理学の立場から、芦屋山手地帯を阪神間第一の健康地として推賞し、自ら別荘を建て、松風山荘住宅地の基をひらいた。

大正九年、阪急芦屋川駅が開設され、山手芦屋の丘陵地帯にも住宅建設が広がり、芦屋川を中心に住宅街が形成された。大正八年から十一年にかけての精道村時代は十二回にわたる土地耕地整理事業が行われ、街路区画が整えられ、衛生環境・生活環境の改善・教育施設などの充実が進められていった。大正十二年六月には、鉄筋コンクリート造り3階建の精道村役場も竣工した。大正十四年の精道村人口は、一九、二五七人。戸数三、五九八戸であった。

当時、ライトは、日本に滞在して、帝国ホテルなどの設計に従事していたが、山邑家の依頼を受け、芦屋の地を訪れ、この地がライト自身の建築上の自然観にふさわしい住宅敷地であることが認識されたといわれている。

ライトは、一九世紀の中頃から一九五九年、九十一歳で死去する直前まで創作活動を続けた。

ライトの建築の特色は、人間尊重、自然とのかかわりを追求したところにあり、その本領は、住宅建築にあった。アメリカの建築は、ライトによって、はじめて自然を損うことなく、その風土に融合した建築がうまれたといわれている。

建物の概要　県道沿いの東側進入路から、細長い車道を行くと、大谷石を敷きつめた車寄せと玄関にいたる。建物は、約四千七百平方メートルの敷地に、外観四層の構成で、大谷石と鉄筋コンクリート造りで建てられている。

車寄せの上層、二階は大谷石の彫塑的な壁面を生かした長方形の応接室と暖炉・大きなガラス窓、南側には、バルコニーが設けられている。三階には、和室・洋室・浴室などのほか、連続窓も西側につくられている。通路は、幾段にも変化し、天井部には、幾何学的なデザインがほどこされている。四階は、せまい空間を生かして、立体的な模様を表わした食堂と厨房がある。そこから外部空間の二段になったバルコニーへと続いている。ここからの眺望はすばらしく、街並や大阪湾が一望できる。このように、玄関から最上階の食堂まで、連続した通路の軸線でつながれている。

旧山邑家住宅は、昭和四十六年の秋に、現在の所有者である株式会社淀川製鋼所が、土地利用のため、取りこわす計画があったので、建築専門家や、周辺住民などから、保存への強い要望が出され、所有者の理解によって保存されることとなった。

フランク・ロイド・ライトが、日本で直接手がけた住宅が、唯一、芦屋の地に現存している事実は、近代建築史上、重要な意味をもつものといわれている。

30　精道村役場

精道町・阪神電車芦屋駅南側、現在の健康センター

精道村が成立した明治二十二年（一八八九）当時の人口は三千余人であった。村名は、精道小学校名をとって命名した。当初の役場は、芦屋字樋口新田一九一五番地（現在の精道小学校敷地内）に設けられ、空教室を使用して役場事務が進められた。その後二十八年には、開森橋西詰の旧芦屋小学校の位置に移転するなど不便な状況が続いたが、大正十二年（一九二三）になって、現在地に新庁舎を新築し、六月十四日竣工移転した。

新庁舎は、鉄筋コンクリート造三階建、敷地面積五七二・四八坪、建坪六六・〇一坪、二階・三階床面積合わせて一一三・七六坪、延面積一七九・七七坪、総工費約六万三千円で当時日本一の村役場と称された。

昭和十五年市制後も膨脹する市勢の発展に対応するため、三十五年八月十六日、精道町七番六号の位置に、鉄筋地上四階・地下一階、建築延面積五六一〇平方メートル、工費二億四千万円で現在の新庁舎が落成した。旧庁舎は、現在、健康センターとなっている。

31　剱谷森林気象観測所跡

~~芦屋市~~精道町剱谷国有林（ゴロゴロ岳）

…自然と人間のかかわり、風雪の三十八年……

奥池にあるユース・ホステルの前を西南へたどり、芦屋ユネスコ会館を東に見ながらユーススタディ前のイモリ池湿原をすぎて、さらに東への坂道をゆくと、望楼のそびえる観測所跡に通ずる。シーズンには、ハイキングコースの分岐点としてにぎわう。

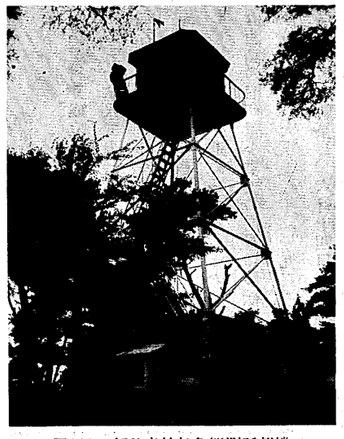


図144　剱谷森林気象観測所望楼
（池野良之助氏提供）

昭和十年、気象観測と山火事看視の必要性から、標高五六五・六メートルのゴロゴロ岳に、神戸営林署剱谷森林観測所が設置され、当時、二十五歳の若さで、池野良之助技官が着任した。「三月十日、本日ヨリ兵庫県武庫郡精道村打出字剱谷国有林剱谷見張所詰トナリテ赴任ス、降雪セル寒キ日ナリキ」と、氏の「日誌」の第一ページ

に記されている。

剱　谷　芦屋側を「剱谷」西宮側を「剣谷」と書く。標高約五八〇メートルであるが、五六五・六メートルの立合峠の頂に三角点があり、語呂をあわせて、通称〝ゴロゴロ岳〟（雷岳）と呼ばれている。剱谷へのコースは西宮側は、苦楽園口から北へ上り、尾根伝いに低い松やブッシュの中を、花崗岩の風化した細い急な山稜（剱谷山中央尾根）の道が、ずっと奥池まで通じている。山陵からは、甲山や大阪湾の眺望がすばらしい。苦楽園尾根―雷岳―奥池―芦屋川のハイキングコースは、「昭和十一年三月十五日、本日初メテ観測所前ヲ通過スルハイキングコースが制定サレテ、多数登山者アリテ賑イタリ」と池野氏の日誌にも記録されている。

観測生活の日誌　〝人間灯台〟と呼ばれた愛称の背景にある観測生活の至難の足跡をその「日誌」からみると、観測所の勤務がはじめられた昭和十年三月には、飲料水

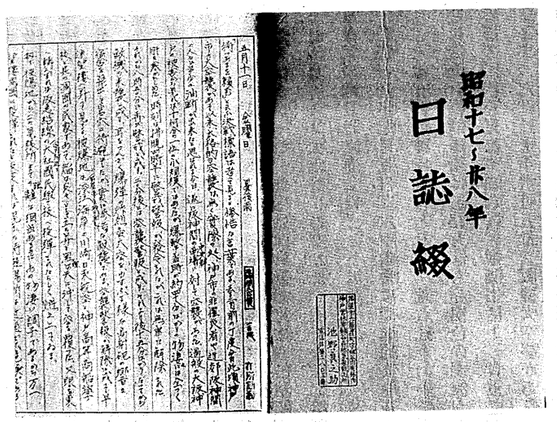


図145　観測生活を記録した日誌

も電灯もなかった。人間の侵入を防げる樹木の密生した剱谷に、地上一七メートル、鉄骨のヤグラの上に組まれた二畳ほどの木造小屋は、まさに空中キャンプの生活であった。雪の日は夜中に降った粉雪が隙間から吹きこみ、ふとんの上が真白になっていた。気温は、氷点下三〜五度にもなった。飲料水は、コンクリート製の貯水槽ができるまでは、イモリ池や谷間に掘った穴の水を利用していた。山火事の季節には、望楼の上に紅白の旗を用意し、神戸営林署芦屋出張所で看視してもらい、合図を送ることによって山火事を事前に防いだ。梅雨期には、濃霧に包まれ、徹底したゆううつと孤独感にさいなまれた。やがて灼熱の太陽の季節になると、亜鉛葺の屋根のため、室温は、三二六度を越し、貴重品の食糧が腐ってしまった。しかし、日没がすぎると、涼風の天国となり、百万ドルの夜景が楽しめた。当初は、ラジオも新聞もないので台風接近の予知ができず、望楼は、荒海に浮ぶ船のようにゆさぶられるという恐怖におそわれた。

このような経験を経て、池野氏は、耐えしのぶごとに心にゆとりを見出し、山を愛し、山に情熱を傾けるようになった。

昭和十年十一月には、待望の電話が架設され、また、望楼下に平屋建一戸が建てられ、地上生活もできるようになった。観測は、雨量・温度・湿度・気圧・風向・風速などのデーターが必要であり、観測室には、ロビンソン風速計・乾湿計などが置かれ、一日の観測は、午前六時から午後一〇時まで二時間ごとに八回行った。下山する機会は、月三回ほどで苦楽園尾根の登り降りが大変で二時間はかかった。食糧品は貴重で乾物や缶詰類が主であり、ビタミン欠乏病にもなった。酒一升は配給制のような気の配りかたをした。

昭和十三年七月五日、六甲山系に局地的集中豪雨が起り、未曽有の阪神風水害となり、荒れ狂う山中で孤立状態におかれた。市街は道路も家も赤褐色の濁流がおおい恐怖の惨状を見た。これは、観測生活上、貴重なデーターとなった。二十年六月五日、阪神大空襲があり「呪われたる五日、午前五時四十分、深い眠りは警戒警報の不

図146　山火事看視　当時の池野良之助氏（読売新聞社提供）

気味な〝サイレン〟で呼び起こされた。……神戸上空を見ると、また物凄い黒煙が大空を覆い、空は夕暮の如き奇観を呈し、まるで夜が段々と迫ってくるかと思われるように全く薄暗く成った。まるで往年の日蝕のようであった」と記されている。山頂から炎上する山麓のまちまちを怒りをもって見、自らも観測塔の上空を飛び交う艦載機から機銃掃射を受けた。不思議なことに、苦楽園・お多福山付近に、しばしば焼夷弾が落下し、突きささると発火したが、山火事にはならなかった。二十五年九月三日、戦後最大の大型台風ジェーンが来襲し、阪神間、近畿一円に大被害を残し、木造観測室が吹き飛ばされた。

三十六年、芦有道路が開通していままで苦楽園尾根をリュックを背負った時の苦労は夢のように消えてしまった。二年後には、ユース・ホステルができるなど、奥池の開発が進むにつれて山上の生活も便利になり、四十四年には電灯が引かれ、三十四年間の薄暗いランプ生活に別れをつげた。四十一年、生存者叙勲により勲七等瑞宝章を受賞、四十六年十一月、芦屋市民文化賞受賞、やがて四

十八年六月三十日、剱谷森林気象観測所は、その目的を終了して廃止ときまり、同年十二月二十日、池野氏は退官され、山を下りた。六十三歳であった。氏の随筆『遠くて長い旅は終りぬ』のなかで「今年の冬は、例年になく不順な気候を繰返しながらも六甲連山に春が訪れてきた。下界の桜が散って、観測所構内の染井吉野や椿の花がいちどに咲きはじめた。しかし、鶯や野鳥の啼声やさえずりはほとんど聞かれなくなった。そして周辺の林地には、やたらに松喰虫に犯されて赤く枯れてゆく松が多くなった。即ち下界の汚れた空気が山頂まで這い上ってきた証拠である。美しい六甲の自然の流れと環境の中で人生の半分以上を生きてきた私にとって現在の六甲の悪変貌に、強い悲しみを感じる」と記されている。

剱谷の緑の山を守って三十八年、山火事の通報や自殺未遂者の人命救助、梅雨に続く災害シーズンの苦闘、観測生活の貴重な成果『六甲山の気象累年表』（昭和二十九年三月刊）の作成、戦前・戦後を通じ詳細に記された「日誌」「静想日記」など、その生活記録は、自然と人間とのかかわりについて何がたいせつであるかを教えている。

現在、池野良之助氏は、西宮市門前町に住まいを移され、ぼう大な観測生活での自叙伝の整理をされている。

32　高座の滝とロックガーデン

高座の滝　阪急芦屋川駅から川に沿って北へ、高座川との分岐点、大僧橋をすぎると、やがて「左滝道」とある小さな道標がみられる。更に、城山登り口を右にみて山道をのぼること約二〇分で高座の滝に行きつく。ここは芦屋口ツクガーデンへの登山口で、大谷茶屋や滝ノ茶屋があって、紅葉などのシーズンには家族づれやハイカーでにぎわう。

滝は、高さ一〇メートル以上の夫婦滝で、滝水は直下の滝つぼに落下する。

むかしは、このあたりは、修験者の道場であったという。

ちなみに、この滝の三百メートル上流にある中ノ滝の北

側付近の斜面から近年、鎌倉時代初期のものと推定される土師（はじ）質灯明皿や瓦器の包含層のあることが報告されている（芦ノ芽グループ機関誌30）。このように祭祀性の遺物の出土や立地条件などから、霊場であったと思われる。滝の側には、小堂があり、その裏には不動尊が祀られている。

滝の成因は、花崗岩が断層によって高低差を生じ、河川の水位が変化して落差を生じたもの。

ロックガーデン　また、近くに、ロック・クライミングクラブ（一九二四）発祥の地としてその功をたたえる藤木九三翁のレリーフが建てられている。

ロックガーデン

岳の中毒者が季節のはざかいに鬱情をはらす、ジムナジューム――芦屋のロックガーデン――は気まぐれな〝垂直の散歩〟党の遊歩場です。霧爛した花崗岩のクーロアールに永河の感触をたのしみ、ざら場の斜面では砂スキーが享楽できるんです。そしてまたローソク岩のてっぺんでは太陽礼讃の裸体操が始まります……。（山岳詩人　藤木九三『垂直の散歩』）

ロックガーデンの名称は、「六甲の一木一草、ないしは一握一粒の土地砂は、すべて私たちの隣人である」と言われた登山家藤木九三氏などの紹介による。

ロックガーデンは、芦屋川と魚屋道にはさまれ、南は高座の滝付近より北は、荒地山までの一帯の地域である。

岩間からはい出したような松、ふれるとボロボロ崩れる風化花崗岩、温度のちがいや雨水のため、弱い部分が崩れ、かたい部分が残って特異な奇岩の様相を露出している。六甲山の地形は、急斜面が多く、地質は、花崗岩で内部も地殻変動で破砕帯や断層が走っている。しかし、六甲の山肌の明るい白さと、緑の深い色合いの対比は、谷筋の清流に映え、登山者にこよなく親しまれ、展望もよく、大阪湾を一望に、紀州や淡路まで見渡され、夜の眺めもすばらしい。

六甲の案内図を開いてみると、ゲート・ロック（懸垂岩）・キャスルウォール（平岩）・チョックストーン（ローソク岩）・グレイブス（墓場）・イタリアンリッジ（マッターホーンのイタリー側岩稜に似る）・ピラー

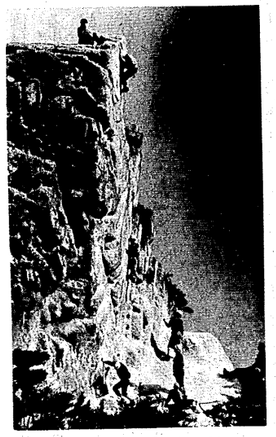


図147　昭和30年頃の風景

図148　ロッククライミング　昭和４年の風景
児玉隆男氏スケッチブック「岩とあそぶ子ら」

ロック（尖岩）などの岩場の名称がみられ、ロッククライミングのよき練習場となっている。

詩人富田砕花氏が、大正二年（一九一三）ロックガーデンで六甲の心を歌った一節

わが赤き着たる漂泊者は孤独なる
彼れの旅路をゆくことをやめず
（『赤衣の漂泊者』）

33　芦屋市霊園

剱谷・阪急バス市民病院行で、病院西口下車徒歩五分

芦屋市霊園は、市域の東北、標高二五〇メートルの剱谷国有林の丘陵地に位置している。一五万平方メートルの敷地は、背山を緑に包まれ、芝生と花と緑樹のなかに広場や水路・散策路がめぐっている。展望台からは、大阪湾が一望できる。四月の桜の開花期には、二千本の桜で、すばらしい景観となる。

かって、精道村当時の芦屋には、大原・公光・春日・

岩園・三条の共同墓地が、それぞれ自然環境にめぐまれた静寂の地にあった。しかし、阪神地方でも、最も変化のはげしい郡市化のなかで、旧幕時代からの墓地は、住宅に囲まれ、聖地としてのイメージが失われてきた。このような事情から、環境と都市計画上、市民の要望に留意し、宗教の別を問わない祖先崇拝の地として、昭和二十五年一月、近代的な市営霊園の建設計画が決定した。二十八年には、墓相学の大家、川舟喜太郎氏の指導を受け、建設に着手した。

二十九年六月、光明地蔵尊を建立し、市営三条葬場の残骨も納骨された。三十年三月には、市内各所の無縁仏を集め、ピラミッド型の無縁塔も完成した。また、東の高台には、芝生の在留外人墓地を開放している。三十三年五月、東の高台傾斜地に、市内戦歿者のため、ヒナ壇式の軍人墓地を造り、三三三柱をおまつりした。三十七年十月、市民からの寄進で、銅製の芦屋観音像が建立された。四十五年五月には、芦屋市戦災死遺族会慰霊碑を建立、また霊園内には、動物塚や歯の供養塔もおまつり

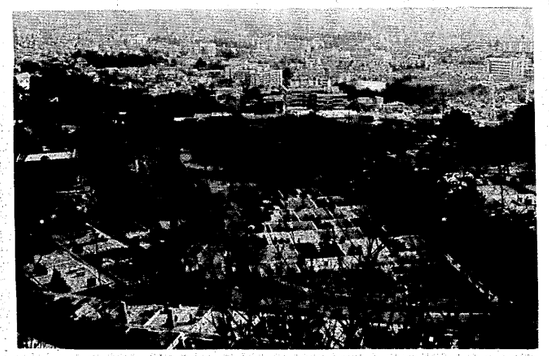


図149　霊園から市街を望む

されている。

なお、石碑のうち、石造品の様式年代では、無縁仏で山陰地方の影響のみられる鎌倉時代の一石五輪塔がある。特色のあるものとして、公光墓地から移転した凝灰岩製の中世の小形宝篋印塔（一部欠損）があり、九州系のものと考えられる。このほか、「南無阿弥陀仏」と徳本上人名号のある板碑もある。

月祭、毎月一日。大祭、毎年六月一日は、無縁仏施餓鬼供養、八月二十三日は、光明地蔵尊の地蔵盆と軍人墓地の二大祭、十月十八日は、芦屋観音大祭が行なわれる。

34　滴翠美術館

〈財団法人山口文化会館〉

山芦屋町六〇・阪急芦屋川駅北
開森橋の西北二〇〇メートル

六甲の南麓、芦屋川の清流に近い閑静の地に、ゆるやかなスロープを生かした三千坪の緑地のなかに白亜の建物がある。敷地内には、李朝・高麗などの石造品が点在し、四季を通じて訪れる人びとに特色のある美術館としての印象をあたえる。昭和三十九年十一月開館。

（美術館代表者は、見市　實）

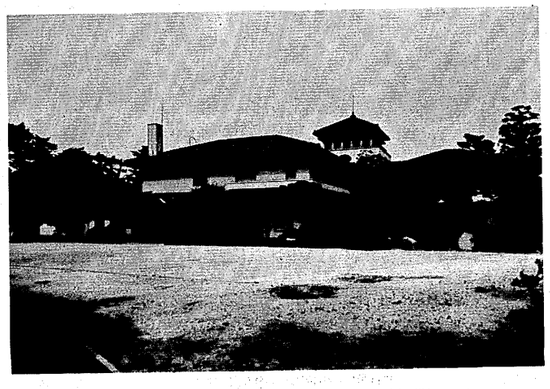


図150　滴翠美術館全景（滴翠美術館提供）

コレクション　大阪財界で活躍された山口吉郎兵衛氏が生前、〝読次楼〟と号し、古陶磁に深い関心を示し、学究的立場から収集されたもので、その範囲はひろく北陸・東海・京・近畿・山陽山陰道・九州におよび、ほかに御所江戸大奥に関する人形・羽子板・うんすんかるたなど、重要文化財を含め、数千点に上る。

館の事業は、国焼展や茶道具取合せ展・羽子板とうんすんかるた展・ペルシャ陶器七千年の歩み展などのほかアサヒカルチャーセンターの陶芸およびお茶事・県内大学生の美術展の開催など積極的に行われている。

昭和四十八年十一月、芦屋市民文化賞受賞。五十一年十一月、兵庫県文化賞受賞。五十三年十一月三日から二十一日まで、東京小田急百貨店で大規模な「滴翠美術館名品展」も開催されている。

また、理事長の山口格太郎氏は、「かるた」を専門にライフワークとして、著述に講演に活躍されている。

《休館日》月曜日（祝日開館）、年末・年始、陳列替期間、夏期在庫整理のため七月中旬～九月上旬。

付属陶芸研究所　〈滴翠窯〉　昭和四十三年、併置され、美術鑑賞の修練の場として、家庭の主婦や学生の要望に応じ、普及活動を継続し、作品発表会・展示会も行っている。現在、在日外国人も多く参加し、見学者も多い。

付属芸術研究所　〈専攻科部門〉

一、付属陶芸研究所内に、滴翠窯とは別に、三十才までの男女を対象に、専攻科二年制を設け、多くのすぐれた専門の指導者によって、陶器の研究も行なわれている。

二、昭和四十九年六月から、織機二六台を備えた、付属染織研究所が設けられ、専任講師などによる指導が続けられている。

三、別に、付属芸術研究所に、裏千家黒田宗光氏が中心となり、「お茶事研究クラブ」を二年制で設け、必要に応じ、館所蔵の名品を提供して指導されている。

表6　江戸時代（4か村）からの人口・家数の変遷

	芦屋村		打出村		三条村		津知村	
	家数	人口	家数	人口	家数	人口	家数	人口
寛文9年（1669）頃	97	597	88	638	32	169	11	81
貞享4年（1687）頃	122	784	111	912	34	211		
明和6年（1769）	182	785						
寛政元年（1789）					42	162		
文化2年（1805）	180		161		45	197	21	
文政2年（1819）	181				43	190		
明治5年（1872）	236	842			35	155	22	119
明治17年（1884）	248	1052			42	176	20	103

表7　精道村時代から現在までの人口・世帯数の変遷

	人口	戸数		人口	世帯数
明治22年（1889）	3,285人	597	昭和20年	31,098人	7,086
明治42年（1909）	3,904	762			
大正3年（1914）	5,094	1,095	昭和22年	37,033	8,665
大正8年（1919）	8,667	1,938	昭和25年	42,949	9,785
大正14年（1925）	19,101	3,886	昭和30年	50,960	11,588
昭和元年（1926）	20,586	（世帯数）3,963	昭和35年	54,839	12,800
昭和5年	28,731	5,708	昭和40年	63,195	17,082
昭和10年	35,715	6,979	昭和45年	70,938	20,681
昭和15年（市制）	41,925	8,147	昭和50年	76,211	23,824
昭和18年	40,273	8,347	昭和54年1月	75,275	23,414

時代名	西歴年代	できごと
(飛鳥)	645	大化の改新。
	672	壬申の乱。
奈良	701	大宝律令の制定。
		芦屋廃寺創建
平安		芦屋駅伝馬12疋「延喜式」にみえる。
	743	芦屋処女の歌　万葉集にみえる。
	815	芦屋漢人のことが新撰姓氏録にみえる。
鎌倉	1192	鎌倉幕府成立。
	1333	摩耶山城の戦い。
南北朝	1334	建武の中興。
	1336	楠木正成・足利尊氏の打出合戦。
室町	1338	室町幕府成立。
	1351	足利尊氏・直義の打出浜合戦。
	1473	このころ芦屋荘は北野神社が領した。
	1511	河原林政頼の鷹尾城・芦屋河原の合戦。
	1519	越水城をめぐる攻防。
	1555	芦屋庄百姓・山論にてことごとく逃散。
	1560	三好日向守の重ねての裁許により芦屋庄芦屋・打出両村百姓帰村。
	1573	室町幕府滅亡。
安土桃山	1582	芦屋庄・本庄山論。
	1583	秀吉が芦屋郷などに禁制を下した。
	1589	芦屋村と山路庄の間に芦屋川用水の割付定まる。この前後、芦屋の地が大阪城構築のための石垣石採石地となる。
江戸	1603	江戸幕府成立。
	1612	芦屋庄・本庄山論。

表8　＝芦屋の歴史略年表＝

時代名	西歴年代	できごと
先土器	10万　年	ナウマン象生息する。(奥山芦有ゲート北方にて化石発見)
	1万	土器の発生。
		朝日ケ丘先土器遺跡（後・晩期）
縄文	5000	採集経済社会の展開。
		朝日ケ丘縄文遺跡（前期）
	200	稲作農耕と金属器の伝来。
		階級社会の形成。
	B. C. / A. D. 0	
弥生	57	倭の奴国王後漢に入貢、光武帝より印綬を授く。
	107	倭国王帥弁ら生口160人を献じて朝貢す。
		倭国の大乱（魏志倭人伝)。
		女王卑弥呼の活躍・高地性集落の生成。
		会下山遺跡（弥生中・後期）
	239	卑弥呼、帯方郡に遣使、邪馬台国の時代。
古墳		古墳の発生。
	391	日本軍、朝鮮半島に出兵。
	413	倭王讃東晋に遣使。
		金津山古墳（前期）
		親王塚古墳（〃）
	478	倭王武の上表文。
	538	仏教公伝。
	562	任那の日本府滅亡。
		八十塚古墳群（後期群集墳）
	607	小野妹子遣隋使。

時代名	西暦年代	できごと
江戸	１６１５	芦屋庄・本庄山論。
	１６１７	戸田氏鉄尼崎に転封、芦屋・打出・津知・三条各村を支配。
	１６３５	戸田氏　大垣へ転封、青山幸成が尼崎城主となる。
	１６６１	芦屋村に検地が行なわれた。
	１６６３	三条村に検地が行なわれた。
	１６９４	藩主青山幸督が2000石を弟幸澄に分与したため浜芦屋新田は幸澄の所領になった。
	１６９５	打出村大火。
	１７１１	青山氏が転封し、松平忠喬が尼崎に移ってきた
	１７５０	天文年間に起った社家郷６村・本庄９村と芦屋・打出２村との間の山論に裁許が下り、芦屋・打出の勝訴が決定した。
	１７６９	尼崎藩は武庫・菟原・八部三郡のうち灘筋を天領として収公されたため、芦屋・打出村は幕末まで天領となった。
	１８００	東川用水一の井手取水刻限をめぐって芦屋村と中野・深江・森・三条・津知村との間に水論おこる。
	１８０５	菜種の自由販売を求め、摂津・河内 568 ケ村の国訴がおこり、芦屋の村々もこれに参加。
	１８４１	猿丸安時が奥山池の開さくを始めた。
明治	1868（明治１）	神戸事件おこり、打出陣屋に伝えられた。
	1871（明治４）	廃藩置県、尼崎藩は尼崎県と改称、ついでこれを廃し、兵庫県に合併。
	1872（明治５）	芦屋（精道小の前身）・打出小学校開校。

時代名	西暦年代	できごと
明治	1874（明治７）	大阪・神戸間に鉄道開通。
	1880（明治13）	菟原郡役所と武庫郡役所を合併して武庫菟原郡役所と称し庁舎を西宮においた。
	1886（明治19）	芦屋小学校を精道小学校と改称。
	1889（明治22）	町村制実施、芦屋・打出・三条・津知４村を合併して精道村が誕生した。
	1896（明治29）	武庫・菟原・八部３郡を廃し、その区域を新しく武庫郡とした。
	1905（明治38）	阪神電車開通、芦屋打出２停留場設置。
	1908（明治41）	電灯がついた。
大正	1912（大正１）	芦屋郵便局設置。ガスの供給開始。
	1913（大正２）	東海道線芦屋駅開設。
	1914（大正３）	電話交換事務開始。
	1920（大正９）	阪急電車開通、芦屋川停留所設置。
	1923（大正12）	精道村役場の新庁舎竣工。郡制廃止。
昭和	1927（昭和２）	阪神国道開通。芦屋警察署創設。国道電車開通。
	1929（昭和４）	六麓荘の開発がはじまった。
	1934（昭和９）	省線電化。大暴風雨。
	1938（昭和13）	村営上水道完成し給水開始。大暴風雨。
	1940（昭和15）	11月10日芦屋市制を施行、全国で173番目の新市である。県立芦屋中学校(現、県立芦屋高校)開校。
	1945（昭和20）	空襲しばしばあり。
	1950（昭和25）	９月３日ジェーン台風。12月１日芦屋市教育委員会設置。 12月６日芦屋国際文化住宅都市建設法案、国会で可決。
	1951（昭和26）	２月11日芦屋国際文化住宅都市建設法の住民投

時代名	西暦年代	できごと
昭和		票執行通過、3月3日同法公布。
	1952（昭和27）	市営霊園の建設開始。花原ゴルフ場開場。
	1956（昭和31）	第二阪神国道着工。第11回国体開催。
	1957（昭和32）	阪急立体交差完成。国鉄快速電車の停車。
	1960（昭和35）	市制20周年。
	1961（昭和36）	5月24日米国モンテベロ市と姉妹都市提携。
	1962（昭和37）	市立芦屋高等学校開校。新消防庁舎落成。
	1963（昭和38）	市立芦屋病院本館落成。市民会館使用開始。
	1964（昭和39）	芦屋市民憲章制定。ユネスコ会館落成。
	1965（昭和40）	奥山浄水場最高区配水流完成。
	1967（昭和42）	市民文化賞制定。し体不自由児みどり学級開設。
	1968（昭和43）	福祉センター落成。
	1969（昭和44）	海浜埋立工事着手。
	1970（昭和45）	芦屋市同和対策審議会答申。市民会館ルナ・ホール開場。
	1971（昭和46）	総合計画基本構想できる。奥山貯水池完成。健康センター開設。新修芦屋市史本篇刊行。
	1972（昭和47）	市立体育館・青少年センター完成。
	1973（昭和48）	緑ゆたかなまちづくり条例を施行。
	1975（昭和50）	芦屋浜埋立地造成完成。
	1976（昭和51）	埋立地の町名きまる。市民センター別館オープン。
	1977（昭和52）	埋立地内環境処理センター完成。
	1978（昭和53）	三条コミュニティースクール発足。
	1979（昭和54）	芦屋浜シーサイドタウン入居開始。

表9　参　考　文　献（抄）

書名	編著者	発行年
摂陽群談	岡田俣志	元禄 14
兵庫名所記	植田下省	宝永 7
摂津志	並河誠所	享保 19
摂津名所図会	秋里籬島	寛政 8
播州名所巡覧図絵	秦石田	享和 3
西摂大観	仲彦三郎	明治 44
摂津郷土史論	日本歴史地理学会	大正 8
武庫郡誌	武庫郡教育会	〃 10
芦屋の里	島之夫	昭和 4
六甲	竹中靖一	〃 8
明治維新　神戸事件	岡久渭城	〃 13
打出史話	天王寺谷勘太夫	〃 15
武庫川六甲山附近　口碑伝説集	辰井隆	〃 16
六甲気象観測所　静想日記	池野良之助	〃 17
本山村誌	本山村誌編纂委員会	〃 28
旧版　芦屋市史　年表	漁澄惣五郎編　芦屋市教育委員会	〃 28
〃　〃　史料篇1	〃　〃	〃 30
〃　〃　本篇	〃　〃	〃 31
〃　〃　史料篇2	〃　〃	〃 32
〃　〃　史料拾遺	末中哲夫編　〃	〃 36
兵庫の民話	宮崎修二朗・徳山静子	〃 35
芦屋郷土誌	細川道草　芦屋史談会	〃 38
芦屋市文化財調査報告　第1集～第8集	芦屋市教育委員会	〃 34～49
フランク・ロイド・ライト	谷川正己	〃 42
旧山邑邸理解のために	日本建築学会近畿支部旧山邑邸保存問題特別委員会	〃 47
新修　芦屋市史　本篇	武藤誠編　芦屋市	〃 46
〃　〃　史料篇1	〃　〃	〃 51
郷土の民話（阪神編）	兵庫県学校厚生会	〃 48
芦の芽グループ資料篇第4集「石造文化財」	芦の芽グループ	〃
六甲史話（福原会下山人郷土史話シリーズ）	福原源九郎	〃
伝説の六甲山系（「市民のグラフこうべ」）	田辺眞人・位原庸太	〃
芦屋市の歴史（「兵庫」）	田辺眞人	〃 52
ふるさと兵庫の文学地誌「環状彷徨」	宮崎修二朗	〃 52
兵庫のふるさと散歩（神戸・阪神・三田編）	21世紀ひょうご創造協会	〃 53

本文図版目次

【第2章】

図1　阪口喜蔵家から寄贈の農具類……13
図2　阪口喜蔵家住宅屋根うら……18
図3　明治19年、阪口家住宅の記録……19
図4　阪口家住宅 1階平面図……20
図5　阪口家住宅 2階平面図……20
図6　幸田家住宅断面図……22
図7　幸田家住宅平面図……22
図8　解体前の幸田家住宅……24
図9　同住宅屋根うらへの上り口……24
図10　大正6年、岩ケ平丘陵農村風景……25
図11　宮本家住宅〝すだれ壁〟……26
図12　同住宅全景……26
図13　間取略図……26
図14　小阪家住宅全景……28
図15　同住宅納屋及び庭先……28
図16　同住宅間取略図……28
図17　農事次第之図屏風（A）……30
図18　農事次第之図屏風（B）……30
図19　モミツケ……31
図20　種籾を引き上げる……31
図21　種籾を俵からむしろにあげる……31
図22　モミマキ……32
図23　すき起こし……32
図24　苗代の鳴子とかがし……32
図25　代かきのようす……33
図26　牛の鞍……33
図27　牛の鞍……33
図28　竜骨車……33
図29　苗取り……34
図30　田　植……34
図31　子どもを連れ農作業に昼食を運ぶ人……34
図32　水掛けのようす……35
図33　除　草……35
図34　クマデガエシ……35
図35　稲　刈……36
図36　農作業に昼食を運ぶ人……36
図37　稲束を牛に乗せて運ぶ子……36
図38　稲　扱……37
図39　千歯扱……37
図40　千歯扱……37
図41　千歯扱を組合せる……37
図42　カラサ打ち……38
図43　籾摺り……38
図44　籾摺臼のカセ……38
図45　籾摺臼……38
図46　唐　箕……39
図47　唐箕実測図……39
図48　万石通実測図……40
図49　万石通……40
図50　万石通……40
図51　万石通……40
図52　米を倉に収めるまでの作業……41
図53　天秤と錘……41
図54　錘……41
図55　1斗枡・トボ……41
図56　初穂を神に供える……42
図57　ニチョウカラスキ……42
図58　鋤　簾……42
図59　イトクリ……43
図60　木綿繰り……43
図61　ランプ……43
図62　ニナイ桶……44
図63　桶……44
図64　ハンボウ……44
図65　味噌桶……45
図66　水　桶……45
図67　四斗樽……45
図68　撥釣瓶の桶……46
図69　柄　杓……46
図70　マエビキ……46
図71　手　焙……47
図72　炭トリ……47
図73　用心太鼓……47
図74　石　臼……48
図75　手カギ……48
図76　ト　ビ……48

【第3章】

図77　春日土地区画整理事業計画図……50
図78　春日町旧街道のおもかげ……55
図79　春日地区旧西国街道沿いの街並み復原……53
図80　〃……53
図81　石造遺品分布図……56
図82　打出春日町28　所在の石造遺品……61
図83　打出春日町49　〃……61
図84　打出春日町49　〃……61
図85　打出小槌町36　〃……62
図86　打出春日町114　〃……62
図87　打出小槌町36　〃……62
図88　若宮町3　〃……63
図89　打出小槌町86　〃……63
図90　打出小槌町2　〃……63
図91　地蔵盆風景……64
図92　尼崎より明石までの海道名所図……66
図93　摂津名所図会にみる芦屋の里……74
図94　地図にみる70年前の芦屋……79

【第4章】

図95　民家の石垣に残されている水車臼……83
図96　石つきうた……85
図97　公光墓地にあった力士の石碑……89
図98　しゃこ踊り……89
図99　地曳きされるダンジリ……90

【第5章】

図100　松浜公園内にあるぬえ塚の碑……95
図101　フカ切り雨乞い掛軸……96
図102　伝猿丸太夫之墓……102

【第6章】

図103　ナウマン象の下あご骨の化石……105
図104　朝日ケ丘遺跡出土の石器……107
図105　会下山遺跡から武庫平野を望む……109
図106　会下山遺跡出土の弥生式土器……110
図107　芦屋川から城山を望む……112
図108　漢式三翼鏃……113
図109　楠町出土の流水文銅鐸（実測図）……114
図110　金津山古墳……116
図111　阿保親王塚の森（南面から）……118
図112　「陳孝然作竟」銘の三角縁神獣鏡……119
図113　八十塚A号墳の石室（実測図）……121
図114　山芦屋古墳石室……123
図115　古墳をつくる人びと（想像図）……124
図116　三条出土カマド形土器……125
図117　芦屋廃寺址塔心礎……127
図118　芦屋廃寺創建期の軒丸瓦……128
図119　鷹尾城の攻防……129
図120　大楠公戦跡碑……133
図121　大阪城東外濠刻印……134
図122　野外活動センター周辺（A）……134
図123　野外活動センター周辺（B）……134
図124　東六甲採石場の刻印群分布……135
図125　ドビワリの位置略図……137
図126　打出陣屋之図……139
図127　猿丸安時水神の祠の碑文……143
図128　奥池、奥山貯水池（展望台より）……144
図129　芦屋神社略図……145
図130　毛剃九右エ門博多小女郎波枕（絵馬A）……148
図131　牛若丸鞍馬山修業（絵馬B）……148
図132　阿保天神社……149
図133　修築中発見された文政三年の棟木……151
図134　日吉神社境内の石祠……152
図135　親王寺内にある板碑……153
図136　神宮寺本尊十一面観音像……155
図137　開森橋西詰にあった名木「汐見桜」……156
図138　「行基の松」の碑……158
図139　大正時代の芦屋川風景……159
図140　打出焼窯元……161
図141　「壁土を打つ人」打出丘陵……162
図142　打出焼製作工程……163
図143　車寄せ外観全景、旧山邑家住宅……164
図144　鰻谷森林気象観測所望楼……167
図145　観測生活を記録した日誌……168
図146　山火事看視……170
図147　昭和30年頃の風景……173
図148　ロッククライミング……173
図149　霊園から市街を望む……174
図150　滴翠美術館全景……175

本文図表目次

【第2章】

表1　芦屋市民家分布調査確認一覧表……16
表2　芦屋市民家分布調査確認一覧表……17
表3　稲作の作業過程……29

【第3章】

表4　石造遺品分類表……55
表5　石造遺品分布・確認一覧表……57
表6　江戸時代からの人口・家数の変遷……178
表7　精道村時代から現在までの人口・世帯数の変遷……178
表8　芦屋の歴史略年表……179
表9　参考文献（抄）……184

芦屋の生活文化史

——民俗と史跡をたずねて——

昭和54年3月31日　印刷 発行

発行者　兵庫県芦屋市教育委員会
芦屋市精道町7番6号

印刷所　興陽紙業株式会社
大阪市福島区福島1丁目2番7号

38459

執筆・編集者紹介

田辺眞人　兵庫県立芦屋高等学校教諭
位原庸太　兵庫県立西宮北高等学校講師
渡部永子　神戸市民俗芸能調査員

岩本昌三　芦屋市教育委員会
森岡秀人　芦屋市教育委員会

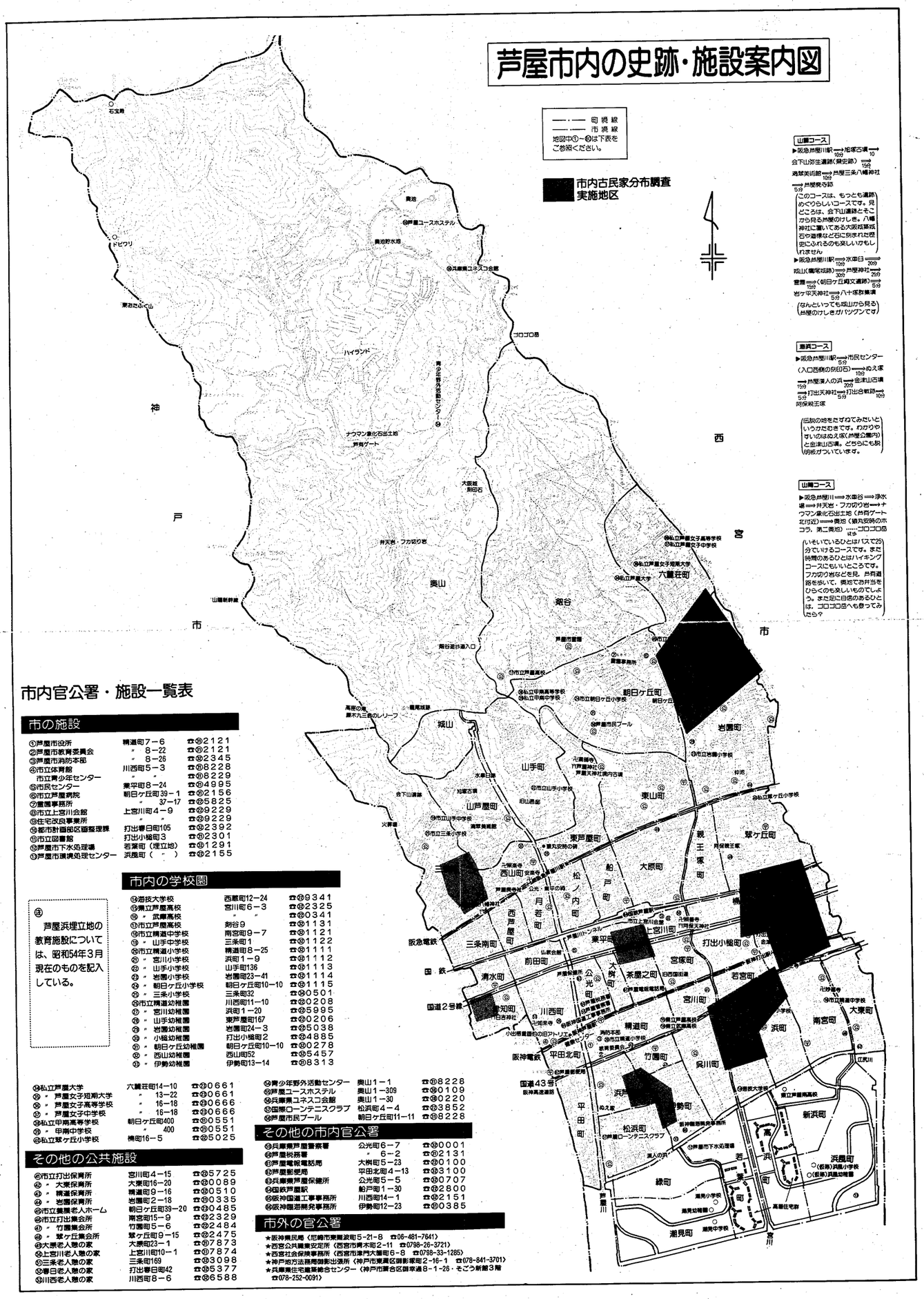
執筆・編集協力者

藤川祐作　芦の芽グループ代表
田渕好美　神戸女子大学文学部学生
奥出津代子　甲南大学文学部学生
小野山和子　武庫川女子大学文学部学生

岩崎宏美・古川久雄・岩崎菜穂子・渡部安子

38

芦屋市内の史跡・施設案内図



山麓コース

▶阪急芦屋川駅 ⟹(10分) 旭塚古墳 ⟹(10分) 会下山弥生遺跡(景史跡) ⟹(10分) 鴻草美術館 ⟹(10分) 芦屋三条八幡神社 ⟹(5分) 芦屋廃寺跡

(このコースは、もっとも遺跡めぐりらしいコースです。見どころは、会下山遺跡とそこから見る芦屋のけしき。八幡神社に置いてある大阪城築城石や道俣などと石に刻まれた歴史にふれるのも楽しいひとときにちがいありません)

▶阪急芦屋川駅 ⟹(10分) 水車谷 ⟹(20分) 城山(鷹尾城跡) ⟹(30分) 芦屋神社 ⟹(25分) 倉庫 ⟹(15分) 〈朝日ケ丘縄文遺跡〉 ⟹(5分) 岩ケ平天神社 ⟹(5分) 八十塚数基遺跡

(なんといっても城山から見る芦屋のけしきがバツグンです)

海浜コース

▶阪急芦屋川駅 ⟹(5分) 市民センター(入口西側の刻印石) ⟹(10分) ぬえ塚 ⟹(10分) 芦屋浦人の浜 ⟹(20分) 金津山古墳 ⟹(5分) 打出天神社 ⟹(5分) 打出合戦跡 ⟹(10分) 時保親王塚

(伝説の地をたずねてみたいというかたむきです。のびのびすいのはぬえ塚(芦屋公園内)と金津山古墳。どちらにも説明板がついています。)

山麓コース

▶阪急芦屋川 ⟹ 水車谷 ⟹ 浄水場 ⟹ 弁天岩・フカ切り岩 ⟹ ナウマン象化石出土地(芦有ゲート北付近) ⟹ 奥池(源丸安時のホコラ、第二奥池) ……ゴロゴロ岳(45分)

(いそいでいるひとはバスで25分でいけるコースです。また時間のあるひとはハイキングコースにもいいところです。フカ切り岩などを見、芦有道路を歩いて、奥池でお弁当をひらくのも楽しいものでしょう。また足に自信のあるひとは、ゴロゴロ岳へも登ってみたら?)

市内官公署・施設一覧表

市の施設

①芦屋市役所	精道町7－6	☎㊀2121
②芦屋市教育委員会	〃 8－22	☎㊀2121
③芦屋市消防本部	〃 8－26	☎㊀2345
④市立体育館	川西町5－3	☎㊀8228
市立青少年センター	〃 〃	☎㊀8229
⑤市民センター	業平町8－24	☎㊀4995
⑥市立芦屋病院	朝日ケ丘町39－1	☎㊀2156
⑦霊園事務所	〃 37－17	☎㊀5825
⑧市立上宮川会館	上宮川町4－9	☎㊀9229
⑨住宅改良事業所	〃 〃	☎㊀9229
⑩都市計画部区画整理課	打出春日町105	☎㊀2392
⑪市立図書館	打出小槌町3	☎㊀2301
⑫芦屋市下水処理場	若葉町（埋立地）	☎㊀1291
⑬芦屋市環境処理センター	浜風町（〃）	☎㊀2155

㊁ 芦屋浜埋立地の教育施設については、昭和54年3月現在のものを記入している。

市内の学校園

⑭西宮技大学校	西蔵町12－24	☎㊀9341
⑮県立芦屋高校	宮川町6－3	☎㊀2325
⑯ 〃 武庫高校	〃 〃	☎㊀0341
⑰市立芦屋高校	剣谷9	☎㊀1131
⑱市立精道中学校	南宮町9－7	☎㊀1121
⑲ 〃 山手中学校	三条町1	☎㊀1122
⑳市立精道小学校	精道町8－25	☎㊀1111
㉑ 〃 宮川小学校	浜町1－9	☎㊀1112
㉒ 〃 山手小学校	山手町136	☎㊀1113
㉓ 〃 岩園小学校	岩園町23－41	☎㊀1114
㉔ 〃 朝日ケ丘小学校	朝日ケ丘町10－10	☎㊀1115
㉕ 〃 三条小学校	三条町32	☎㊀0501
㉖市立精道幼稚園	川西町11－10	☎㊀0208
㉗ 〃 宮川幼稚園	浜町1－20	☎㊀5995
㉘ 〃 山手幼稚園	東芦屋町167	☎㊀0206
㉙ 〃 岩園幼稚園	岩園町24－3	☎㊀5038
㉚ 〃 小槌幼稚園	打出小槌町2	☎㊀4885
㉛ 〃 朝日ケ丘幼稚園	朝日ケ丘町10－10	☎㊀0278
㉜ 〃 西山幼稚園	西山町52	☎㊀5457
㉝ 〃 伊勢幼稚園	伊勢町13－14	☎㊀8313
㉞私立芦屋大学	六麓荘町14－10	☎㊀0661
㉟ 〃 芦屋女子短期大学	〃 13－22	☎㊀0661
㊱ 〃 芦屋女子高等学校	〃 16－18	☎㊀0666
㊲ 〃 芦屋女子中学校	〃 16－18	☎㊀0666
㊳私立甲南高等学校	朝日ケ丘町400	☎㊀0551
㊴ 〃 甲南中学校	〃 400	☎㊀0551
㊵私立慧ケ丘小学校	槌町16－5	☎㊀5025

その他の公共施設

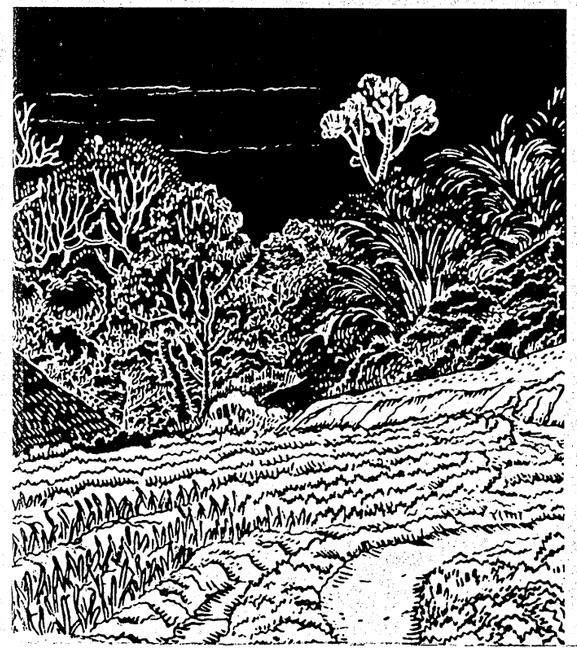
㊶市立打出保育所	宮川町4－15	☎㊀5725
㊷ 〃 大東保育所	大東町16－20	☎㊀0089
㊸ 〃 精道保育所	精道町9－16	☎㊀0510
㊹ 〃 岩園保育所	岩園町2－18	☎㊀0335
㊺市立集隣老人ホーム	朝日ケ丘町39－20	☎㊀0485
㊻市立打出集会所	南宮町15－9	☎㊀2329
㊼ 〃 竹園集会所	竹園町5－6	☎㊀2484
㊽ 〃 慧ケ丘集会所	慧ケ丘町9－15	☎㊀2475
㊾大原老人憩の家	大原町23－1	☎㊀7873
㊿上宮川老人憩の家	上宮川町10－1	☎㊀7874
(51)三条老人憩の家	三条町169	☎㊀3098
(52)春日老人憩の家	打出春日町42	☎㊀5377
(53)川西老人憩の家	川西町8－6	☎㊀6588
(54)青少年野外活動センター	奥山1－1	☎㊀8228
(55)芦屋ユースホステル	奥山1－309	☎㊀0109
(56)兵庫県ユネスコ会館	奥山1－30	☎㊀0220
(57)国際ローンテニスクラブ	松浜町4－4	☎㊀3852
(58)芦屋市民プール	朝日ケ丘町11－11	☎㊀8228

その他の市内官公署

(59)兵庫県芦屋警察署	公光町6－7	☎㊀0001
(60)芦屋税務署	〃 6－2	☎㊀2131
(61)芦屋電報電話局	大桝町5－23	☎㊀0100
(62)芦屋郵便局	平田北町4－13	☎㊀3100
(63)兵庫県芦屋保健所	公光町5－5	☎㊀0707
(64)国鉄芦屋駅	船戸町1－30	☎㊀2800
(65)阪神国道工事事務所	川西町14－1	☎㊀2151
(66)阪神臨海開発事務所	伊勢町12－23	☎㊀0385

市外の官公署

★阪神県民局〈尼崎市東難波町5－21－8 ☎06－481－7641〉
★西宮公共職業安定所〈西宮市青木町2－11 ☎0798－26－3721〉
★西宮社会保険事務所〈西宮市津門大箇町6－8 ☎0798－33－1285〉
★神戸地方法務局神戸出張所〈神戸市東灘区御影郡町2－16－1 ☎078－841－3701〉
★兵庫県住宅建築総合センター〈神戸市葺合区御幸通8－1－26・そごう新館3階 ☎078－252－0091〉

1979

兵庫県芦屋市教育委員会